

「カー、カー、カー」カラスがうるさい！ サブロウはカラスがきらいだ。真っ黒ででかい。声も大きくて品がない。なにかたくらんでいるようで存在が不気味だ。裏山に巣があるようで、何羽も飛んでくる。

今日は日曜日、ゆっくり寝ようと思っていたのに朝から「カー、カー」と合唱だ。

「うるせーな、いかげんにしろよー」

サブロウは以前、「退治してやる」と、勇んで長い棒を持って巣に近づいたことがあった。しかしカラスが二羽、バサバサと向かって来ると、怖くなって逃げ帰ってしまった。あきらめないサブロウは、「よーし、こっちは文明の利器がある」と、レーザーポインターで脅かすことを思いついた。

サブロウは遠くからレーザー光を照射したが、カラスは全然平気だ。

「やっぱこの出力じゃダメか……」

秋葉原でこのレーザーポインターを買うとき、「めいっぱいパワーのあるやつ」と、店員に頼んだのだが、「昔はすごい出力のがありましたけど、いまは規制があるのでパワーは全機種同じです」と言われて、しかたなく、いかにも強そうな外観の機種を買ったのだ。

「ちえっ、見た目だけか！」サブロウは、カラスに敗北した気持ちになって落ち込んだ。

田中三郎は中堅の機械販売会社の営業マンである。私大の商学部を卒業し、すぐこの会社に入った。機械物は好きではないが、彼は営業部に向いていたようで、成績は上々だ。しかし仕事柄、機械の知識が豊富なのに反して、なぜかサブロウは手先が全く不器用なのである。

カラスの件で、彼は自宅を防音式にしようと思いついた。都合の良いことに隣は大工だ。隣に頼めばよい。

「コーコー？」

サブロウは寝ぼけたままで隣に行き、陽子を呼び出した。

陽子が出てきた。

「朝から何よ？ あなた顔ぐらい洗ったらどう？」

陽子は腕を組んでサブロウを睨んで言った。

「おはよう、もうカラスがうるさくてどうしようもない、窓を防音にしたいんだけど……」確かにカラスはうるさいけど防音にするほどの事か？ 陽子は軽くあしらった。

「何か買ってきて窓にフタをすれば済むんじゃない？ ドライバー一本でできるよ」

「コー」、俺にはムリだって知ってるじゃん、やっつけてくれないの？」

泣きそうな顔ね、しかたない、やってやるか、陽子はOKした。

「いいけど仕事だからね！ 高いよー」

「子供のころからだけど、あなたってホント不器用ね、クギも打てないし」

それを聞いてサブロウが反論した。

「家を一軒、まるまる建てられる女がいる方が不自然だろっ！ オレは普通だよー」

星陽子は大工の娘であるだけでなく、生まれつき超、器用な女だ。サブロウの言うこのの方が自然かもしれない。

「あんたみたいに超、不器用な人が機械を売るなんて考えられない。きっとみんな騙さ

れてるのね」

陽子の言い方に、サブロウはさすがに力チンときた。

「騙すなんてひどい言い方じゃんか、オレはウソを言って売ったことなんてないよ！」

幼なじみのヨーコは、サブロウにはきつい事も遠慮なく言ってしまう。しかし今回はさすがに言い過ぎた。

「ごめん、ちょっと言い過ぎた。でも、おかげで目が覚めたでしょ……」

「もういいよ、おまえのこと女と思ってないから」

「防音工事だけど、来週前半は大工仲間の手伝い仕事があって、そのあと材料が届くとすると、早くても再来週の仕事になっちゃうよ」と、陽子が予定を言った。

いつも陽子に圧倒されているサブロウであったが、たまにはちょっといいところを見せようと、来週後半に開催される機械の展示ショウに陽子を誘うことを思いついた。

「来週金曜日から（東日本工作機械ショウ2020年）があるんだけど見に行かない？」

「いろんな機械が出展されてて、ヨーコが見ても面白いぞ……行くか？」

陽子はサブロウの誘いに乗った。サブロウが営業の時、どんな振る舞いをしているのか興味がある。

会場は横浜の旧山下ふ頭にある新コンベンションセンターだった。海の際に立つ、通称カジノタワーと呼ばれる世界最大のタワーの近くだ。

「すごい……」タワーの近くまで来ると、だれもが見上げてしまう。赤というよりオレンジ色に近いタワーだ。東京にスパータワーというタワーがあるのになぜ横浜に、と話題になったが、世界一の高さにして、東京スパータワーを圧倒するのが目的だったと言われている。

カジノ法が施行されて数年、横浜にカジノが出来始め、周囲の雰囲気は大きく変わった。カジノの広告塔としての狙いは当たったようだ。

陽子は、大工という仕事柄、タワーの構造に目が行ってしまう。

「三角形の組み合わせでしっかり組めてるみたいだけど、足の根元が異様に太すぎてバランス悪そうね……でもまあ、丈夫過ぎて困ることはないわね」

「やっぱ今日は風が冷たい……服装は正解だったみたいね」

寒いのを予想して陽子はゴテゴテと着込んで来たのだ。

「コンベンションセンターに着いた。」

「サブロウ……どこにいるの？」

サブロウは出展メーカーのブースを顧客と一緒に見て回るのが仕事だ。顧客の反応を見れば買いそうだと言われると聞いていた。さて、サブロウを見つけないと……陽子は彼が居そうなブースを当たった。

いた。サブロウが顧客に説明をしているところだった。

シャキットしている。家にいるサブロウとは別人だ。男はスーツを着ると格好良く見える。

それだけではない。顧客とメーカーの間に入ってキビキビと動き回っている。目つきも違う。陽子は目を疑った。

「こんにちは」

聞いたことのある声に振り返った。サブロウの同僚、山内さんだった。

「今日、あなたが来るって聞いてました。いまサブロウは商談中ですね」と言って、山内

さんはサブロウを目で追いながら陽子を休憩テーブルに誘った。

「サブロウはもうすぐこっちに来ますよ」

陽子はサブロウについて山内さんに聞いてみたかったことがある。

「本人いないから、今のうちに聞きますけど、サブロウの営業成績ってどうなんですか？
けっこう売るんですか？ 私たち幼なじみなんて遠慮なく聞かせてください」

「抜群です。彼の部門では営業実績第二位です。彼の上にいるのは長年会社一番のベテランの営業マンですけど、その人に迫ってます」

「本当ですか？　なんでそんなに売るんだろう？　私の知るサブロウは、だらしなくて弱気で不器用で……」

「それがいいですよ……営業マンって強そうだとダメなんです。気が弱そうで一生懸命だと、つい応援したくなっちゃうんです。かわいそうだから買ってやるか……ってね」

「それは演技だとバレちゃうんですよ。人柄から染み出たもんじゃないと……」

「そういう意味では彼は天賦のものがあります、私にはマネできません」
なるほど、そうだったのか。陽子は妙に納得した。

サブロウがやってきた。

「なにか私の悪口言ってたでしょう。わかりますよ」
いきなりズバリのサブロウの言葉に陽子は焦った。

「い、意外とちゃんとしてるじゃん。ちょっと見直した」

ヤバイ、ここはサブロウのテリトリーだ……彼のペースに嵌められそうだ、反撃しなきゃ。陽子が次の言葉を探しているとサブロウが追撃してきた。

「陽子、ファクションがダサイ！　なに、その恰好！」

サブロウの一言に——やられた——たしかに着込んでポテポテの恰好で来てしまった。
「デートじゃないからこれでいいの！」

やっと反撃した陽子であったが、次の一言で勝負がついた。

「これだけ人がいるところに来るからには、女性はファクションに気を使わなきゃ」
「ま、ブスで諦めている娘はそれなり……」

クッソー、やられた。サブロウに仕返しされた。陽子は負けを認めた。
「あんたの勝ち……機械を見せに連れてって」

気を取り直した陽子は、サブロウと一緒に会場を回ると、あるブースに目が留まった。
なんとそこには（ヒト）型ロボットが大工の恰好でデモンストレーションをする「コーナ―」があった。

「サブロウ、このロボット、クギ袋下げてトンカチ持ってるけど、ほんとにクギ打てるの？」
陽子は不思議そうな顔をしている。

「ああ、このデモ、前にも見たけど、ロボットがクギ打って箱作っちゃうんだ」
「始まるよ」

ロボットは左手と足を使って板を支え、器用に右手でクギを出し、トンカチで打ち始めた。「トントント、バタッ、トントント」みるみる間に立方体の箱を作ってしまった。

「ゲーッ、なにこれ、これって難しいんだよ……」

「片手でクギを立てて打ち始めるのはシロウトにはできないよ！」

陽子は唖然とした。

「これ、まだ序の口……これの二倍速を見ると感動するよ」

「トン、バタッ、トン、トン」

ロボットは早送りの映画を見るようなすごい速さで箱を作ってしまった。

「どう？ ヨーコ、……すごいでしょう……」

サブロウが（ニヤケ）ている。

「なによ、……自分がやったみたいに言わないでよ！」

「あんたがこれをやれたら、あたし、坊主になってやる！」

陽子が興奮している。それだけシヨックが大きかったのだ。

「こんなの出てきたらウチは廃業ね……」

こんどは沈んだ。いつも陽子にドヤされているサブロウは、面白くてしかたがない。

「かわいそうに……ハグしてやろうか」と言いながらサブロウが調子に乗って陽子の肩に手を乗せた。

「イテテッ」

陽子がサブロウの手をひねって投げ飛ばした。陽子は合気道初段の腕前だ。

「ウワッ」

サブロウは見事に床に転がされてしまった。

何事か？ 近くの皆の視線が一斉に集まった。ちょっとやり過ぎたか——陽子が場を取り繕った。

「ゴメン、足が長くてひっかかっちゃった」

陽子がサブロウを引き起こして、服をパタパタと叩いてやった。周囲は——なんだ、何もなしかと自然に戻った。

「もー、場所を考えろよ、この超オテンバ娘！」

「確信した！ おまえは絶対ヨメに行けない！ 両親はすごくいい人なのに、なんでこんなバケ物が生まれたんだろ……突然変異だな！」

二人のドタバタ騒ぎに、山内があきれて近寄ってきた。

「ちよっと、……周りがまた注目してますよ、向こうへ行きましょう」

「すごいですね、殴り合いとかするんですか？」

山内はマジに心配している。

「オレ、子供のころは毎日陽子に殴られて泣いてた。こいつは女じゃない……」

「サブロウ、停戦！」

陽子はさすがに気恥ずかしくなったか停戦を申し出た。

「了解、——頼むからここでは女のふりをしてくれよな」

また言ってしまった。ひとこと多かったかな？ サブロウは横目で陽子を見たが、意外にも反発は収まったようだ。

サブロウは陽子を連れて会場を見て回った。NC（コンピュータ制御）工作機械など、普通の女性なら興味がないが、やはり陽子は違う。機械が自動で物を作るのを興味津々に見ている。そういうえば子供の頃から陽子が人形など持っているのを見たことがない。

二人で高速旋盤のデモを見ていると、「あっ、東海産業の社長だ」サブロウが顧客に気付いた。「超、お得意さんだから挨拶しないと。陽子、あとは自分で勝手に見て、」サブロウは陽子を放り出して社長の相手を始めた。

「バイ、サブロウ、今日はありがと」陽子はその日いっぱいまで会場を回った。

数日前からカラス騒音対策防音工事が続いている。今日が完成予定日だ。サブロウは先日の展示ショウへの出勤で代休を取っている。午前中で防音工事は終わってしまった。

「サブロウ、この間のロボット大工のデモ、やってみようか」

陽子はサブロウの前で箱作りの芸を見せるつもりだ。

「拝見しよう」

サブロウは陽子の大仕事をしっかりと見たことがない。

「いい、見せて」陽子はロボットのデモそっくりの作業を見せた。

「この、クギを片手でさっと立てるところが腕。手のひらに金物を挟んでおいてそれでクギをちよっと押すの。そうするとクギが立つでしょ」

「トントん、バタッ、トントん」

陽子は解説しながら、さっと箱を作ってしまった。

「すごい、立派、立派、天才」サブロウは正直すごいと思った。

「人間がやるとやっぱ実感が違うね、いやーすごい技だ」

「あなた、これに乗ってみて」

陽子に促されてサブロウは恐る恐る箱に乗ってみた。

「ウワッ、頑丈」サブロウが乗っても箱はビクともしない。

「クギで打っただけでこんなに丈夫になるもの？」

サブロウは感心している。

「課題をあげる、この箱をバラして」

陽子が妙な提案をした。

「ボールと玄能(金づち)を貸すからやって」

「組むのは無理に決まってるけど、バラすのぐらいできるでしょ」

「まあ、できるかもね……」

サブロウは金づちとボールを持ったが、いざバラそうとすると、どこから手をつけていいのか、皆目見当がつかない。

「ボールで剥がすんだと思うけど、箱がぴったり出来過ぎてて、ボールの先端を差すところがないよ、どうやるの？」

「プッ、陽子が吹き出した」

「板の境目にボールの先を打ち込むに決まってるでしょう」

「おう、実はオレもそう思ってた」

そう言いながらサブロウがボールを当てて金づちで打った。

「バンッ、ズルッ」

箱が動いてしまってボールが刺さらない。

「足で抑えるのよ、足で」見かねて陽子が叫んだ。

「体の連携が悪いんだよね、オレって」

「それを不器用って世間ではいうのよ」

「あなたを見ててバラすのも全然無理ってわかったわ、もういい、私がバラす」

「バン、バン」陽子は簡単に箱の二面の板を外した。

「板を二枚剥がすと箱はぐにやぐにやになるでしょ、ほらっ」
あれだけ頑丈だった箱が確かにちよっと押すだけで変形してしまう。

「家でもなんでも箱状にしなければ丈夫にならないのよ。だから構造が大事」

「わかったけどオレに課題をくれたのは何のため？」

サブロウは、また陽子が自分をバカにする目的に違いないと少々腹が立ってきた。

「この間の機械のシヨウで、確か大日産業って聞いたけど、私、あなたの後ろで説明を聞いていたの、そうしたら機械の形が箱状なのが多い理由を、あなた、機械にも流行り（はやり）がああって、これが流行の形ですって言ってたでしょう、全然違うわ」

「どうして違うの？ オレ、二十年前の機械のカタログ見たら、こう、なんていうか、メカニズム丸出しみたいなのが多くて、その方が機械らしくて恰好いいじゃんって思ったのさ」

なんて浅い知識しか持っていないんだろう。陽子はあきれた。

「さっきの木の箱を思い出してよ。鉄でも骨組みだけだと強い力がかかると、ゆがむのよ」

「もし骨組みだけだったら、トラスとって三角形にしなければダメ、カジノタワー見たでしょ、あれって三角形だらけじゃなかった？」

「と、いうわけで構造の基本を覚えてね」

「わかった…：機械売ってるだけじゃダメってことね。確かに理屈の分かる人がオレの説明聞いたらバカにするかもね、サンキュウ、ヨー」

「きょうはイヤに殊勝ね。じゃ、授業料はサービスする。これは防音工事の請求書、よろしく」

陽子はしっかりと請求書を置いて行った。陽子に乘せられて金づちを持たされて、値引き交渉をするのをすっかり忘れていた。ちくしょう、またやられた。

今日は山神研究所の福田さんと機械部品の商談だ。朝から御殿場の研究所へ向かった。

「おはようございます、横浜機器の田中です」

「くろろつさまです、福田です」福田さんはサブロウと同年代のちよっと太めの男だった。

今日の商談はコンピュータ制御ユニットの注文だ。サブロウの会社ではよく取り扱う製品だ。

「ああ、これならすぐ入ります、今週中にお持ちできますよ」

最近はこの手のユニットが売れている。サブロウは自分で配達することにした。

「わざわざ配達されなくても送っていただければいいんですが」

福田さんは遠慮しているが、実はサブロウの方はわざわざ配達したい。ここには例の大工（だいく）ロボットがある。それを見たいのだ。

「私、日常的に工作機械を販売しています、毎日機械を見ますが実はあまり楽しくないんです。仕事だから仕方ないんですが、この間見たロボットのデモが楽しくて、ここ、あれを作っているんですよ」

サブロウは窓の向こうに作りかけのロボットが見えるのが気になってしかたがない。

「ああ、ロボットとか好きですか？」

福田はニコニコしながら、「見ます？」とサブロウに尋ねた。

「私、好きなんです、今回のユニット、ロボットに使うんですよ？」

「どうぞどうぞ見てください、秘密とかないんです」

「これ、所長の趣味でして、外部の人に見てもらいたいようですよ。見てもらうと機嫌がよくて、私もホツとするんです」

「所長は大きな問題を抱えてまして、これが息抜きみたいですね」

「いやー、能力のある人は大変ですね、私なんか最大の問題がカラスの騒音ですからね…」

…サブロウは頭をかいた。

「へー、カラス嫌いなんですか。私も大嫌い。あれってイヤですよね」

変なことから福田とサブロウは意気投合した。

「いいな、ロボットは機械でも親しみが湧く」

「あの、もう一人ロボットが好きなヤツがいるんですが、次回連れてきていいでしょうか？」

サブロウは陽子を連れてくるつもりだ。

「全然OK、所長のいるときに来なさいよ、すごく喜ぶから」サブロウは他のロボットも見せてもらい、大満足で研究所を出た。

翌日サブロウは陽子に声をかけた。

「ヨーコ、この前見た大工ロボットの発展型が見られるぞ、行かないか？」

福田の話では次のデモはロボットが単純作業の間を取り持つという所長のアイデアを実現したものだそうだった。まだどこにも発表していない秘中の技術だという。

「いいわ、以前のあれ面白かった、次のも見たい！」

「よし決まりだ。来週納品に行くから一緒に行こう」

それからは会うたびにサブロウが陽子にロボットの解説だ。

「いい、ロボットって一カ所基準点を教えるとそれを基準にすべての方向に正確に動けるんだ。もちろんいくら正確といっても千分の一ミリとか位置がずれてくる可能性がある。

だから定期的に位置を測り直して自動的に修正するんだ、すごいだろ…」

サブロウの言っていることは理解できる。だが機械の優位性ばかり強調するサブロウに陽子はムカつく。

「わかったわ、山神博士という人がロボット工学の権威なのね。私もお土産に面白いものを見せてあげる」陽子はニヤッと笑った。

当日はサブロウの車で御殿場のロボット工場へ向かった。

「おはようございます、これ、ご注文のユニットです。確認してください」

「OKです、なんかこれ前よりコンパクトになってませんか？」

福田がユニットの改良に気付いた。

「そうですね、できたばかりの新型です。今回間に合ったので新型をお持ちしました」

「これは助かる。こういうユニットはコンパクトなのが何よりいい、ありがとう」

奥から白髪の老人が出てきた。どうもこの人が山神博士らしい。

「山神です。話が聞こえました。あなた気が利くね」

「それでロボットが好きなんだって…いい心がけだ。デモを見せてあげるよ」

「すみません。未発表の技術だと聞きました。私なんかに見せてもいいんですか？」

サブロウは恐縮した。

「秘密じゃないよ、デモというからには見せるためにあるんだ。先に見せるだけさ」
「彼女も一緒？ ……それもいいね」

「あっ、こいつは彼女じゃなくて隣の幼なじみです。こういうの好きだっていうから連れてきました、ちょっと変人でバケモノ女です」

また私の事ボロボロに言いやがって……サブロウ、あとでとっちめてやる。陽子はテンションが上がった。

「はじめまして、変人の星陽子です。よろしくお願ひします」

「田中さん、この方、雰囲気が違うね、何をしている人？」

山神がサブロウに尋ねた。

「男勝りの大工です」

「やっぱり……面白い。じゃあ、デモ見てください」

デモの内容はこうだ。

金属製の模型の椅子をつくる。まず金属板をプレス機で打ち抜く——それを隣の曲げプレスに移し、九十度に曲げる——その後ネジを切る機械にセットしてネジを四か所立てる。別にある旋盤ではアルミの棒を削って脚を連続で作っている。旋盤を除き、これらはそれぞれ単独に動く機械である。これらの作業を一台のロボットが繋いで、一種の全自動オートメーション設備のようにしてしまうのだ。つまり安い単純機能の機械をロボット一台を使うことで、高価なコンピュータ制御の自動機械のような作業ができる。

「私、これこそロボットの価値だって感動したんです」と、サブロウが力説する。

デモが始まった。

ロボットはまず旋盤のスイッチを入れた。ヒューンと機械が動き出した。次に金属板を持って打ち抜きプレスに向かった。機械に取り付けた基準装置をちよつと触ると猛烈な速さでプレスを動かし始めた。「パン、パンパン……」たちまち一枚の金属板から五十個の部品が作られた。これが椅子の模型の外周である。ロボットは片手で部品を支えながら足で曲げプレスのスイッチを入れる。同時に反対の手でネジ切り作業をやってしまう。

両手両足を同時に動かして二台の機械を操作してしまうのだ。人間なら一台に一人の作業員が必要だ。

ロボットはしばらくすると一瞬手を止め、旋盤でできた脚を取りにいった。次に出来た脚を器用に椅子のネジにネジ込んでゆく。ロボットの動作に一瞬のムダもない、流れるような動きだ。しかも早い。早送りの動画を見ているようだ。

「すごい……この前見たクギ打ちでもすごいと思ったけど、もう……芸術的な動きね」

陽子が感心している。

「これってプログラムで動いているんでしょ、プログラムするのがとんでもなく大変そう」
陽子がつぶやいた。

山神はその質問を待っていたかのように、「それが簡単なのがミン」と返した。

「人間がロボットの手を引いて、実際にやることをその通り教えればいいんだ。それをデイチンングという。人間がティーチャーね」

「ロボットは一度手順を覚えると複数の作業を、どの順にどれだけやるのが一番効率的かを人工頭脳が考えるわけだ。それをAI(エーアイ)という」

山神は胸を張っている。

「これならロボットを買えば人間はお茶を飲んでるだけでロボットが家を建ててくれるね」陽子が腕を組んだままつぶやいた。

「いや、陽子さん、それは無理だ。このデモはあくまで単純作業の合理化がテーマだ、大工みだいに高級な作業はまだまだ到底無理……遠い話だ」

「あら、ちよっと安心した」

陽子にはにっこりとして、「先生が大工みたいな仕事に敬意をもっていたらいいよね。なので私も……うれしいです」

「いや、人間の技術というのは……深いよ。私は何でもロボットでできるなんて思っていない」

陽子はそのを聞いて、山神の真摯な姿勢に感動した。

「先生、ロボットのデモを見せてくれたお礼に、大工の技を見せましょう」

「ほおっ、どんな技かね、興味深い」

山神が真剣な顔になった。

「ここに割りばしがあります」

陽子がバッグから割りばしとカッターナイフを取り出した。

「定規とか物差しとかを使わず割りばしを正確に三分分します」

それを聞いてサブロウが焦った。

「ヨーコおまえが器用なのは判ってるけどそれは無理だろ……」

「測るものがなくて……二等分でも無理だよ。おまえ、なに考えてるの」

サブロウはちよっと怒っている。

「ちよっと手を隠します、あつ鉛筆だけが必要です」

陽子は手元を隠して作業を始めた。

「スト、スト、スト」陽子は手先をちよこちよこ動かして何度かカッターで割りばしを切った。

「はい、できました。この三本を測ってみて」

「ちよっと測定器を持ってきて」

山神が指示をしてサブロウが測定器を持ってきた。

「ほおっ、百分の三ミリしか違わない。これはすごい……」

山神は感心してつぶやいた。

「ヨーコおまえ手品もやるのか？」

サブロウも驚いた。

「大工の基本技の一つです」

陽子は平然としている。

「ヨーコ、俺、後ろで見てたけど、なんかこう、すごく適当に切ってるようにしか見えなかったけど」

「わかった、そうか。陽子さん、すばらしい」

突然山神が声をあげた。

「これは数学的な考え方だ。誤差を詰めてゆくセオリーの通りだ」

「田中さん、おそらく彼女はまず割りばしを割って片方を目検討で三分の一よりちよっと長いくらいに切る。これをもう一方の割りばしに並べて端を合わせて三回ずらす。余った

割りばしの破片をつまぐ当てて使えば可能だ。つまり三分の一より少し長いものを二回ずらせば元の割りばしの長さより、必ずちょっと長くなるわけだな。そのちょっとを目検討で三分の一切り落とせば、かなり正しいものになるはずだ。この作業を少なくとも二回繰り返せばかなり正確な三分の一の寸法になる。それを定規代わりにして切るか、鉛筆で切る線を書くか。切る腕前も重要だがな」

「先生、正解です」

陽子がニコニコしている。

「私に考えさせるとは……やるね、陽子さん。気に入った」

クッソー、陽子にやられた、女を上げたな。しかしなぜかサブロウはちょっとうれしかった。

すっかり陽子が気に入った山神先生は、サブロウと共に夕食に誘ってくれた。福田も一緒だ。

「私ぐらいの年になると、正面から突っかかってくる人はまずいない」

「あっ、言い方が悪いな、あなたが突っかかってきたということではないよ。遠慮して言うべきことを言わない人が多いということ」

「先生ほどの権威だと、そりゃあ遠慮しますよみんな……」

福田がつぶやいた。

「とにかく、ひさしぶりに骨のある人に会った……愉快だ」

「料理が来た。食べてください。田中さんが車だから酒が出せなくて残念だが」
皆は肉料理を堪能した。

デザートを食べながら陽子の仕事に話が及んだ。

「そうか家業が大工なのか。それで跡取りみたいな立場ね」

「大工だと技術だけじゃなく腕力も必要でしょ、女性では厳しくない？」

山神が陽子に尋ねた。

「いまは重いものを持つことは少なくなりましたが、重いものを二階に揚げるのは電動装置があるし、金づちもほとんど使わないです。エア工具でプシュツで終わりです」

「先生、こいつ腕力すごいですよ、合気道もやって、私、東日本の会場で投げ飛ばされました」

サブロウが展示会での顛末を話した。

「ははは、そんなことがあったの。男女が逆だけど二人は気が合うんじゃない？」

山神は二人を見比べながら言った。

「ちょっとそれだけは違います。こいつはカラスの次にきらいです！」

サブロウが焦って山神の意見を打ち消した。

「きらい、ということだけは同感です」

陽子が続いた。

「先生、そんなことより先生のこと聞きたいです」

陽子は話を切り替えた。

「サブロウからちょっと聞きましたが、先生はカジノタワーの設計をされたそうですね」
それを聞いて山神の雰囲気之急が変わった。

ずっと黙っていた福田が口を開いた。

「それについてはあまりお話できません」
異様な雰囲気陽子とサブロウが気付いて慌てた。

「福田、この二人なら話しても大丈夫だ。私もだれかに話したほうが気が晴れる」
山神の顔つきがガラツと変わった。それを見て二人は固まった。

「これは近々公にしなければいけないことだから、あなたがたが知っていても問題はない」
「カジノタワーが出来て半年になる。いま周辺に続々とカジノ施設を建設中だね」

「東日本シヨウの時に近くで見ました。すごいタワーですね」
陽子がイメージを述べた。

「あなた、あのタワーを見て何を思った？」

山神が陽子に尋ねた。

「まず、すごい高さに圧倒されました。そうですね、気付いたことといえば、全体の形に対して脚の根元の部分がすごく強調されてて何かアンバランスだなと思います。でも丈夫そうなのは確かで、オーバーな形でも、より安全なら悪くはないと思いますけど……」
眼をつむって陽子の話を聞いていた山神が、カツと目を開いた。

「私の弟子でそれに気づいた者は誰一人いない。気付いたのはあなたが最初だ！」
陽子とサブロウは山神の発言の意味がわからない。カジノタワーの案内広告では、明らかに東京スーパーツリーを意識して、それを超える設計がなされ、構造については有名な学者数名が絶賛する記事を載せている。特に脚の部分は大げさなほど強化されていて、東京スーパーツリーが貧弱に見えるほどだ。「原爆が落ちても倒れません」をうたい文句にしている。

「福田、考えが変わった。今日はこの話はやめよう」
突然山神が話を打ち切った。陽子とサブロウは、あっけにとられた。

「今日は食事の場なので、深い話はまたにしようということです」と、福田がフォローした。

「すみませんね、別の機会に改めてお話したいことがあります。きょうはデザートを食べ終わりにしましょう」

もう九時だ。食事のお礼を言って二人は帰路についた。

あれから一週間たった。サブロウに福田から電話が入った。

「お世話になってます。仕事の話じゃないんですが、今日の夜って空いています？」

「このところ暇で今日は定時ですから大丈夫です」

「すみません横浜で食事をセットしますからご足労願えませんか？」

「そんな、福田さん『割りカンでどうっ』って言うってくださいよ」

「わかりました。店決まったら電話します」

福田さんがあらたまって何だろう？ この間の続きだな。サブロウは、そのことがずっと気になっていた。

店は新横浜駅前のレストランだった。

「ちよっと長くなりそうなので遅くなってもいいように、ここにしました」

「ああ、ここなら遅くても電車で帰れるので問題ないです」

新横浜駅なら終電も遅いし、タクシーでもワンメーターで帰れるのでサブロウには好都

合だ。

「山神先生からどうしても伝えておいてほしいと言われまして。実は陽子さんにも加わって欲しかったんですが、今日は無理だということですよね……」

「今日は朝から改装の仕事が入ってて、たぶんグッタリでしょう」

「すみません、後で伝えといてください」

「今日の事で山神先生は一週間悩んだようですよ」

「悩むって、何ですか？」

「先生が先週お話を突然打ち切ったじゃないですか」

「実は私も悩んだんです。深いところは昨日今日会った人に話せる問題じゃないんで……」

「まずざっとのお話をします。それでお二人が無理と思ったら、聞かなかったことにして、一切を忘れてください。……危険もあるんで」

サブロウは能天気な方（ほう）だが、何かを頼まれると断れない性格だ、しかし危険があるとは？

「問題はカジノタワーです。先生がタワーの設計をした事は以前に少しお話ししましたが、先生の本職はロボットではなく構造工学、ビルとか橋とか、特に特殊なものは、どの建築会社でも難しいので、必ず先生に相談が来ます。先生は当初あのタワーの設計を全面的に任せられたんです。発注は急ぎよ設立された国内のカジノ関係の会社ですが、実態はC国の富豪が中心になっています。

先生の名声を聞いて、先生のネームバリューと共に東京スーパーツリーを圧倒するのが狙いでした。先生は真面目に世界一のタワーを設計することに燃えました。そこまでは問題なかったのです。」

福田は話を止めて深くため息をついた。

「先生はタワー主要な部分の設計をまとめ、会社に提示しました。当日立ち会ったのは先生と私、C国の富豪、白さん、設計担当の張さん、王さん、企画の陳さん。それにK国もかかわっていたようで資本家の金さん、設計の李さん、企画の朴さんでした」

「先生の案は、私もほればほれるほどきれいな、まったくムダのないものでした」

「K国の企画、朴さんがまずクレームをつけました。『この案は、はっきり言ってつまらない。インパクトがないね』、陳さんも『東京スーパーツリーが三本足なのになぜこれは四本なのですか？ 東京タワーみたいじゃないですか』と言つのです」

「先生は自信をもって答えました。『私は着板塔を作れとは聞いていない。この案は飾りがないが美しい機能美がある。私の考えでは三本足である事自体意味がない。設計を難しくするだけで強度的にも外観的にも利がない』」

C国の富豪白さんが発言した。

「張さん、王さん、意見はあるかね？」

王さんはこの案に肯定的だった。

「私は山神先生の案はすばらしいと思います」

しかしK国の企画、張さんは強く否定した。

「三本足でも四本でも今はコンピュータで設計するから同じね。だったら三本の方が恰好いいね。二本足にはできないしね。恰好も設計のうちね」

K国の設計、李さんが続いた。

「東京スーパータワーには日本建築の五重塔の心柱（しんばしら）のアイデアがあるね、なぜこれにはないの？」

「先生は反論しました。『何度も言うがこれは看板塔ではない。多用途電波塔だ。それに耐震性だけを言えば、もっと華奢な作りでも十分だ。タワーとビルを比較してみなさい。タワーの部材はパイプ状で軽い。しかも上に行くほど小さくなっている。頭が軽ければ倒れにくいでしょう。さらに言うなら、東京スーパータワーの心柱の件は、多分にイメージ作りの感がある。昔の職人のアイデアには敬意を払うが、今の建築材料や構造計算によれば無意味な構造だ。東京タワーに心柱があるかね？ 五十年前の鋼材、構造で震災でも倒れなかったじゃないか。私の案は少なくとも東京タワーの三倍の強度がある。大地震で東京のすべてのビルが倒れても私のタワーは残る。もちろん東京スーパータワーもな。……話を戻して、もし最初から奇抜な造形の広告塔が希望なら、そう言ってくればどのようなでもできた』」

K国の資本家、金さんが割って入った。

「先生は融通が利かないね。この案件には向かないね」

白さんも同調した。

「先生、どうも私たちと意見が合わないね。ここまでのお金払うからこの件やめよう」

「先生も私も唾然としましたが、やめるといふなら仕方がない」

「しかし問題はその後です。カジノタワーの工事が進むのにつれ分かったのですが、タワーの形はなんと先生の案そのものだったのです。唯一違うのは脚（きやく）の部分。脚がひと回りも太くなっていて、そこだけが目立つ。そこを強調して先生の案とは別物と主張したいのです」

「実は私たちは設計をやめてからも王さんと連絡を取っていました。王さんは良心的な人です。先生の設計を批判しておいて、実はそのまま利用する。王さんはそれが許せなかったのでしょう。彼は少しずつ我々に情報を流してくれていたのです。それを分析した結果大変なことが分かりました。あの頑丈そうな脚が、実は危険ではないかという問題なんです」

「ちよっと待ってください、私、カジノタワーの完成後の報道を見ましたが、東大教授と、もうひとり、だれか忘れましたが有名な技術者が絶賛していたのを覚えています。それに横浜市の検査も通っているし、むしろ丈夫過ぎるんじゃないですか？」

サブロウは実際にタワーを見学に行ったことがある。その脚の部分は東京スーパータワーを完全に上回っている印象を持った。「原爆が落ちても倒れません」というキャッチフレーズが納得できる。

「脚のカットモデルも展示されていましたが、鋼材の厚さが百五十ミリもあって東京スーパータワーを超えていましたよ。その危険だという、何か証拠があるんですか？」

サブロウは白さんたちが、先生の技術を事実上だまし取ったような行為は許せないと思う。ただ、危険だというのは少し無理な主張ではないか、しかし先生が腹立たしただけで危険を主張するとも思えない。

福田がサブロウの目をじっと見て言った。

「もうすぐ結論がでます」

「それでそのことを聞いて我々はどうすればいいんですか？」

今日の福田は眼が違う。あのガラスの件で盛り上がった福田ではない。なにかとつもなく重いものをぎりぎり背負ってここにいるような感じだ。

「私はこれから起きることをだれかに伝えておかなければならないんです」

「先生はあなたたちを選びました。私もそれが最善の選択だと思います」

「最初に言ったように、あなたたちにも危険が及ぶ可能性は高い。だから無理と思ったら断ってください」

「いいでしょう。聞きます」

優柔不断なサブロウであるが、なぜか逃げる気にはならない。福田の次の一言を待った。

「王さんが殺されたんです……私も狙われています」

サブロウは愕然とした。それは人の生死に係るほどの問題だったのか。

「あなたがそれを私に伝えることで、私にも身の危険が及ぶということですね」

「その通りです」

福田は下を向いて目を逸らせた。

「わかりました。聞いてから考えます。言ってください」

そう言ってしまったって、サブロウは不思議な夢を見ているような感覚に襲われた。なぜ聞くんだ——オイ、サブロウ——気は確かなのか？——生死にかかわる問題だぞ。聞いて断ればいいという逃げがあるからか。それとも怖いものを聞きたいという好奇心からなのか。

「確実にタワーは倒れます」

福田がきっぱりと言いつ切った。

サブロウは気付くと足が少し震えていた——これは夢の中じゃないぞ——山神先生と福田さんが言う事なんだ。これは現実だぞ。

「そ、それを公にしたらいじやないですか、福田さんと先生が声を上げれば充分説得力がありますよ……」

サブロウは、それだけのことを言うのがやっとであった。

「もちろんそのつもりでした、王さんからの情報を受けて先生はタワーの調査を開始したんです」

「先生も最初はそんな大事とは思わず、中国の会社に、むしろアドバイスのつもりで気軽に連絡を取っていたんです」

「いろいろあったが先方と喧嘩別れしたわけじゃない」と、言つて。

「危険が発覚する前でした。先生の孫娘と、私の娘と一緒に中国に招待されました。約一か月、白さんの知人の家にホームステイの約束で」

「ところが帰ってきません。二人とも」

「行つてから三週間の時点で、メールで笑顔の写真が送られてきました。それによると、中国が気にいつたので、もう一か月ホームステイを続けたいと書いてありました」

「そんなことありえませんか、二人とも」

「メールの写真を見て私は違和感を感じました。笑顔がおかしい。それに先生が気付きましたが、よく見ると私の娘が両手でSの字を作っているんです……そう、SOSです」

「つまり人質に取られたんです」

「その後、王さんと全く連絡が取れなくなりました。会社にしつこく尋ねると、交通事故

で亡くなったというんです」

「私と、先生は驚愕しました。すぐに娘にメールを送ると、現在の写真と返事が返ってきますが、あきらかに書かされている。つまり監視付き軟禁状態です」

「ですから私たちは全く行動を起こせません。それだけではなく、私は二度、先生は一度ですが、車にハネられかけたんです……あれはヒットマンに間違いない」

刑事ドラマのような事件が目の前で起きていて、自分が当事者になる——ウソだろう——まさか自分が……。

しかし、ここまで聞いて、聞かなかったことにできるか——警察に通報すれば？——それができるなら福田さんも当然やっている——この話の通りだったら確かに日本の警察は無力だ——娘さんの軟禁は中国で起きているのだから。サブロウは腹を決めた。

「ここまで聞いてシカトできませんよ。私は母親と二人暮らしたから、母親さえ守れば怖いものありません。どうしたらいいか言ってください」

「すみません、その前にひとつ確認させてください。先生は私たちを『選んだ』と言われましたが、私たちより研究所の優秀な方に引き継がせるのが筋じゃないですか、どうしてそうしないんですか？」

「研究所にスパイがいます……明らかに疑わしい者が二人、私たちが狙われているのは、行動が漏れているからです。だから部外者じゃないと……」

「そうですか……」サブロウは納得がいった。

「私たちも無縁の人を巻き込むのは心苦しい。何をしてくれとはとても言えません。この件は基本的に私たちが解決しなければならぬ問題です。この後、私と先生は行動を起こします。それが成功すればよし。しかし、もし失敗すればこの問題は闇に消えてしまいきます。そしてカジノタワーは危険なままです。つまり、もし失敗したらこの問題をなんらかの形であなたが世間に知らしめてほしい。お願いというのはそれなんです」

なるほど状況は理解できた。しかし受け入れられないことがひとつある。

「福田さん、もしかして先生は私の他に陽子を念頭においているんですか？」

「そうです。先生は営業業務で培ったあなたの広報力に期待しています。そして陽子さんは物事を見る目の鋭さ、押しの強さというか、先生を前にしても物おじしない胆力がすばらしいと言っておられます」

「陽子についてはおっしゃる通りです。しかし私はこの件については決して伝えることはできません……陽子の行動力はすごいです。だからこの件を知ったら……間違いなく渦中に飛び込むでしょう。どんな危険に遭遇するか……陽子の性格はよくわかっています。彼女にそんなことをさせたくありません。」

サブロウは自分だけの心に留めると決めた。男として、陽子が傷つくような事態には絶対にさせまい。

「わかりました。ありがとうございます。私たちも彼女に漏れないように気を付けます」「それじゃあ後日、早いうちに先生と会っていただきたい。いいですかね？」

早い方がいい。会うのはあさつての日曜日と決まった。ただしこうなった以上、サブロウが頻繁に研究所へ出入りするのを避け、今後は御殿場のロボット工場で会うことになった。

日曜日には昼過ぎに工場に着いた。

「やあ、田中さん、すみませんね。陽子さんのことは聞きました。あなただけこつ男気があるね。たしかに女性に危険な思いをさせるのは避けるべきだ。あなたの言う通りだ」

山神はドサツと資料を持ってきた。

「これは専門的な資料がほとんどだから、あなた、見てもわからないかもしれない。ただ、どんな資料があったかという大まかなところだけは覚えておいてほしい」

「事の発端は台風だ。七月にタワーが出来てすぐ、ちょっと強い台風が来たね。最大風速は三十メートルぐらいだったかな、大した風ではなかった。しかしその後、タワーが全然揺れなかったという報道があった」

サブロウも覚えてる。タワーの揺れのデータを示して、この通りまったく揺れていないと話題になった。東京東京スーパータワーよりも揺れが少なくと比較記事まで出た。

「それが引っかけだった。私の設計ではもっと揺れないといけない」

「揺れた方がいいんですか？」

サブロウはカジノタワーの頑丈な脚部が揺れない理由だと理解していた。おおかたの論調もそうであった。

「揺れないといけないんだ」

山神は強く言い放った。

「タワーの形状を見る限り、ほとんど私の設計通りになっている。ならば揺れるはずだ」

「私の計算では東京タワーの三倍の強度がある」

「それなら揺れないんじゃないですか？」

サブロウは山神の説明に矛盾を感じた。

「田中くん、強度というのは正しい言い方ではないんだ」

「工学には強度という単位はない。強度というのは一般向けの言い方に過ぎないんだ」

「田中くん、硬くて折れ易いものと、しなって折れにくいものとどちらが強度があるかね」

「そうですね、場合によりますね」

「その通りだ、あるところまでは全然曲がらず耐えるが、限界を超えると折れる。それが重要な場合と、絶対に折れては困る場合があるだろう。タワーの場合はどちらだ？」

「折れては困りますよね」

「そうだ、あのタワーは折れる」

「揺れないということは折れるということなんだ」

まだサブロウは納得がいかない。

「硬くて頑丈すぎるとしても、さっきの硬くて折れやすいという話で、例えば風速百メートルでも全然曲がらないとしたら、それでいいんじゃないですか？ 風速二百メートルなんてありえないんだし、過去の記録に対して余裕があれば」

サブロウの意見を聞いて、山神がニヤツとした。

「田中くん、正論だよ。なかなか良い意見だ」

「問題はそこじゃない。まず一つの問題は構造なんだ」

「構造？」

構造といっても、サブロウはあのパイプが無数に組み合わせさせたタワーの構造を説明されても訳が分からない。しかし山神は続けた。

「わかりやすい話をしよう。ここに直径五ミリの紐がある。これで何キログラム吊れる?」
「まあ、五キロぐらいは吊れると思います」

サブロウが答えた。

「じゃあ紐を縦にピンと張って立たせたら、物を載せられるかな?」

「いやあ、そもそも紐は立ちませんよ」

「そうだね。じゃあ割りばしだったらどうかね?」

「五キロ載せたら? ……折れますね」

「そうだ。引っ張ると押すでは全然違うことがわかるだろう……」

「あの脚は引っ張る構造になっていないんだ。だから限界を超えると折れる」

「すみません、お言葉ですが、それでもあの脚は十分すぎるように見えるんですが」

東京スーパーツリーと大きく異なるのは脚の部分だ。カジノタワーの脚はピカピカに磨き上げている。もちろんサビ止めにクリア塗料が塗ってあるのだが、それは高度な熱処理がしてあって、刃物のように固く、常識を超えた強度があって、(原爆が落ちててもこの塔は倒れません)というのがうたい文句だ。それを山神がごとく否定するのはなぜだろう。

「田中くん、硬いものは折れ易いと私はさっき言ったな。あの脚は硬すぎるんだ」

「熱処理という一般的な人にはなじみがないな……日本刀なら分かるかな」

「焼き入れというのは聞いたことがあるな。日本刀を真っ赤に焼いて、ジュワツと水に漬ける。それで硬い刃物になる。それなら君もなにかの動画で見たことがあるだろう。ところがあれをやるには大変な熟練が要る。へたなヤツがやった刀は簡単に折れる。私が危惧しているのはそれだ。あの脚は失敗作ということだ」

先生のたとえ話はよくわかる、しかし一流の企業が関わって、当然技術的な検査も受けているはずだ。サブロウは「失敗作」とまで、なぜ先生が断言できるのか不思議だ。

「先生、失敗作という根拠はなんですか?」

「ここまで事件に深入りして、あやふやな納得をする訳にはいかない。サブロウは思い切って突っ込みを入れた。

「田中くん、よく言った、身近な福田でも遠慮して遠回しに聞いたことだ、君にこの事を伝えるのは正解だな」

「よし、具体的に言おう。あの脚には既にヒビが入っている」

「えっ、先生、どうしてそれが分かるんですか?」

「最初の台風の後、私は脚を見に行った」

「海と反対側の両方の脚の内側にまっすぐヒビが入っていた。本当に良く見ないと分からないが、あれは間違いなく熱処理の不良による割れだ」

「あの部分はC国の製造だな、あの厚さの鋼材は日本の技術でも熱処理が難しい、見たところ相当いい加減な熱処理だな。表面を磨いてゴマ化しているが、」

「最初の台風で固い脚を押す方向に力が集中し、不良品の脚にヒビが入った」

最後の確認だ。サブロウはなぜそんな不良品が日本の技術的検査を通ったのか、その訳が聞きたい。

「先生、私はもちろん素人で分かりませんが、建築の専門の技術者が調べて検査を通らないとタワー自体建てられないんじゃないですか? それを通ったから建てられたというこ

とでしよう」

「それもいい質問だ。いいかね、一般的なビルや橋とかは、材料とか建築方法とかが法律でしっかり決まっている。日本の規制は世界一だ。ところがこんなタワーは日本にいくつもある物じゃない。構造的には東京スーパーツリーがカジノタワーに一番近い。あれは許可になっているが、実はあれにもあやふやな部分がある。タワーの事例そのものがいくつもないのだから、悪い言い方をすれば、あるていど名のある学者がOKを出せば通ってしまうのさ。しかしカジノタワーの場合、私が知っている学者は一人も入っていない。設計に問題が残っている可能性は非常に高い。」

それよりも問題なのは、あの巨大な脚の品質を調べる専門家も方法も確かではない事だ。もちろん事故があれば関係者は責任を問われる。だから必要以上に丈夫だな、と思えなければ連中も通さないはずだ。だがあれは確かに素人目には丈夫そうに見える。専門家も甘くなってしまうことはある。

それと私はC国の政治的な何かが作用したと思っている。いまC国は鉄鋼の日本への売り込みに必死だからな。学者を懐柔して故意に審査を甘くした可能性もぬぐえない……」

カジノ法、カジノタワー、鉄鋼の輸出となれば、政治的な問題が絡んでくるのか——サブロウはこの事件の深さを思い知った。

「田中くん、よく聞け、私が必死なのはタワーが危険なまま立っていて、先の台風以上の風が吹くと必ず倒れるということだ、必ずだ！」

山神はこぶしを握り締めて声をからして叫んだ……
少し冷静になって説明は続く。

「あのタワーは脚部以外は、ほぼ私の設計通りで脚は四本だ。だからその脚は海側に向けて二本、町（まち）側に二本だ」

横浜の海沿いに立つタワーは周りに林立する高層ビルから抜きん出た高さだ。そのすぐ近くに陽子と行ったコンベンションセンターがある。

「亀裂は町側の二本にあった」

「田中くん、君がコンベンションセンターに行った時、風はどっちから吹いていた？」

「えーと、よく覚えてませんが、海のおいが強いなと思った記憶があるので、海の方がらだったと思います」

「そうだ、あの場所では風は必ず海から陸へ吹く」

「私の計算では、次に風速四十メートル以上の風が吹いたら、あの脚は必ず折れる」

「私の説明でもう分かるだろう、それは必ず町側に倒れることになる……」

「ウツ……そんな……」

町側には高層ビルが林立している。八百メートルのタワーが倒れたら想像も出来ない惨事になる。サブロウはゾクツときた。山神の指摘は、観察を伴った完全な確信を持ったものだったのだ。

「田中くん、実際にタワーの脚を見てきたらいい、私の話を聞いた後なら君が見ても割れの部分に分かるだろう」

その言葉でサブロウは確信を持った。その瞬間、彼の正義感は相談もせずに勝手に歩き出した……なんだろう……怖くはない……不思議だ……自分ではないような——自分にこんな勇気があったのか？ 今、サブロウは極めて冷静だ。

「先生、このあと福田さんと行動を起こすと聞きました。どうするんですか？ これを公表するとしたら娘さんたちは無事で済むはずがありませんよ」

「わかっている……しかしやらねばならない。福田も同じ考えだ」

サブロウは頭をフル回転させて、これから起こる事態をシミュレーションした。

山神たちが何らかの方法でタワーの危険性をアピールするとしよう。タワー側はそれを阻止するため人質に危害を加えると脅しをかけてくるに違いない。もしそれでも山神が引かない場合——すでに現実にはヒットマンが山神たちを狙っている事実がある以上、二人の暗殺の危険が最高度に高まるだけだ。それに対しタワーの危険性のアピールは、おそらく強力な妨害工作をされるだろう。そうなる和最悪なのは——山神たち二人は暗殺され、人質の命も危険にさらされるという事態だ。そしてタワーは危険なまま残ってしまふ。しかもそれはヒットマンがすでに活動しているということから、時間の余裕はない。すぐにも行動を起こさないといけない。

山神たちの行動は自爆覚悟で敵に突っ込んでゆくようなものだ。自分たちを犠牲にしてもそれを完遂しようとしている。もしそれが失敗に終わった場合、自分はどうする？

サブロウは急に強烈な不安に襲われた。……もしダメだったら二人の代わりに何ができる？ ……なにも出来ないじゃないか、全部知っているのに。でも、もし自分が先生に代わってこの件を公表したところで、素人の自分のアピールなど笑われるだけだろう——結局オレは無力だ。

ずっとうなだれていたサブロウだったが、ふと思ったことがある。いま山神たちの行動の障害は人質だ——人質さえ取り戻せば先生たちは動ける。

もちろん簡単なことであるはずがない。しかし自分の今の立場でできる最高の協力は人質の救出だ。といっても場所は中国、それを救出する？ ……考えるオレも馬鹿だが、今は万に一つの可能性も追いかけるべきではないか。サブロウは山神に質問した。

「あのう、娘さんたちの居場所を特定することはできませんか？」

「ホームステイということで中国に行った、しかし事件の後どこかへ移動させられたようだ」

と、山神は口をゆがめて答えた。

「その、最初に行った場所ってどこですか？」

「深センだ」

「深センなら私、中国の機械の視察で一度だけ行ったことがあります。」

事は急を要する、しかし分かっているのは最初に深センに行ったということだけ——それだけか——なにか他に手掛りが必要だ。サブロウはひたいに手を当てて考えた。

——ある。たったひとつ。向こうからのメールだ。

「先生、向こうからメールが届いていると聞きました。それ、見れますか？」

「ああ、一週間前に来たのがある、こちらからメールを送ると数日後には必ず返信が帰ってくるのだが、「こちらの質問には答えがない、ただ楽しくやっていますというだけの内容だ」

「いま出してみる」

山神がメールを見せてくれた。

「これだ、いつもどこかの公園みたいな場所で撮ってるな」

サブロウは目を凝らして画像を隅々まで見回した。

「田舎ではないみたいですね。割と大きな建物が写ってる。もしかして文字が写ってるんじゃないかと思ったんですが……ないですね」

山神は別の二通も見せてくれた。しかし手掛かりとなりそうな文字は発見できなかった。

「ん、……中国、深セン……」

サブロウは（深セン）で思い当たることが出てきた。

「先生、私の後輩が深センの営業所にいます」

「私の三年後輩で岸田というんです。私が営業のコツを教えてやったヤツです。急に実績が上がって期待されたんですが、訳あって貿易会社に転職したんです。彼とは今でもよく飲みに行きます。ごく最近会いましたが、彼は年の半分は深センの出張所にいると言っていました」

「先生、その画像ください。もしかしたらヤツなら……」

サブロウはさっそく画像を岸田に転送した。

「可能性は低いですが、あらゆることをやりましょう」

これで岸田から、なんらかの手掛かりがあれば道が開けるかもしれない。

山神と福田の行動とは何をすることか？ サブロウはできることなら何でも協力したい。山神に尋ねた。

「私の方は手掛かりがないとこれ以上何もできません。先生たちは、これからどうされるのかを教えてください。私にも出来ることがあるのかどうか？」

「うん、それなんだが……」

山神が口ごもった。腕を組んでしばらく沈黙した。

「やっぱり危険すぎる……君は一切関わらない方がいい」

山神のサブロウに対する配慮か？、しかしもうサブロウには危険の覚悟は充分にある。

「先生、遠慮なさらないでください。ある意味、失礼ながら私はお二人に危険度では同レベルに近づいているんです」

「そうだな、申し訳ない、その通りだ」

山神は頭を下げた。そして「キッ」とサブロウを見つめ、話し始めた。

「私たちが行動するというのは、単にタワーの危険性をアピールするだけではない。それだけでは一定の効果はあるだろうが、福田とあらゆる可能性について議論した結果、最終的に問題点を改修することは望めないと判断した」

「驚くと思うが、私が自らタワーを倒す……」

サブロウは驚愕した。

「たっ、倒すって……」

いままで論理的で確信を持った山神の言動に尊敬の念を抱いていたサブロウであったが、何を言い出すんだ、山神先生の性格に何か狂気の部分があるのか？ そう思わざるを得ない。

「倒れたらどうなるかって、私なんかと思う前に先生、どう考えているんですか？」

サブロウは強い調子で山神を問い詰めた。

「田中くん、危険は承知だ……タワーを海側に倒すんだ」

タワーは港の海側に沿って立っている。海側には道路が一本あるだけで建物はない。確かに海側に倒すことができれば被害は最小限で済むだろう、しかし犠牲者がゼロという

ことはありえない。タワーはいつも観光客で満員なのだから。

「先生、もし倒すのがその通り成功したとしても、先生は大犯罪人になってしまいますよ、必ず人が死にます」

「分かっているよ。私は人的な被害が最小限になる工程表を作った。私の能力すべてを注ぎ込んだ。完璧に実行されれば被害者ゼロも可能だ」

「先生、本当に申し訳ない言い方ですが、それは不可能でしょう。バカな私ですが、絶対無理と思います。不可能です」

「田中くん、君が危惧しているのは、私たちが失敗してタワーが町側に倒れる事態だろう。そう、その可能性は十パーセント未満としても、確かに残る。いいかね田中くん、いろいろな想定はできるが、タワーが町側に倒れる可能性は二つしかない。つまり、私の行動が失敗だった場合と、台風などに耐えきれず倒れる場合の二つだな。違いは何か……人的被害だ。私が倒す場合は、事前に避難をさせることができる。それが一番重要だろう。違うか？ もし失敗して町側に倒れても、私が悪人になって全責任を取れば済むことだ。人が死ぬことはない」

「田中くん、何もしなかったら、台風が来たらどうなるか、タワーの周りの高層ビルがタワーとともに軒並み倒れる。アメリカの同時多発テロ以上の惨事になるのは君にも分かるだろう、やるしかないんだよ！」

サブロウは頭を思いっきり叩かれたような衝撃を受けた。心の奥に「失敗したらどうする」という恐れと、実際にはタワーに何も起きないかもしれない」という甘さが残っていた。

先生の覚悟には恐れ入った、やるしかない。

突然、携帯の着メロが鳴った。岸田からの返信が入った。

「先生、岸田から返信が来ました、いま見えます」

岸田の返信は早かった。向こうはちょうど昼時だ。タイミングが良かったようだ。

「田中さん、先日はごちそうになりました。ありがとうございます。添付の写真、拝見しました。これ、羊台山森林公園の広場ですね、間違いなく。建物で分かります。私の会社から車で三十分、比較的近いです。それでここに何か用事がありますか？ 日時が決まればご案内できますよ。よろしく」

「先生、場所が特定できました！」

サブロウが飛び上がって喜んだ。

「ほんとうか、すっ、すぐ福田を呼ぼう」

山神はすぐ福田に連絡を取った。

「福田は近くにいる。急いでここに来る、あーっ、なんとかなるといいが……」

山神が見たこともないほどソワソワと動き出した。

「先生、向こうの返信って、パターンが同じって聞きましたけど、どんな具合にですか？」
サブロウはあることを確認したかった。

「こちらがメールを出すのはいつも昼過ぎだ、それで返ってくるのが翌々日の昼ごろだな」

「それって三回とも同じですか？」

「そうだ、きっちり同じだ」

いける——サブロウはメールの写真を三枚見比べた。

「先生、おそらく百パーセントの確率で娘さんに会えます」

「えっ、田中くん、どういうことだ？」

「この写真、三枚とも少し高い位置から撮ってますね。写ってる人の影を見てください。全てほぼ真下ですね。それで分かることは、メールが届いた翌日、同じ場所の同じ時刻にそこに写真を撮りに来るということです。深センの羊台山森林公園の同じ場所に」

「そうか！ それなら待ち伏せて救出も可能になるということか！」

「田中くん、この通りだ。頼む、行ってくれ」

いきなり山神が土下座した。

サブロウは困惑した。いままでこんな風に人に懇願されたことなどない。

「先生、頭を上げてください。私は初めて人のために何かすることができ……うれしいんです」

玄関の開く音がした。福田が着いた。

「先生、急用って何ですか？」

「福田、娘たちを取り返せるかもしれない！」

「えっ、どうやって？」

山神はここまでの経緯を福田に手短に話した。

「田中さん、私からもお願いします。これで先生と行動に踏み切れる。うまく救出ができたら、その時が行動開始のタイミングだ」

「田中さん、あなたの仕事への影響は完全に保証します。早急に動いてくれませんか？」

「先生、うまいことにこの時期、うちの会社は一番暇なんです。有休を取れ取れって、うるさいくらい。さっそく有休を取ります」

いきなり救出作戦が始まった。サブロウは香港で山岸に会い、同行して深センに向かうことになった。

しかし岸田までこの事件に巻き込むことはできない。本当のことを言ったら、だれでも引いてしまふに違いない。サブロウは（一種の誘拐事件に近いことが行われていて、軟禁されている二人を助け出すことだけが目的だ）ということにした。事実に近いので岸田の協力も得やすい。そう言ったら意外に簡単に岸田は受けてくれた。中国では事件にはならないが似たようなトラブルは珍しくないという。

「田中さん、救出の具体的な方法なんです、私にはちょっと思いつかない。どうやるんですか？」

福田が危惧するのは当然だ。軟禁されているということは、娘二人は比較的自由だが、ずっと監視役がついているのだから、それを振り切るにはどうしたら良いか、しかも初めての場所で、武器を使える訳でもない。屈強な監視役がついていたら腕力では対抗できないだろう。

サブロウは明瞭に答えた。

「もちろん武器は使えないし、持ってゆくことも不可能でしょう。そして監視役はおそらく二人です。そういう役には腕力の強いのを雇うのが普通ですよ。岸田くんにはちょっと引いてもらって私一人に対抗します。彼は車で待っていてもらえばいい」

「ますます不思議だ。そんなシチュエーションで、あなた一人で対抗するって……いったいどうやって？」

「福田さん、弱いヤツにはそれなりの戦い方っていうのがあるんです。忍者にヒントがあ

ります」

「忍者……」

「私は子供のころ、体も大きくなかったし、ケンカに弱くて、いつもいじめられる側でした。このまま大人になって暴力を振るわれたらどうしよう……子供ながらに考えたんです。それで忍者の特集みたいな雑誌を買って読んでたら、興味深い記事があったんです。忍者って小柄な人が多かったらしいです。大柄だと城に忍び込むのが都合ってわけで。そんな忍者が大男に立ち向かうときどうするか……今回と同じですね……ハハッ」

「それで……どうやって?」

「目つぶしです。目つぶしをくらうと、少なくとも一時間は目が明けられません。」

「その間に助け出して逃げるのは簡単です」

「なるほど、だけどそんなものを持って、飛行機に乗るときの検査で引っかかるでしょう、いまはチエックが厳しいから」

「それも問題ありません、目つぶしは向こうでも作れます。レシピがあるんです。材料は卵の殻をすりつぶした物とか、唐辛子とか」

「救出の現場ではアドリブですね、それはぶつつけ本番で」

「なるほど人の歩みってというのはさまざまだね。弱い人はそれなりに身に着けたことがあるんだね。非常に興味深い……感心しました」

山神が頷いている。

深センには来週の早いうちに出発することになった。三人は綿密に打ち合わせを進めた。

土曜日だった。サブロウは銀座に行き、ある買い物をした。

夕方、家に帰ると入り口で陽子と出くわした。

「ヨーコ、いいものあげるよ」

サブロウは買ってきた紙袋を無造作に陽子に手渡した。

「なに? えーっ、包装紙で分かるけどブルガリのハンドバッグじゃない。これ、高級品だよ……」

「ほんとにくれるの? ……それってなんのまね、突然に……」

「いいから黙って受け取れよ」

「……分かった、もらうよ……ありがとう」

夕食が終わって陽子は考えた。これは確かにプレゼントだ。でもなぜ今日サブロウがプレゼントをくれるのか分からない……釈然としない。何の前触れもなく突然過ぎる。やはり聞いてみよう。陽子は隣の玄関でサブロウを呼んだ。

「入ってきなよ」奥からサブロウの返事が聞こえた。

「入るよ……」陽子は遠慮なくサブロウの部屋に入った。

サブロウは何か書類を調べているところだった。

「あのプレゼントのことだけど……聞いていい?」

「ああ、あれね……単純にプレゼントさ。急にあげたくなっただけ……」

「あのね、あんたからプレゼントもらったのは小学校の時、生きたカニをもらった時以来なんだけごさ。あのときはあなた、沢山もらいすぎて手に負えなくなっって、もらってくれっって来たんだよね……それで、今度は何なの? カニと同じ?」

「私、考えこんじゃったよ。一応うれしいけど、なんかこう……不気味だよね」
「ふっ、不気味か……そうかもな」

サブロウは笑いをこらえているようだ。

「まあ、私、美人だから学生のころからプレゼントもらうの慣れてるけど」

「なんか絶対おかしいって……普通の男だったら、下心とか感じるけど、あんたじゃね」
「かつ、かつ、かつ、……面白い、そう来るか」

サブロウは本当に笑い出した。

「三十年以上隣に住んでるんだからプレゼントも『あり』だろ」

「深く考えないですよ。実は思いがけない金が入ったんだよ。その関係の仕事でオレ、来週中国に行く。いま切符見てたところ……それで陽子に何かお土産を買ってこようと思ったんだが、中国にいいものなんてないよね。だから、どうせ買うなら日本で買っちゃえ、つなつたわけよ」

「へーっ、そういうこと、まあ一応説明にはなってるね、わかったわよ、ありがとう」

「それで中国の仕事って何？ 前にも一度行ったでしょ。またそれ？」

「そうそう深センの機械メーカーの視察」

「あのね、あなた中国で嫁さん見つけなさいよ。きっと日本人すごい人気だよ」

「ヨーコ、おまえこそずっと彼氏いないだろ、もう遅いぞ」

「ちよっとその話題避けない？」

「そうだな、わかった避けよう……明日さ、山下公園あたりで食事しない？ それもおごるから」

「なに……そんなにお金入ったの、まさかヤバイお金じゃないよね」

「バカ、正当な金だよ。営業の成績一位で社長賞もらったんだ」

「わかった、いいよ行こう、で、どんな食事？」

「これから考える……」

「OK、任せる、じゃあ明日ね」

日曜は昼過ぎから車で出た。サブロウはやっぱカジノタワーが気になる。周辺をグルグル回った。回りながらタワーの倒壊に巻き込まれそうなビルを見定めた。少なくとも五棟はやられる。最悪だと七棟になる。山神先生の言う通りだ。たしかに想像される被害は同時多発テロを遥かに超えるだろう。

「ヨーコ、このタワーどう思う？」

「どうって、たしか山神先生にも聞かれたよね、高いなーって思うのと、なんかバランスが悪いつて見える」

「どこが？」

「脚の根本。そこだけ別物って感じだよ。外国のタワー見てもこういうのってないよね」

「根本はピカピカですごく立派じゃない……それでも気に入らない？」

「あのね、ピカピカならいいってもんじゃないのよ。私は日本刀の光り方が好き。タワーの脚は無理やりに磨いた感じ」

完全的に射た評価だ。陽子の眼力は恐ろしい。サブロウは改めて陽子に感心した。

食事は中華街に行くことにした。車で来ているのと陽子が全然アルコールを飲めないか

らだ。

「ああ、満腹……まだそんなに寒くないから横浜公園を歩こうよ」サブロウが誘った。

周囲は暗く、カップルばかりだ。二人は一番海側のベンチに腰掛けた。

「ここにいと恋人どうしてみたいだな、笑っちゃうけど……オレたちってさあ、完全に兄弟の意識だよな。ヨー」見てて全然女を感じないもんな」

「私も同じ、カッコいい男見てゾクツとする感じがあなたには全然沸かない」

「それってさあ、子供のころ素っ裸でおもちゃプールで遊んだからじゃない？ ……」

「かなりあるかも……」

「めっちゃ男っぽい女と、ナヨナヨした男って、この逆転した性格ってなんなの？」

「ちよっと腕見せて」

サブロウは陽子の二の腕をつんつんと押した。

「すげえ力こぶ。筋肉、半端じゃねえな。合気道なんかやるからますます筋肉付くんぞ」

そう言いながらサブロウは陽子の手首をつかんだ。

あれっ、陽子は、「ちよっと、手を離してよ」と、言ったのだがサブロウは離さない。

それどころか反対の二の腕もグツとつかまれた。

これってヤバイ……陽子は手を振りほどこうとしたが、動けない。サブロウってこんな力があったの……そう思った瞬間、逆に陽子は全身の力が抜けた……サブロウの目が座ってる。

陽子は徐々にサブロウに引き寄せられていった。

「バババーツ、バババン、バババン」暴走族の大きな爆音が響いた。

「うるせーっ」サブロウが大声で叫んだ。

二人のムードは吹っ飛んだ。まだ暴走族が出るなんて……二人はすっかり白けてしまった。

「ダメだ帰ろうー！」

サブロウは完全にふてくされた。帰りの車の運転がめちゃくちゃ荒い。逆に陽子は最後までずっと下を向いていた。

家に着いた。陽子はサブロウに小さくつぶやいた「楽しかったよ……」

中国、深セン行きの飛行機はまず香港に向かう。岸田には香港に迎えにきてもらった。香港から橋を渡ればそこは中国だ。わずかな距離であるが橋の向こうとこっちは町の印象がはっきり違う。香港は西側の整然とした感じ。中国側に入るとちよっと雑然とした雰囲気になる。中国側で目立つのは、いわゆる乞食だ。いたるところに粗末な格好をした乞食が座っている。

岸田が忠告した。この人たち、実は結構いい生活してるんですよ。いわば職業乞食というか、演技ですよ。恵んじやダメです。

前回来た時はそのことは知らなかった。サブロウは半端な小銭を少々恵んでやった覚えがある。

サブロウが宿泊したのは中規模の近代的なホテルだった。中国でも深センは最も洗練された都市の一つだ。町の見目はほとんど先進国と変わらない。ホテルの対応も同様だ。

ホテルのロビーで岸田と計画の確認をした。

岸田が地図を取り出した。

「画像の公園はここです。ここからだとな車で約三十分ですね。明日の昼前から張り込みましよう。おそらく一時までには来ると思います」

「その前に目つぶしの材料を買ったね、このあと雑貨、食料品の店に行きましよう。卵と唐辛子でしたっけ、OKどこでもあります」

「岸田くん日本で言う、(すりこぎ)みたいな物ある?」

「ああ、名前は分からないですが見たことあります。食料品の店で見ると思いますよ」二人は食料品店に向かった。幸いにも全てのもものが一店で揃った。

これで準備ができる。卵の殻さえ乾燥すれば、すりこぎで二時間ぐらいごろごろやったら目つぶしは完成だ。ホテルの部屋で問題なくできる。サブロウは安心した。

「先輩、少し時間に余裕があるなら、近くを見学しませんか」

岸田が誘ってくれた。サブロウは一緒に近所を見学した。

「岸田くん、前回もちょっと不思議だったんだが、全然バイクを見ないんだけど、どうして?」

サブロウは市内がバイクや自転車だらけなのを予想していたのだが、全く走っていない。その代り電動のバイクが結構目につく。

「市がバイクを禁止しちゃったんです」

「えー、それは大胆だな、さすが共産主義」

「その代り電動バイクはOKとしたんです」

バイクが少ないからか、町の印象は先進国と、さほど変わらない。漢字の看板がなければ中国と思えない。メインストリートを外れた裏道でも比較的整備されている。この深センだけを見ると、中国は文化的で平和な国だと思えてしまう。

二人はホテルに戻った。明日の計画の再確認をしなければならぬ。

「岸田くん、目的の羊台山森林公園は周囲がどんな環境?」

「そうですね、あの公園は資産家の豪邸があるエリアと工場地帯の境目にあります。私は工場地帯へ頻繁に行くので、あの近辺の地理には詳しいです」

「それは心強い。私の想像だけど、娘さんたちはその豪邸に軟禁されているんじゃないか?」

「たぶんそうでしょう。あの辺の家は庭もすごく広いし、部屋もたくさんありますから。それと、どの家も独自に警備員を雇っています。やはり治安が良くないからです」

「岸田くん、深センって地域は香港に近いから発展したのかな、それとも産業特区みたいな政治的な手法でやったのか、歴史を知ってる?」

「両方だと思います。私が聞いた話では、このあたりは三十年前は本当に何も無い地域だったらしいです。共産党の一声で道路ができ、一気に工場地帯になった。その何も無い土地に住んでいた人たちが国の補償金で金持ちになったというんです」

「ふーん、それは共産党らしいやり方だね。単純に金渡すから立ち退けという訳ね」

「生涯、補償金がもらえると言われて文句いう人はいませんよ」

「なるほど、都市計画にはそれが手っ取り早い……中国の急激な発展はそれだね」

「ただしそれに汚職が絡むから、金持ちはますます肥え、社会問題は封印されていますから犯罪は増えますね……中国の場合、犯罪が大型なのが特徴です」

「今回の娘さんの軟禁事件、というかこの程度だと中国では犯罪と見なされません。ただの隣人同士のトラブル、というぐらいの認識です。だから多くの場合、解決屋を雇って自分で解決するしかないんです。昔の日本だとヤクザに頼んで解決させるような感じ」

「そうか、君には負担をかけないからさ、……ただ車で動いてくれれば充分。じゃあ、明日よろしく」

岸田には明日九時に迎えに来てもらうことになった。

サブロウは明日の準備に取り掛かった。まずは目つぶし粉の制作だ。タマゴの殻を三分、部屋にあるコーヒーマーのヒーターで乾かし、すりこぎで曳いた。それに唐辛子と小麦粉を混ぜると目つぶしパウダーの完成だ。

次に小型のプラスチック容器を改造した発射装置だ。バネが外れると粉がポンツと発射される。これは忍者が使っていた竹製の発射装置のアイデアを再現したものだ。

「ポンツ」、もう一度「ポンツ」、完璧だ。それと天山公園付近の地図。サブロウは目つぶし発射のシミュレーションを何度も繰り返した。

朝になった。岸田が予定通りやってきた。

「おはようございます、ちよっと早いけど公園に行っちゃいましょう」

公園にはすぐ到着した。平日の午前なので人はほとんどいない。公園は五百メートルぐらいの円形でかなり広い。岸田の案内で写真の場所を探した。

「たぶん工場寄りの一番奥……写真で見えた建物があればですから、それがこの角度に見える位置というところ……あのあたりですね」

そこは公園の奥、ちよっと段になっていて木が生えている場所だった。公園の中心から見ると木がブラインドになっている。

「この段差の上から撮ったのに間違いない」

サブロウは確信を持った。

「まだ時間がある……」

サブロウは立ち位置などを何度も確認した。

十一時半、そろそろ想定時刻だ。サブロウは喉がカラカラになった。心臓のドキドキがやたら強い、リラックスしようとする肩を動かすと、肩にすごい力が入っているのが分かる。

「ダメだ、岸田くん、ちよっと小便……」

落ち着かないサブロウは小便を催し、ちよっと木の陰に行き用をたした。

「フーツ、落ち着いた……」人間ってうまく出来てるもんだな……サブロウは肩が軽くなつた。

「先輩、来たみたいですよ！」岸田が指を差している。

銀色のベンツがゆっくりと近づいてきた。

ベンツは想定通り、木の向こう側に止まった。岸田の車は絶妙に向こうからは見えにくい位置に停めてあった。逆にこちらの岸田からはよく見える。

「男が降りました……女性が二人……続いて男……」

「車にだれが残ってない？ いるとまずいんだが……」

サブロウが念を押した。さらに公園を見回す……近くにはだれもいない。

「だれも残っていないです」

「よし決行！」サブロウがドアを開けた。

サブロウは近づきながらいくつかの確認をした……娘さん……あの二人に間違いない……監視役一人はベントツに寄りかかって携帯を見ている。もう一人は携帯で写真を撮る準備をしているところ。

「シエーシエー」サブロウは大きな声で地図をヒラつかせながら、写真を撮る方の男に近づいていった。

サブロウの発音から中国人ではないことに気づいたベントツの男も近づいてきた……もうちょっと……もうちょっと……サブロウは二人が目の前に並ぶようにジエスチャーで引っぱ張った。

いまだっ、サブロウは地図を大きく広げて中心を指さした。男たちが中心を凝視した瞬間、「ボンッ」、地図の裏に隠し持っていた装置が粉を吹き上げた。

「ウワッ」目つぶしの直撃をくらった監視役は大きくのけぞった。

「ウワーツ」二人は持っていた携帯を投げ出し、目を押さえてうずくまった。

「いまだっ、二人とも車に乗って」

サブロウは監視役二人の携帯を拾ってベントツのシート下に隠した。岸田も駆けつけ娘さんたちを誘導した。

「監視員、ゴメンネ！」サブロウはひとこと発して車に乗り込んだ。

「監視役に罪はないと思うけど……ボスを恨んでくれ……これで目が見えるようになるのに約一時間、あの場所だと周りにだれもないから助けにくる人もない。携帯も見つからないから連絡もとれないよね。だから少なくとも約三時間はこの件は伝わらない。その間に国境を越えてしまえばいいんだ。岸田くん国境の橋に急いで！」

「そうだ、忘れていた。二人ともパスポートは持ってる？」

「取り上げられたのは携帯だけです。監視付きだけど外出はできました。その時パスポートは持っていないといけないのでバッグに入ってます」

「よかった完璧だ。これで帰国できるぞ」

車は猛スピードで国境へ向かった。

「どうでした二人とも。状況が分からなかったでしょう？」

「突然男が二人やってきて、すぐ別の場所へ移るといっんです。何を聞いてもノーコメントで、私たちもこれはヤバいと話し合っていましたけど。何も情報がないと動きようがないんです。こういうのを軟禁って言うんですね」

「父からメールが入ると、この通り書けて書かされるんです。だからなんとかメッセージを隠して入れたんです」

「それ、気が付きましたよ。SOSのSでしょ」

「ワーツ、良かった。気づいてくれてた」

「それで日本で何が起きてるんですか？」

サブロウは口が止まった、事件をどこまで話してもよいものか。そんなに大事ではないと説明した岸田への手前もある。

「ちょっとビジネスのトラブルが悪化しただけです。帰ったらお父さんに聞いてください。いまは疲れてるでしょうから、あまり考えないで帰りましょう」

岸田には国境通過、飛行機に乗るまでお世話になった。

「岸田くん、恩に着るよ……もう、感謝が大きすぎて適当な言葉が思い浮かばないよ」

「先輩、大げさですよ。先輩に営業のコツを教わったから今の自分があるんです。こちらこそありがとうございます」

「帰国したらまた声かけて、最高におごるから。それじゃあ……」

「ピピーン」メールが着信した。

「ムッ、先生からだ」

サブロウはこれから「うれしい報告」をするとところだった……これに返信だな。サブロウは、そのまま返信しようとした。ところがメールの内容がおかしい。

本文がなく、メッセージ欄に数字の1が並んでいる。

これ、なんだろう……間違えて押ししてしまったような……いや、とりあえず（救出大成功です。詳しくは成田に着いたら）で送ろう。すぐ詳細を聞いてくるはず。

サブロウはメールを返した。

飛行機の発進までに先生から電話も返信もない。なにか忙しいんだな。サブロウは疲れて飛行機で熟睡した。

成田に着いた。サブロウはさっそく山神に電話を入れた。しかし電話に出ない。メールにも返信が入っていない。おかしいな……結果を待ちにしているはずだ。サブロウは福田にも電話を入れた。なぜか福田も出ない。そうしていると福田の娘、美樹が血相を変えて走ってきた。

「携帯がないから固定電話で家に電話したの、そしたらお母さんが……」美樹が泣き出した。「お父さんが事故で亡くなったって……」それ以上は言葉にならなかった。

美樹の電話を待つて自宅に電話をした山神の孫、亜希がこちらを見て呆然と立っている。これは……サブロウはその一瞬で察しがついた。

山神研究所だ、サブロウは研究所に電話を入れた。

「田中サブロウといますが、先生に何かありましたか？」サブロウはダイレクトに聞いた。

「ああ、お世話になっております。山神は事故で亡くなりました」

「すみません、どこで、どんな事故ですか？」

「私も詳しくは分からないんですが、昨日福田さんと御殿場の工場へ行った帰りに東名高速の大井松田付近でガードレールを超えて谷に落ちまして、ほぼ即死だったようです」

「あの、相手は誰ですか、事故なら相手がいますよね！」

サブロウが大声になって尋ねた。

「それが相手がいらないか、いても逃走したようなんです。警察が調べていますけど、目撃者がいないらしいです」

……自爆事故のはずがない。福田さんはいつも安全運転だ。やられた……ヒットマンだ。人質解放の情報が届いて、暗殺が即座に実行されたと見るしかない……恐ろしい。サブロウは電話を切った。

サブロウは何も考えられなくなった。家に着くまでの間、全く何も考えていない。ただ茫然として抜け殻のように動いた。

家の入口で、また陽子に出会った。

「ようっ、お帰り！ いい娘いた？」

陽子が威勢よく声をかけた。

サブロウは目も合わせず全く無言で家に入ってしまった。

こいつ、絶対おかしいぞ……陽子はサブロウの異変に気付いた。こんなサブロウを今まで一度も見たことがない。中国でなんかあったな……しかも相当深刻だ……これは放っておけないぞ。陽子は探りを入れることにした。

玄関から声をかけた「サブロウ、入るぞ」……返事がない。もう一度叫んだ「入っていない？」ちょっと間をおいて返事がきた。「どうぞ……」

陽子は、おそろおそろサブロウの部屋を覗いた。サブロウは椅子に掛けて天井を見ていた。

「どうしたのよ、あんた変だよ？」

陽子がダイレクトに言うのと、

「うーんそうかな？ ……」何か、はっきりしない返答だ。陽子はちよつとおふざけに振ってみた。「メチャいい娘に振られたんじゃないの、もうちよつとだったとか？」

「うるせー、そんなじゃねーよ」サブロウが怒った。

「じゃあ何なのよ、私に言えないレベルの事？」

「そおっ……言わない！」

「分かったよ……私帰る。勝手に悩んでなよ。せっかく心配してやってるのに」

陽子はムカついて足音をドンドンと立てて帰った。

「陽子には言わない……」サブロウは小さくつぶやいた。

サブロウ天井を見ながら考えた……「これでこの大問題を知っているのは自分だけだ。先生の危惧していた通りになってしまった。で、オレはどうすればいいんだ……オレにできることは何だ……公表する？ ……できるけど誰が信じる……全然無理だ、何の説得力もない。ああっ……やっぱりオレは無力だ。大惨事が起きる確かな情報があるのに。」

がっくりうなだれたサブロウが、ふっと頭を上げた。人質救出を申し出たとき、万が一の可能性も追ってみるとオレは言った。気負って言ってしまった事だが、いま思うと確かに万が一の事だった。でもそれは運よく、本当に運よく成功した。たまたま誘拐の現場が深センで、そこに知り合いの岸田がいた——たまたま岸田が写真の場所を知っていた。こんな幸運の連続って本当にあるんだな。だとしたら、また万が一を追うしかない。運が尽きてないことを祈るしかないな……サブロウはさらに一つの可能性を追うことにした。

山神の葬儀は壮大に行われた。サブロウは陽子と一緒に参列した。大学教授や企業の社長クラスが続々と列を作った。人質さえ取られなければ、先生が声を上げれば、この問題は解決できたはずだ。しかし娘さんの誘拐、軟禁は事件にさえなっていない。全てヤツらの思う壺だ。……この参列者の中にヤツらが平然と加わっている。そう思うとサブロウはいたたまれなかった。

サブロウには芸名ハリー勉（つとむ）という友人がいた。本名は隼士勉、中学の同級生だ。彼は歌手として一定の地位を築いている。サブロウは悩んだ末、彼に問題の一部を明らかにすることにした。

サブロウはハリーのコンサートの翌々日、彼を訪ねた。この日なら疲れが抜けているはずだ。それでもハリーは昼まで寝ていた。

「こんにちわ、ハリーいるか？」

サブロウの声でハリーが眠そうに出てきた。「おうつ、サブロウ、入りなよ」
「さっき起きたばかりだよ、何か食う？」
「おうっ、お土産にシウマイな、持ってきたから一緒に食おう」
「なに、気が利くじゃん、お前らしくない」
二人で三人分のシウマイを一気に食べた。
「よし満腹、話って何？」
ハリーがタバコを吸いながら椅子にふんぞり返った。
「あのさ、おまえと真面目な話してたことないけど、かなり深刻な話なんだ」
「なんだよ……お前だから金でも女でもないよな、何よ？」
「驚くと思うけどいいかな？」
「なんだよ、もったいぶってんじゃねーよ、驚かねーよ」
ハリーが少しイラついて叫んだ。
「人が死ぬ話……」
ハリーがガバツと起き上がった。
「えっ、おまえ、ほんとにそんな話持ってきたのか？」
「ほんと……」
「おいっ、お前じゃなかったらケリ倒すところだぞ、」
ハリーがサブロウのエリをつかんで睨んだ。
「やっとなマジになったな。説明する」
サブロウが話し始めた。
「カジノタワー……あれが倒壊する」
「倒壊？ ……あれが？」
「えーっ、変なヤツっていっぱい知ってるけど、お前がそんなこと言うって、どう考えたらいんだ？」
「だから、それが事実だっていうことを説明に来たんだよ」
ハリーが黙り込んだ……三分間無言だった。
「説明してよ……」
やっとなハリーが口をひらいた。
「オレの仕事で知り合った山神博士、その人が予言したんだ。構造学の権威だよ。ビルでも橋でも設計しちゃう。特に特殊なものが専門だ。その人が先日殺されたんだ」
「山神？ たしかに最近テレビでやってたな。でもあれ、事故だろ？」
「ちがう、暗殺だよ」
「暗殺って、お前がどうしてそれを知ってるんだ。根拠はあるのかよ？」
「もっと話すと分かってくるよ、続けるよ」
「オレは陽子とロボットのデモを見に行っただけだ。先生は知り合いというよりお客さんの一人だったんだ」
「それで話が合ってロボットの研究所へ二人一緒に誘われたんだ。先生が目をつけたのは陽子だけだな……オレはおまけ」
「陽子はタワーの設計がおかしいのを目で見抜いたんだ。先生は感動してオレと陽子にセットで説明したかったらしいが、ちょうど陽子は仕事で行けなかった」

「その時の先生の説明によると、あのタワーの脚部に欠陥があって、風速四十メートル以上の風が当たると必ず町側に倒れると言っただ」

「タワーが倒れたらどうなるか、同時多発テロ以上の惨事になる。先生はそれを止めようと危険を公表することにしたんだ」

「ところがそれを公表されると困るタワーの関係者、主に中国資本だな、それが先生の口封じに孫娘たちを誘拐したんだ、オレは娘さんを救出に深センに行ってきた。救出して日本に帰ってきたら先生が事故で亡くなったという、これが事故の訳ないだろ」

ハリーはサブロウの話を黙ってずっと聞いていた。

「話は分かった、ウソではなさそうだ。それでオレにどうしろって？」

「先生は実力行使の準備をしていた。内容は分からない。オレにできることなんかほとんどないんだが、先生の希望は、もし実力行使に失敗したら、オレにこの件を世間に公表してほしいということなんだ。いま、まさにその段階にいる。先生が暗殺されたということとは実力行使に失敗したということと同義だな」

「だからどうしろと？」ハリーが真剣になった。

「この事実をアーティストハリー風（ふう）に世間に知らしめてほしい……たのむ、オレには発言力がない。オレが騒いでも、ただ笑われるだけだ」

「悪いが一つ守ってほしいことがある。陽子を巻き込まないでほしい。あいつが本当の事を知ったら命がけで動く」

「サブロウ、はっきり言っていて心配はある。確認したいこともある。だけど事は急を要する訳だろ、お前がそこまで言うなら協力する」

ハリーはタバコをもみ消しながらニヤツとして親指を立てた。

「ハリー、ありがとう感謝するよ……」

サブロウは深く頭を下げた。

「バーカ、みずくせーっていうんだよ。男同志だ、それ以上言うな」

ハリー勉の動きは早かった。彼は自分のブログでタワーの危険性を語り始めた。

『☆ハリー、今日のひとこと☆ きょうはちょっと怖い情報がある。みんなも知ってるカジノタワーって見て、なんか感じないか？ オレの知ってる技術屋が、あれはバランス悪いって言ってるぞ、バランス悪い物って丈夫じゃないんだ。実はオレもそう思うんだ。何か意見あったら聞きたいな』

ハリーのブログは人気がある。さっそく反応が出た。

『同感です。オレもそう思った、脚がゴツツ過ぎるよね、それなのにピカピカなのがダサイ』

『ピカピカの太い長靴履いたみたい、絶対変です』

『東京スーパーツリーより高いけどスマートじゃないよね』

『長靴を見ると、左右の直径が違うよね、あれは設計ミスなの、それともデザイン？』

ハリーの第二弾はもっと強烈だった。

『☆ハリー、今日のひとこと☆ 去年の台風でカジノタワーが全然揺れなかったということが話題になったよね。それってどう思う？ 東京スーパーツリーは揺れるよね。揺れない方がいいと思うけど、限界超えると折れちゃうとしたらヤバくない？』

これには反応が一気に増加した。

『同感、東京スーパーツリーは揺れる、だけど五重塔構造だから揺れを逃がすことができる、カジノタワーはガチガチ、パンパンに出来てるだけから、一気に折れるぞ』

『東北大震災で、高層ビルが揺れるけど倒れないというのが証明されたじゃない』

『あれって、知らされてないけど、鉄鋼の大部分はC国とK国製なんだ、国産じゃない。オレのオヤジは鉄鋼製造会社だから、そういうこと知ってる』

『オレは知ってる。タワーの設計はC国だぞ、C国に技術あるのか？』

SNSでは情報は、必ず不安を煽る方向に拡大する。サブロウの狙いは当たった。しかし話題になったあと、必ず跳ね返りが来る。サブロウは危険の証拠を示さなければならぬのだ。幸い、深センに行く前にサブロウは山神から、より詳細な説明受け、カードと暗唱番号を受け取っていた。それがあれば山神博士の部屋に無条件で入ることができる。

建築の関係は山神研究所だが、問題の資料はロボット工場の方だ、サブロウは御殿場に飛んだ。

工場に着いた。サブロウの到着を聞いて工場長の今井さんが出てきた。

「こんにちわ、このたびは大変なことになりましたね」サブロウはとりあえず挨拶した。

「先生が亡くなって、今後どうなるのか皆不安ですが、会社としては半年分の仕事は入ってますから、それを継続します…：田中さん、今日は部品の納品ですか？」

「いや、私、先生からロボットのデモの広報みたいな仕事を頼まれていたんです。それで資料が必要なんで」

サブロウは出まかせで答えた。

「あっ、それっていま整備してるこれのことじゃないですか」

見ると真新しいロボットが並んでいた。

「先生と福田さんはこれの確認に来て、帰る途中事故に会ったんです」

「ああ、それじゃそうかもしれません」

「先生の部屋、探さしてもらいます」

「どうぞどうぞ…：あの、ところで田中さんは先生とお知り合いだったんですか？」

「いや、特に深いものはないんですが…：」

「そうですね、その部屋は私でも入れない部分なんで、どうしてかなと思ひまして」

「でも部屋のカードと暗証があるということは先生と特別な関係という証拠ですから、今は私どもに断りなく自由に出入りしていただいて構いません」

「すみません、宜しく願います」

部屋に入ると、深センに行く前に見た資料がきちんと並べてあった。(カジノタワー問題点整理)、(カジノタワー問題点、広報&実証)、この二部は短時間だが以前に説明を聞いたものだ。

他に二冊、初めて見るファイルがある。(ロボットデモXX)、(ロボットデモ3X)、(ロボットデモ4)、(カジノタワー除去)

おそらくこの(除去)が実力行使に関する資料だな…：オレがいま必要なのは(広報&実証)ズバリこれだな。サブロウはさっそく内容に目を通した。

なんとなく覚えているが、内容が詳細過ぎる。これはとても数時間で理解できる代物じゃない、この場所ではムリだ。サブロウは二部を家に持ち帰ることにした。

「今井さん、資料持ち帰らせていただきます」

「ああ、その部屋に入れることは持ち出しも自由です。遠慮なくどうぞ」

部屋を出るとロボットが勢ぞろいしていて、動き出す前のような雰囲気だ。技術部の山崎さんがスタンバイしている。

「今から動かすんですか？」

「そうですね。デモ3Xです、デモ3の完成直前に、最終的に問題がないか確認するプログラムなんです。これでOKになると(X)の文字が消えて、正式のプログラムになるわけです。デモ3が何かというとロボット消防士ですね。ロボットが消防士の動きを真似て動きます。実際に消火器を持って火を消すデモです。人命救助にも応用できます」

「私、大工のデモで感動しちゃったんですが、どんどん進化してるんでしょう」

「あれはデモ1です、デモ3になると複数のロボットが連携して動きますよ」

「じゃあ行きます」

山崎がボタンを押すと数台のロボットが一斉に動き出した。まず二台のロボットが自ら消火器を取りに行き、安全ピンを抜いて消火器を振り回した。消火器がカラになると交換に戻る。待機しているロボットは次の消火器の準備と救助に使う道具を用意している。見事な連携だ、しかも猛烈に速い。五分でデモは終了した。

「いや、すごい一言ですね……」サブロウはあらためて感心した。

「ちょっと聞きますが、このロボットってどのくらいの重さを運べます？」

「だいたい人間の二倍、約百キロぐらいですね。人型のロボットは便利ですが、逆に構造的に重さに対して不利なんです。何トン、みたいな重さは将来も不可能です」

「プログラムは難しいんですよ。使うのも……」

「基本プログラムはそりゃ難しいでしょう、だけど使うのはごく簡単、そこが先生と福田さんのすごいところ。細かいところの動きはロボットが自分で考えるんです。それをどう連携させるかがミソですね」

「山崎さんもプログラムを作るんですか？」

「この分野は分業が徹底しています、私の専門は機械的なメカニズムが動く部分の製作です。その部分部分が正しく動けばいいんです。プログラムの作業も部品みたいな小さなプログラムが集まって一つのプログラムができるんです。それが全部わかっているのが先生です」

「なるほど、すごいなあ、それでも先生にとっては副業だったんですね……」

「それじゃ、これで帰ります。デモ、面白かったです」

「また、いつでもいらしてください」工場長が笑顔で送ってくれた。

サブロウは家に着くなり、すぐ資料を広げた。二部目の(広報&実証)がいま必要な資料だ。あまりの資料の複雑さに困惑したサブロウは逆引きを思いついた。この手の書類は、最後に結論が書いてあるに決まっている。ならば結論を読んで、それに導く論理を遡って探せばいいはずだ。サブロウは結論と思われるページを開いた。

(A) 所見

一、避雷針構造の所見・・・当社原図の通りと確認、故に可

二、上部パイプ構造の組み上げについての所見・・・写真による比較で当社原図と完全に一致。故に問題なし。但し、使用部材についてメーカー名が不明なため、強度未確

認。

三、下部特殊環状脚部についての所見・・・抗張力鋼材使用のサブマージ溶接による環状部材と推定されるが、材料鋼板の板厚過剰につき、熱処理等の不完全が予想される。故に不可。

四、上部パイプ構造と下部環状脚部の適合性についての所見・・・硬軟構造の接続による靱性不統一により、対風力の計算が未完成であること、故に対風力未決で不可

五、耐震構造の所見・・・二、三、及び四、により不可

(B)検証

一、済み

二、材料供給ルート不明の故、検証不可

三、既に取り付け済みであることにより、X線、あるいは超音波探傷器による非破壊検査が妥当、しかし先方が拒否すれば、強制は不可、依って検証不可

四、計算には先方の全図面提出が不可欠、依って検証不可

五、検証不可

サブロウはこの資料を見て愕然とした。このページが間違はなく結論であろう。このページで示された事は避雷針の件を除き、危険性を指摘したとしても、先方が好意で全面的に協力してくれなければ検証は不可能ということだ。もし山神先生が自ら声を大にして警告すればそれも可能だったかもしれない。しかしそれは誘拐によって封じられた。こうなると実力行使以外に打つ手はないということだ。

サブロウは自分にそれが出来るのかと自問すると同時に、胸を突く不安に苛まれた。ハリーが、……

やはりネット上は騒然となっていた。ハリーが投げかけたタワーの危険性の指摘に反論がぶつかりはじめたのだ。

『実際に前の台風で全く何の被害も出なかったんだよ。それなのに危険だというのは、なにか狙いがあるんじゃない？ カジノタワーが危険じゃないと困る人がいる訳？』

『人気を奪われた東京スーパーツリーのやっかみじゃないの？』

『オレは相撲取りの足みたいでカジノタワーの方が好き』

『とにかく言い出したハリーが落とし前つけるべきだよ』

さらに今週発売された週刊誌が火をつけた。

『ハリー勉に虚言癖、カジノタワーが危険とは？』

『いま東京東京スーパーツリーを追い越し、人気沸騰中のカジノタワーに思わぬ難癖がつけられた。ハリー勉がブログでタワーの危険性を指摘しはじめたのだ。読者をご存じのように、タワーはすでに比較的大きな台風に見舞われている。しかしタワーがビクともしなかったことをデータが示し、話題になった。なぜ急に、(難癖)としか言いようのない指摘をするのか……実はハリー勉の(難癖病)は今に始まったことではない。二年前にも……』

週刊誌だけではない。ワイドショーでもこの件を取り上げ始めた。

『おはようございます早朝ワイドです……今日もいい天気ですね。みなさん後ろに映ってるの分かりますよね、通称カジノタワーです。これってなんか変ですか？ 私はカッコイイと思ってるんですが、なんとこれが倒れるって言ってる人がいます。言ってるの

は、ハイ、画面変わります……この人、そおつ、ハリーです』

『ハリー、おはようございます。早朝ワイドです。ちょっといいですか、カジノタワーなんですか？』

ハリーはインタビュアーを無視した。

肩透かしをくらったワイドショーは辛辣なコメントを並べた。

『ハリーさんはコメントを拒否しましたね。なぜコメントを出せないんでしょうか？ ちよっと彼のブログを見てみましょう……最初なので、バランスが悪いと書いてますね、次の……これが問題を大きくしたんですが、揺れないと折れちゃうって書いてるんですね、今日は建物の構造設計に詳しい上羽さんに来てもらっていますのでお聞きします。上羽さん、これって危険ですか？ 折れやすいっていうのはどうでしょう？』

『あのお、私、呼ばれたんで来ましたがムダでした。これ……折れますって言って、そうですねって言う人っていますかね……ハカバカしいでしょう。理屈言う必要ないです。折れませんって』

『そうだと思いますが、そう言ってしまつと、このコーナー終わりなんで、仮に、仮にですよ、形あるものは必ず壊れるとして風速二百メートルの風が吹いたらどうですか？』

『揺れないから折れるって言つんでしょ。計算しないと分からないけど確かに二百メートルだったら折れるかもしれないです。原爆が落ちても折れませんっていうのが一つのキャッチフレーズになつてるように、ありえない事を前提に真面目に議論しちゃダメですよ。じゃあ私が断言しますよ。風速百メートルだったら絶対折れません。風速百メートルって過去にないでしょ。ハイ、これで終わり……くだらない』

ハリーがインタビュアーを無視し続けていることが火に油を注いだ。別のワイドショーでも取り上げ始めたのだ。

『カジノタワーの件で、私、当事者であるタワーで取材しました、昨日の取材です』

『すみません、いまこのタワーの事が話題になつていますが……』

インタビュアーが遠慮がちにタワーの責任者に声をかけた。

責任者はかっぶくのいい中国人だった。

『私がいま責任者です、白です。その件聞いてます。私ね、これ、何か問題作つてると感じる。タワーのイメージ落そうとだれか考えてるね。私、許さないよ。これ、営業妨害ね。弁護士頼んだ。許さないから……』

『どうも訴訟問題に発展してきました、こうなるとハリーの対応が重要になってきますね』
ワイドショーが一斉に取り上げる事態となった。ハリーはもうインタビュアーを無視することは難しくなつていた。

『ピンピン』サブロウの携帯が鳴った。ハリーだった。

『サブロウ、知つてると思うけど收拾つかなくなった』

『ハリー、悪い……オレの責任だ』

『しょうがないよ。オレは承知で受けたんだ。ところで危険の証拠ってないのか？』

『あるけど検証が出来ないんだ。だから証明にはならない……申し訳ない』

『それでもいいよ渡してよ……』

「わかつたすぐ持つてく」サブロウは（所見）と（検証）のページをコピーしてハリーに渡した。

ハリリーはとうとう（早朝ワイド）に引っ張り出された。司会者がハリリーに問いかけた。『ハリリー、結構大きな問題になってしまったんだけど、私はあなたがインタビュを拒否し続けたのがいけなかったと思うんだけど、どうですか？』

『オレのブログでさ、確かに言われてるような事は書いたけどさ、よく見直してよ。オレ断定はしてないぞ。ネットで過激な言い方をするヤツっていっぱいいるじゃん』

『たしかにブログの内容では、断定はしていませんね。だけどあなたぐらいの人気者だったら、それが拡大したらどうなるって事まで配慮する必要ってあるんじゃない？ 当の力ジノタワーが営業妨害だって言い始めたくらいだから』

『それよりね、私が聞きたいのは最初のブログに出てくる（技術屋）ってあれですか？ その人の情報が基になってる訳でしょ』

『言えないね、友人だから……だけど今日は（所見）ってのを持ってきた。これは見せられる』

ハリリーは（所見）のコピーを見せた。皆は一斉に所見に注目した。まもなくそれは画面に大寫しになり、コメントーターの論議が始まった。

『これは確かに専門的な記述がある。誰が書いたのかね』

『いや、だれかに頼んでそれっぽい内容をでっち上げたとみるべきでしょう、だって署名がない。だから内容について責任の所在がないでしょ。これはインチキ』

『なんだかんだ書いといて、検証が全部不可って何なの？』

論議の大勢は、（でっち上げ）に傾いた。

腕を組んで黙って論議を聞いていたハリリーが我慢できず突然中央に出てきた。

「やってらんねーっ」大声で叫ぶと書類を取り上げ、丸めて床に投げ捨てた。

スタジオは騒然となった。ハリリーはそのあと無言でスタジオを出て行ってしまった。

番組がメチャメチャになっている。ADがチラチラ画面に映ってしまい混乱が丸出しだ。

『ちよっと視聴者の皆さま申し訳ありません。ハリリーが興奮して出て行ってしまいました』

收拾に困っていた司会者に、タイミング良く緊急気象情報が入った。

女子アナウンサーが台風情報を読み上げた。

『緊急気象情報です。沖縄に近づいていた熱帯性低気圧が台風に変わりました、これなんです。勢力の上がり方が異常なほど急激で過大です。すでに沖縄で風速六十メートルを記録しました。スピードも極端に速く、このままですとあさってには関東地方に到達します。海、山とも嚴重な警戒が必要です』

『六月の台風も珍しいですが、これ、超大型になりますか？』

『そうですね、このまま更に成長すると史上最大になりますね』

いっぺんに話題が台風に変わってしまった。ところがコメントーターの一言で話題は力ジノタワーに戻った。

『風速六十メートルが来たら、タワーは耐えますかね？』

以前風速百メートルでの安全を保証した専門家に皆の目が集中した。

『いま六十メートルだから成長したら七、八十メートルになるんとかやう？』

別のコメントーターが茶化した。専門家が急に真面目な顔になった。

『去年の台風は風速三十メートルそこそこやったやんか、これ、少なくとも倍やんか？』

番組のテーマはいつの間にかこの台風にタワーが絶えるかどうかになってしまった。

サブロウは面白半分のこの番組を憤る思いで見ている。そしてハリーに申し訳ない。ハリーは最後までサブロウの名を明かさなかった。ハリーありがとう……お前は本当の親友だ。サブロウは涙をこらえられなかった。

巷の話題はこれを境に、台風の風速の増加予測、それに対してタワーが実際何メートルの風速に耐えられるかに移った。耐える、倒れるのコメントが錯綜し、ネットもその話題で溢れた。

ついにその話題は実社会にまで影響を及ぼし始めた。タワーの周辺のビルの住民が避難を始めたのだ。「万一倒壊したら……」その不安が加速度的に拡大している。

翌日、台風は和歌山にまで到達した。風速は六十五メートルまで増加し、かなりの被害が報告され始めた。この勢いだと七十メートル、いや八十メートルもありうる。と、風速予想は日本中の関心事になってしまった。そしてカジノタワーはというと、観光客はゼロ、従業員の半数が臨時休暇を願い出る事態になった。

ところが台風は箱根を越えるところで急速に勢力が低下した。風速は四十メートルに落ちた。大げさな予報は外れたが、それでも充分強力な台風である。テレビ報道は全局がカジノタワーの中継になっている。画面には完全に空になったカジノタワービルと、タワー支配人、白さんの苦虫を噛み潰したような顔が繰り返し出てくる。

ついに台風は横浜に到達した。風速は三十九メートル。かなりの雨を伴っているので、風圧は数字より強く感じられる。木々は大きく揺れているが、テレビ局が急きよ取り付けたタワーの揺れ表示盤は、わずかしき動いていない。揺れは確かに少ない。

約一時間で台風はピークを過ぎた。さらに千葉県に入るとグッと勢力が落ちた。

結局タワーには何も起きなかった。一転、テレビの取材は白さんに集中した。

「大騒ぎになったのに、何も起きませんでしたね。これは良かったと見るべきでしょうか？」

そのインタビュアーに白さんが目を剥いて激怒した。

「とんでもない！ 大損害です。デマを飛ばしたヤツ、絶対許さないよ。八つ裂きにしてやるー！」

白さんは荒々しく大声を出しながら十人ほどの取り巻きを引き連れてテレビ局に乗り込んできた。取材陣が駆け寄った。

「テレビ局は正義の味方でしょう。悪人探すの手伝ってください、ハリーってどこにいますの。テレビ局はアイツを捜す義務があるでしょ。警察も動くよ、これ、犯罪ね」

白さんはすごい形相で一日中、テレビ各局をめぐり大騒ぎをした。煽られたテレビ局は一斉にハリーを探し始めた。ところがハリーは見つからなかった。

サブロウもハリーに二度電話を入れた。しかし出ない……サブロウは頭を抱えた。ハリーが苦しんで……サブロウは朝までほとんど眠れなかった。

ボヤツとしたまま、目を覚まそうとサブロウは缶コーヒーを買った。家に帰って無意識にテレビをつけた。缶コーヒーの栓を開けたとき、映像が目に入った。出たのは「ハリー暴力騒動」の文字だった。

いつものコメンテーターが難しい顔で解説している。

「やっぱね、ハリーはもっと大人にならなきゃいけないよ。コンサートじゃないんだから。取材する方はやっとな捜しあてたから殺到するのは当然でしょ。それを押し返すから転

倒したりするんですよ。感情そのままに動いたらこうなるんですよ。」

それを聞きながらサブロウは缶コーヒを両手で持ったままうつむいた。

「サブロウ」……「えっ」声に振り向いた。なんとそこには陽子がいた。

「あんた朝から死人みたいな顔でコーヒー買ってたからついてきたの、全然気づいてなかったわね、どうかしてる。ねえ、どうしたのよ？」

「ねえってば、私に言っちゃいけない事？」サブロウがますますおかしい——陽子はしつこく問い詰めた。——どうしても聞き出す。——陽子はサブロウの手首をつかんだ。

「うるさい！ おまえに関係ない」サブロウは陽子の手を振りほどいて表に飛び出した。

飛び出すのが急すぎて陽子は追えなかった。帰ってきたら、もういちど問い詰めるか。

でもイヤーな感じ。マジにヤバイわ……陽子は首を振った。

飛び出したサブロウは一直線に御殿場のロボット工場へ向かった。——ハリーの件でハツキリと分かった——広報で世間に知らしめるのは無理だ。こうなったら先生に代わって実力行使をするしかない……しかし、いったい先生はどんな方法を考えていたのだろう。車を飛ばしながらサブロウは思いを巡らした。

爆破。……タワーの足元を爆破するというのが、まず凡人の考えることだが、先生がそんな方法をとるとはとても思えない。第一、ダイナイトをどこで調達する？ ……ありえない。

飛行機で突っ込む？ まずはありえない。大型トラックで突っ込む？ 可能性はあるが、実際は脚の部分の周りには沢山の工作物があって、トラックを直接脚にぶつけることは無理だ。

どう考えても不可能に思えるが、先生は明確に倒すと言った。やはり考えを元に戻して、爆破以外に方法はないだろう。自分の知らない、何らかのルートで爆発物入手するつもりだったのだろうか？ 仮にそうだとすると、どうやってそれを怪しまれずにタワーに仕掛けることができるのか？

先生はタワーを海側に倒すとも確かに言った。当然、町側の被害を避けるためだが、それには海側の脚二本を確実に破壊しなければならぬ。——もし爆破だったら、必ず脚を壊せる破壊力がないといけない。大きな爆発では、脚を壊すと同時に周囲に被害をもたらすことは必然だ。ちようどよく脚が壊れて、しかも周囲に影響が少ない爆発など、考えることができるはずがない。

車は一時間ほどで工場に到着した。工場では技術の山崎さんが、ロボットを整理しているところだった。それをみてサブロウがひらめいた——先日/demoで、ロボットは人間のできることはほとんどマネができると分かった——それならば、

「山崎さん、このロボットってナットを外すことはできますか？」

サブロウはロボットを使って、タワーを分解できないかとひらめいたのだ。

「その程度のことには非常に簡単です。なんならそこにある予備のロボットで実演してみましようか？」

これは、——グッドアイデアだ。サブロウは、ほくそえんだ。

「あの、ちょっとバカげた例ですが、ロボットに指令して、例えば東京タワーを分解することなんか出来るものでしょうか？」

サブロウは、ズバリ聞いてみた。

「八八ハツ、東京タワーですか。……出来ませんね」
山崎さんにいきなり否定された。

「どうして出来ないんですか？」

「東京タワーって、ボルト、ナットで組んであるんじゃないですよ。あれはリベットです。あのころは鉄骨を繋ぐのに、リベットといって、ネジのないボルトみたいのを焼いて鉄を溶かしておいて、反対側を大ハンマーでたたき潰すという職人技で、原始的だけど緩まない方法で出来ているんです。リベットって外すことは出来ないですよ」

サブロウは自分の知識のなさに愕然とした。そして——思い出した。東京スーパーツリーの広報に、「骨組みは、ほとんど溶接で繋がれている」という一節があった——カジノタワーも同じ工法だ。ということは、リベットより遥かに丈夫にちがいない。ますます無理だ。

「すみません、変なこと聞いて」

サブロウは頭をかきながら部屋に入った。

(カジノタワー除去)……この資料に何が書かれているか？ サブロウは一瞬、開くののためらった。——内容が理解できたとして、自分に実行できるのか？——できないとしても、なにもしないことが許されるのか？——結局自分には、やる以外選択はないのだ。サブロウは、生ツバを飲み込んだ。「ゴクリ……」飲み込む音が脳に響いた。

除去計画は六章になっていた

一、タワー立地と環境

二、実行方法考案

三、準備

四、実行

五、人的被害の防止

六、不良個所の確認と広報

サブロウは覚悟を決め、とにかく逃げずに全部を読もうと心に決めた。

(一、タワーの立地と環境)については、周囲の状況を正確に分析したものだ。それによると、確かに海側の公道に直角に倒すことができれば、全く周囲に影響がないことが分かる。

次は(実行方法考案)、これが核心だ。サブロウは眠い頭を叩きながら目を凝らした。

二、実行方法考案——

『問題の脚部はサブマージ溶接による環状構造であるが、溶接技術未熟による熱ひずみと、それに対する熱処理の強行によって、事後割れが生じたものである。しかしながら熱処理の結果で非常な硬度に達している部分の破壊は、中々難しいものがある。よって、打撃による破壊は適切ではない。むしろMDによる破壊が適切である。MDの器具の運搬については、隠密にされなければならない。実行についてはRD4Xにて確認が必要である。RBの配置についてはR1とR2、は下部、R3とR4が上部とする。R3はSKSの後、EAを出し、R4はSKSの後LBを最上階に搬送する』

「うわっ……」、全く何のことかわからない。用語が専門的過ぎて分からない上に、略語が多すぎる。サブロウは頭を抱えた。

次に、(準備)とは、この作業の準備のだが……。

三、準備――

『MDの器具は消火器と類似していることから、偽装が可能。事前にCCに搬送しておく。当日までにRD4Xは完全にRD4昇華されていなければならない。RBについては製作を済ませておくが、事前に安全性の確認はできない。R4との暗唱番号は不定とし、実行日決定後、数字(2149)に当日の日付を数字として加えたものをRD4に書き込む』

これが(準備か)暗証番号だけは実行日さえ分かれば推測できるようだ……。

四、実行――

(実行)……実行といっても、この計画はこれからスタートするのか、もうスタートされているのか、それすら分からない。先生はすでに亡くなっているのだから、いまからスタートは出来ない……自分がこの書類を解読してスタートさせるのか……遠い話だ。

「コトン……」実行計画の難解さに弱気になっているサブロウであったが、書類の束を動かしたとき、テーブルの端に置いてあった携帯を床に落としてしまった。

「おっと、壊れないでくれよ……」携帯を拾い上げて、サブロウは目が血走った。

「先生からのメール！……」思い出した。人質を助け出した日、香港の空港に届いた先生からのメールには確か数字の羅列があった――まさかあれが……。

残っていてくれ……サブロウは大急ぎでメールの履歴を追った。

「あった……」サブロウは思わず声をあげた。

「数字は11111、これが日付と考えると十一月十一日。先生は最後の力を振り絞って十一月十一日が実行日と知らせたのではないか。暗唱番号は何のためのものか見当がつかないが、あのタイミングで、なんらかのメッセージを伝えると考えると、実行日知らせる事以外は考えにくい」

大きな手掛かりだ。喜んだサブロウであったが、――日付が送られてきたということは計画はもう実行されていると考えるべきだ。――だが、一体だれが動いているんだ。――このことを知っている者は他にいるはずがない。――これは自分に実行してほしいという依頼なのか？

サブロウは頭が混乱した。

次を読んでみよう。まずは最後まで読んでみるのだ。次は(人的被害の防止)となっている。文字通り、決して人的被害は出してはならない。……しかし、そんなことが可能だろうか？ タワーとその周辺には常時人がいる、というより人の集まる人気の場所であるのだから……

五、人的被害の防止――

『人的被害を皆無にするため、R3によるSKSを確実に言い、R4を待つ。』

私は、R3によるEAの結果を確認して、R1およびR2にMD指令を出す。塔の倒壊にLBが耐えるか検証はできていないが、実行するのみである『

これはどうやら先生が自らタワーにいる前提で書かれているようだ。えっ、すると先生はタワーとともに倒れるつもりだったということか……先生亡き今……自分が代わって……自分が……

急に全身の力が抜けてきた。椅子に深々とすわり、窓から空を見た。曇った空は暗くなりはじめたところだ。

「カアー、カアー、カアー……」カラスが見えた。

カラスは頬をふくらまし、くちばしを大きく開けて、空に向かって呪いのメッセージを発している……クソッ、オレに死ねと言っている……

サブロウは、疲れがどっと出てきた……いつの間にか意識が薄くなり、眠くなってきた。「すみません、お疲れ様です……」山崎の声にハッと目が覚めた。

「まだここにいらっしやいますか？ 私、定時で帰りますので、消灯と戸締りをお願いしていいですか？」

「あっ、ああ……まだずっといます」

「消灯は出口の脇のスイッチを全部オフにしてください。ドアのロックは、そのまま出れば自動ロックになります。田中さんはカードをお持ちですから大丈夫ですよ、よろしくお願いします。じゃあこれで失礼します」

「お疲れ様です」サブロウは山崎さんを見送った。すでに皆帰って、山崎さんが最後だったようだ。

(不良個所の確認と広報) 目を覚ましたサブロウは最後の書類に目をやった。

『本計画は重大事故による人的被害を防止するため、事故に及ぶ前にその危険性を示すための行動であるから、実行後露見した問題個所を明らかにする必要がある。指摘すべき個所は図2-A、2-Bに示す。それらを確認後速やかに広報することを望む』

福田さんに事後の検証を依頼する内容だ……先生は命がけでタワーを倒壊させ、福田さんはタワーが危険であった事を立証する。そういう事だったのか。

読み終わってサブロウは深いため息をついた。……ハードルが高すぎるよ。オレみたいな表面的な知識と違って、全てがガチに本物だもんな、アレを倒す……ここまで事情を知ったオレでも、あの頑丈そうなタワーを思い浮かべると……やっぱり絶対倒れないって思えちゃう。現に風速三十九メートルでも、全く揺れなかったのは事実だし。「原爆が落ちても倒れません」って説得力あるよな。

体力と精神力が尽きてきたサブロウの心は折れかけている。……眠い……ソファの上でサブロウは深い眠りについた。

「カアー、カアー、カアー……」

カラスの鳴き声にサブロウは目を覚ました。……「カラスの目覚ましか……もう九時だ」天気は快晴だった。すごい空腹に気付いたサブロウはコンビニまで出て弁当を買い込んだ。「うまいっ」、弁当を平らげたサブロウは思わず声をあげ、ボトルのお茶を一気に飲み干した。

「睡眠って重要だな……」あれほど落ち込んでいたサブロウは生気が戻って、モチベーションも明らかに高い。急いで工場に戻って書類を一から見直しはじめた。

全体をざっと見直して、分かる所と分からない所を分けて、まず分かる所を繋いでみようと思いついた。

その結果として、サブロウはこの計画のプロット（行程表）を作ってみた。

実行日は十一月十一日、MD（意味不明）によって脚部を破壊する。そのための器具は当日まで隠しておく。実行前にRD4X（意味不明）をRD4にしておかなければならない。RB（意味不明）の配置は、R1とR2（意味不明）が下、R3とR4（意味不明）が上。R3はSKS（意味不明）をした後、EA（意味不明）を出し、R4はSKSの後LB（意味不明）を最上階に搬送する。MDの器具は消火器に似ていて、事前にCC（意味不明）に運んでおく。

……この中で分かることは、MDが消火器に似ているという事。それを事前にCCに運んでおくという事。その日は十一月十一日以前でなければならぬという事。

RBとはR1からR4のことを指しているという事。

突破口は十一月十一日とCCだな。CCは場所に違いないから、十一月十一日に何かが起きる場所を探せばいいんだ。

サブロウは部屋にあったパソコンで（CC）を検索してみた。……ダメだ電子メールのCC（カーボンコピー）の説明とゴルフの（カントリークラブ）ばかり出てくる。仕方がない、十一月十一日はどうだろう？ 「うわっ、十一月十一日はいろいろな記念日が全国で三十一件もある」これでは絞り込めない。サブロウは途方に暮れた。……しかし、なんととしても突破口が欲しい……何かで絞り込むことが……そうか、単純なことだ、ひらめいた。CCに保管しておいて、当日タワーに運び込む訳だから、その場所は遠いはずがない。きつと場所は横浜近郊だ。

さっそく、（横浜 CC）で検索をかけた。……ダメか、横浜カントリークラブが出てしまった。しかしサブロウは諦めず、検索の低位を探した。すると英文で（Yokohama Convention Center）の十一月十一日、後期産業機械見本市がヒットしていた。——これだ！コンベンションセンターはタワーのすぐ近くじゃないか！ サブロウは、なんとなく流れが見えてきた。

あらためて見直してみると、数ある略語は、実はごく簡単な意味なのではないかと思えてきた。——先生はこの計画書をわざわざ暗号で書く必要はない。単に福田さんのやり取りで使っている、いつもの略語を使っているに過ぎないのではないか。——そう気づいて略語を見ると、RBはロボットの略、R1から4は単にロボットの連続番号じゃないか！ 残るはMD、RD4、RD4X、SKS、EA、LBなのだが、……これはちよっとわからない、どう推理したらいいだろう。

サブロウは、いままでに何冊か有名な推理小説を読んだことがあるが、推理小説はきらいだ。小説の序盤は面白そうなのだが、だんだんと深くなってくると面白さは消え、決まって複雑な事態の絡み合いになる。サブロウはいつもそのあたりでめげるのだ。なにしろ、いままでトリックが解けたことがない。結局面倒になって、途中を飛ばして結末を読んてしまうのだ。——こんな難しい本を好んで読む人の気が知れない。それで推理小説は買わないことにしたのだ。

しかし、いまサブロウは結末のない推理小説を読んでいるようなものだ。

じっと文字を見つめていたサブロウはRD4とRD4Xの違いは何かと考えた。Xという文字のあるなしの違いについて何か説明を受けた記憶がある。それもごく最近だ。その時は自分に関係ない——特に重要ではないな、という認識だった。先生の説明文では、R

D4Xを進めてRD4にすると書いてある。RD4Xが進化したものがRD4という訳か。これは、……そっだ思い出した、これはロボットのプログラムじゃないか。RD4Xが実験段階。完成したプログラムはXを消してRD4。つまり本番にはRD4の組み込まれたロボットが使われることになる。それについては月曜日に山崎さんに聞けば、はっきりするはずだ……残りの略語の中で、他に推理できるものはないか？ サブロウはさらに頭をひねった。

MDは脚を壊すための何かであることは明らかだ。ロボットがMDを使って脚を破壊するわけだが、持ち運べるもので破壊に使えるものとは？ そして略語がMD？ 例によってネットでMDを検索してみた。検索の最上位に(ミニディスク)が検索された。……ディスク……ミニディスクとは記録メディアのことであったが、板状の丸いもののイメージが浮かぶ。電動丸ノコ……ノコギリで切る……いや、直径二メートル以上の鉄の塊を切れるノコギリなんてあるはずがない。仮に巨大なノコギリがあったとして、ロボットが運べる限界は百キロぐらいと聞いている。……この線は消えたな。

次にサブロウは工事現場を想定してみた。……コンクリートを壊すなら、エアの(はつり工具)が一般的だが、鉄を割るといふのは考えにくい。それに空気を圧縮するコンプレッサーが必要だ。コンプレッサーの大きさは軽自動車ぐらい。それを外に置いて、太いホースを延々と延ばさなければならぬ。……これも現実的じゃない。それに略語MDにも該当しない。

M、Mで始まる単語……サブロウは知っている英単語を総当たりで並べてみた。Machine(マシン)、Magnet(マグネット)、マ・ミ・ム・メ・と進んだところで、M……(メルトダウン)が思い浮かんだ。しかし「メルトダウン」じゃ原発の炉心溶解だもんな、キャッチフレーズが『原爆が落ちても倒れません』だからな、現実的じゃない。サブロウはMDの解析を諦めて、次の疑問SKSとEAに移った。

SKSとEAはつながっている事が読み取れる。『SKSをした後、EAを出し』との記述がそれだ。SKSとは何らかの行為の事で、その後EAを出すとは？ サブロウはもう一度(実行方法考案)に戻って読み直した。

……そうか、MDを実行するには、その前にSKSとEAが実行されていなければならないんだ。ということは、破壊の前におこななければならない事、……普通に考えればそれは「警告」以外に考えられない。タワーが倒れるのだから、タワーにいる人を避難させるのが当然だ。その流れで行くと、SKSは避難に導く何らかの行為である、と考えられないか？ サブロウは、がぜん色めき立った。

EAはあっさりと分かった。(Evacuation Advisory)(避難勧告)で間違いないだろう。

SKSとはタワーの倒壊前に、全員が確実に避難する気になる行為ということだ。揺れも振動もなく、全員が恐怖を感じる行為……何だろう？ 全員が恐怖を感じる……そっだ、火事？ ——火事に気付けば皆一斉にタワーから逃げ出すに違いない。……しかし火事は危険すぎる……うん、火事と思わせればいいんだ。それなら煙幕を出せばいい。サブロウはネット辞書で(煙幕)を検索した。(Smoke Screen) たしかにS・K・Sであらう。

これでまた一歩進んだ。サブロウはLBも分かりそうな気がしてきた。LBはR4によって最上階に搬送されることになっている……鍵はLBを使うタイミングだ。LBを使うのはSKSが終わってからということだから、そのころはR1とR2がタワーの脚を破壊

している最中ではないか？ 人は避難して、もうすぐタワーが倒れるとすると、何のためにLBを運び込むのだろう？ サブロウは計画の流れを頭の中でシミュレーションした。『十一月十一日、コンベンションセンターに待機したロボットがRD4のプログラムに従って、R1とR2はそれぞれMDを持って脚の破壊に向かう。R3が煙幕を発した後、避難勧告を出す。R4はその後にLBを最上階に運び込む』分かったことを繋ぐと、こうなる。

ここでサブロウは重要なことに気付いた。——先生の役割は何だろう。ロボットの監視か？ それも、もちろんだが、一番重要な事は人の避難の確認。——そうだ、そのために先生は最後までタワーにとどまるのだ。そしてR4がLBを持って行くという事は、最終的な先生の避難！ それにちがいない。——サブロウにイメージが浮かんだ。LBは(Life Boat)救命ボートだ。タワーが倒れれば上部は海に落ちる。五、人的被害の防止の章の最後にLBが塔の倒壊に耐えるかどうか分からない、と書いてあった。命がけではあるが、救命の可能性も捨てていない……さすがは先生だ。サブロウは拳を握り締めた。

先生の計画の概要が分かってきた。サブロウはソファにのけぞって座り、天井を仰いだ。「フーツ」サブロウは大きいため息をついた。そのとき、

「カサツ」右の方で小さな音がした。

木の椅子の背もたれの外側に黒いものがある。「ゴキブリか……もう十月だから動きが悪いな。オレはゴキブリもきらいなんだよ……」

サブロウは体をちよっとひねってその椅子の前足を持ち上げた。椅子は後ろにゆっくりと倒れた。

「パタツ」という音に「クシャツ」という音が混じった。

「ゴキブリはつぶれて身が飛び出していた。」

……しばらくして、サブロウに戦慄が走った。「オレ……こうなるんだ」

だれかが丈夫そうだが倒れやすい椅子を作って、オレは「倒れやすいから危険だよ」って最上部にいて、警告していたんだが、椅子は結局倒れて、オレは「ペチャンコ」

そういうことだな。……

サブロウはさっきまでのモチベーションは吹っ飛んで、自分が死に向かっている実感に、おびえはじめた。

「おいおい」オレっていま自分が死ぬシミュレーションをしたよな。この計画を実行すると、よほど運が良くなきやオレは死ぬぞ。……他人のため？ なんだだよ？ オレが死ななきやならない理由ってないじゃん。……たまたまこの事件を知ってしまった、……オレ、知ってるだけでいいはずだったじゃない。……結構危険な人質救出もやって、その上、いま死ぬ準備をしている。そんなバカな事って……ないよな！

ここまでで引こう……オレは充分やった。感謝はされなくてもいいや。もともと感謝されるなんて思ってもいない。純粋な善意だった。やれるのはここまです。

サブロウはそそくさと書類を整理した。もう何も考えない、その言葉を帰りの車の中でサブロウは何度も繰り返し返した。

日曜日だ、十時に目が覚めた。

「サブロウ……」陽子がやってきた。

「おはよう！」あいかわらず元気がいい。

「あのさ、……あんたこのごろおかしいの自分で分かってる？」

あいかわらずダイレクトな言い方だ。

「おうっ、もう片がついた、来週から正常にもどりまーす」

サブロウは努めて陽気に答えた。

「うん、こないだよりはマシだけどさ、教えてよ、何があったのさ？」

陽子は追及を緩めない。

「あのさ、あんたはどうでもいいとしても、お母さんが心配してるの、分かってる？」

「会社はずっと休んでるし、どこに行くかも言わないし、帰ってこないし、お母さんが心配で倒れたらどうするのよ！」

「会社は溜まった有休をまとめて取ってるの、取れ取れって言うんだから問題ないの！」
「中国に行ってるからおかしくなったわね、山神先生たちが亡くなったのもただの事故じゃないと私は思ってる」

陽子が核心をグイグイ突いてくる。

「ああ、オレ先生に頼まれたことが結構あってさ、このところそれをきちんと片付けている訳さ、先生と福田さんが突然いなくなったから工場もバタバタしているのよ」

「事故の原因は？　なんか情報あるでしょ……」

「原因は、相手がいないから分からないよね、工場の話ではあの日、先生と福田さんがロボットの確認に来たと saying した。その帰りの事故だけだ」

陽子は話題を変えた。

「あんたがいない間、ハリーが来たんだよ。サブロウいないかって、私も久しぶりだったんで話しようと思ったんだけど、急ぐからってすぐ帰っちゃった」

「ハリーの状態、知ってるよね？」

サブロウはグッと気持ちが悪くなった。ここ数日ハリーのことは考えないようにしていた。それが陽子の言葉で一気に現実に戻ったのだ。

「いまでもなってる……」

状況が好転するはずがないのは充分わかっている。聞くのは怖い、しかしハリーと会った陽子の感触も聞いてみたい。

「マスコミ報道は最悪だわ、ハリーの件でわかったけど、マスコミって悪く言うほど視聴率が上がるんだね。ハリーはいま格好のネタ。もう、あることないこと言いたい放題。私、ハリーがかわいそうですぐテレビ切っちゃう」

「ハリーが来た時、話は聞けなかったけど、あれ相当精神的に来てるよ。ヒゲも伸びてたし、あんなハリーって見たことないよ」

やはりそうか。タワーを倒壊させることは諦めた。だがこの事件に巻き込んでしまったハリーだけは救わなければならない。——オレの責任だ。

サブロウは考えた。この騒動はハリーがカジノタワーの件をブログにアップしたのが原因だ。そしてハリーが情報の出元、オレの名を完全に伏せていることがマスコミのヒートアップに繋がってしまった。最も確実にこの騒動を鎮めるには……単純だ。オレが名乗り出ればいいんだ。サブロウは決心した。

「ヨロコありがとう、状況分かったよ。オレいそいで処理しなきゃいけないことがあって

さ、きようはここまで」

サブロウは急に話を打ち切ろうとした。しかし陽子はネバる。

「ちょっと、まだ聞きたいことがあるわ、……待ってよ」

サブロウは陽子の声を無視して部屋に入ってしまった。

ああ、ヨーコ、ゴメン。オレのこと心配してくれてるの分かってる。でも本当の事は言えないんだ。言うとおまえがハリーみたいになっちゃうからな。

サブロウは主要なテレビ局に今回の経緯を書いた手紙を出すことに決めた。

『拝啓

東洋テレビ（早朝ワイド）番組担当者殿

田中三郎と申します。

たいへんお忙しいところ申し訳ございません。

本日手紙を差し上げたのは、早朝ワイドで取り上げられました、（カジノタワー倒壊）というコーナーでのブログの記述について取材を受けておりますハリー勉氏に状況を提供しましたのは私であるということをお伝えしたからです。ハリー氏は私の名を伏せていたことから追及を受けるに至りました。ハリー氏は古くからの友人です。彼は私の見解をそのまま伝えただけであります。したがって彼は、貴番組で指摘されるような不誠実な人物ではありません。この問題はすべてこの私に帰する事を明確にしたいと存じます。以後、ハリー氏に対する取材を控えていただくよう、お願い申し上げます。

敬具

田中 三郎

』

同じ内容の手紙を、他のテレビ局、この問題を取り上げた週刊誌にも同時に郵送した。これでハリーへの追及はかなり収まるだろう、しかしその分は自分のところに来る。覚悟しておかないと……サブロウは重い気持ち半分くらいになって、ようやく笑顔が戻ってきた。……ヨーコにも言うておかないと……サブロウはヨーコを呼び出した。

「ヨーコ、一応見てよ。この手紙、全部のテレビ局に出した。ハリーの追及をやめてくれ
っつ」

陽子は手紙を一読して言った。「これじゃ解決しない。もしかすると、もっと悪くなる」
「えっ、ハリーへの情報提供者が不明だから追及されているんじゃない。だから、オレが名乗り出れば収まる。そうじゃないか？」

「最初は確かにそうだった。でも、もうそのレベルじゃないよ！」

「私、言ったでしょう。マスコミって悪いヤツが欲しいのよ」

「悪いヤツって？」

「ハリーは口数が少なくて性格がカラッとしてるでしょ、だから清廉なイメージで人気があるの。ところがマスコミは、それは表の顔で（実は〇〇）っていう話が欲しいの……（あのハリーが……）って書けば週刊誌は売れるのよ！」

「こうなると、全く作り話でもそれで売っちゃう。回りがみんなそうだから名誉棄損もなにも成立しない。書いたもの勝ち」

「ハリーはいま、完全に悪者になってるわ」

もっと悪くなる……サブロウは愕然とした。

「サブロウ、私が聞きたかった事ね、この手紙ではっきり分かったけど、山神先生の資料を出したのね。ということは山神先生がタワーは危険だと言ってるわけ？ だったら先生

はなぜその事実を公表しなかったのかしら？ そつすればこんなことにならなかったじゃない」

陽子は鋭い、また核心を突かれた。しかし本当の事を言うことはできない。サブロウは取り繕った。

「先生の業務取引上の秘密事項だから、本当は出せないものなんだ。オレはそれを知って、先生が亡くなった後それを引っ張り出した」

「それじゃあ、あなたは先生の許可なく情報を出しちゃったってこと？」

「……そうなるね」

「確かに危険を知らせるって意味ならアリか……」

「でも追加の資料を出したとしても相当に専門的でしょ、あなたが説明できるわけがない。先生が自ら説明する以外に方法はないのよ」

「だとすると、あの資料、マスコミが言うように、(ウラ付けのないでっち上げ)になっちゃう……あなたは(悪いヤツ、ナンバー2)になるだけ」

陽子の危惧は当たった。手紙の着いた翌日、サブロウの自宅に記者が殺到した。だが、サブロウの顔写真を撮るだけで、事実関係の質問がほとんどない。

翌朝のワイドショーで(カジノタワー倒壊騒動続編)が出た。

『例のカジノタワー倒壊騒動で資料提供者が出ました。』

田中三郎という人物です。ここに局宛の手紙があります。えーと映してください。

これを書いた本人にインタビューしてきました。どうぞ』

録画に代わった。サブロウの自宅前だ。

「すみません、東洋テレビです。今日、局にあなたの手紙が届きまして、えーと田中さんご本人で宜しいですか？」

「そうですか」

「手紙によるとあなたがハリーさんへの情報提供者ということですが、あなたが資料を作った。そうですか？ 『いや、自分じゃないです』』

「そつすると資料の基はどこになりますか？ かなり専門的な内容がほとんどなんですが、ちなみに私は全然分かりませんでした、あなたは分かるんですか？」

「いや、概要を説明するぐらいなら……」

それじゃあなたの存在する意味がないでしょう。あの資料の信ぴょう性があるかどうか重要なんで。だれが書いたかを教えてもらえませんか」

ここで録画は切れた。

『はいっ、録画はここまでです。途中なんですけど録画でわかるように、田中さんという方は資料を書いた人ではないようです。そうすると彼が名乗り出た理由が不可思議です。なんのために突然出てきたか？』

コメンテーターが一斉に声をあげた。

『意味のない人が突然出てきて、これって何か事態打開の工作みたいに感じますね』

『資料の本当の製作者が出てこないことというのは、でっち上げの線が濃くなるだけですね』

前にも増してハリーへの追及が強くなった。皆、口汚くののしるだけだった。

このワイドショーを見てサブロウはひどく落ち込んだ。もう食事が喉を通らない。

陽子はサブロウのあまりの落ち込み様に違和感を感じた。だいぶ分かってきたが、サブロウは何かまだ陽子が聞いていない重要なこと隠してる……ダイレクトに聞いても絶対に言わないだろう。陽子は分かっていた。サブロウは根がまじめだから隠すのはへただ。そのうちポロツと漏らすに違いない……サブロウが反発しない程度に突っ込む……それで行ってみよう。

「サブロウ、聞きたい。タワーが危険って、先生の設計ミスがあったわけ？」
またズバリの指摘だ。

「ヨーコ、鋭いな、負けたよ。本当の事を言うよ。あれって基本設計は先生が全部やったんだ。基本設計まで進んだところで先方が気に食わないって途中で打ち切ったんだ。もちろん一応の金はもらってるから、トラブルっていうことで先生も納得して引いたんだよ。ところが出来上がって見たらほとんど先生の設計通り。要するに大事なとこだけやらしといて安く上げようっていう汚い手だよ。全部そのままだったら問題なかったんだけど、何を思ったか脚の部分だけあんな風に変えちゃった。

先生が驚いて構造の再計算をしたところ、返って強度は低下することが分かった。ヨーコが感じた、(バランスが悪い)って印象の通り。それと根本の太い部分、あれに欠陥があることを先生は見抜いた。それであのタワーは危険だって言いだしただけというのが本当のこと。

「わかった。もう一つ聞くよ。あなたが手紙を出して逆に状況は悪くなっちゃったけど、そもそも何でハリーに話したの、何で最初から自分でやらなかったの？」

「うーん、そこなただけど完全にオレのミス、オレが騒いでもだれも本気にしないから、ハリーの知名度に頼ろうと思ったんだ。結局完全に裏目に出ちゃった」

「三つ目が一番大事なこと。本当のところタワーはどのくらい危険なの？」

サブロウは「ビクッ」ときた。ここで本当の事を言ってしまうと陽子が動き出してしま

う。
「危険になる可能性が高いから、警告して、補強とか対策が要るっていうこと」
サブロウが甘い答えを返した。

「フーン、それなら当面大丈夫ってこと……おかしいわ、その程度の危険性だったらこんな大事になるかしら？ もしかして先生が仕事で騙された腹いせってこと？」

陽子はちよっと鎌をかけた。

「先生はそんな安っぽい人間じゃない！ 証拠があるから言ってるんだ」

サブロウが少し興奮気味に叫んだ。

「証拠って何？ 私、初めて聞いた」

陽子の誘導にサブロウがつい、乗ってしまった。

「それは、……」サブロウは口ごもった。

「まあいいわ、実は相当危険ってことみたいね」

「それでね、あなたが中国に行ってから全てがおかしいの。なにかあったのね」

「そうそう、先生の葬儀の時、若い娘さんが二人、あなたに寄ってきて涙流しながらお礼を言ってたじゃない。あの人たち何なの。葬儀だから泣いていても不思議じゃないけど親密すぎるわね」

よく見てたな。サブロウは焦った。

「先生の孫と福田さんの娘さんだ。向こうですと案内してやったから……」

「あら、中国の機械メーカーの視察って聞いてたわ、娘さん二人ともずっと一緒に機械を視察したわけ？」

サブロウは言い訳に困った。

「だからさ、工場の視察は三時ごろには終わっちゃう。そのあと……そのあと、向こうのメーカーの人の案内でいろいろ回ったりしたから……」

「それって向こうの人にお世話になったってことじゃないの？ 『案内してやった』じゃなくて」

「まあ、二人一緒にだからあんたの彼女じゃないわね、——残念ながら」

「悪いけどもうひとつ聞かせて」

「いいよなんでも……」

聞かれたくないことが次々ひっぱり出された。しかし話してしまった分だけサブロウの気持ちは軽くなった。

「先生の事故だけど、本当に情報は何も無いの？」

「あなたが帰ってくる日の事故よ。タワーの危険性を指摘した先生が亡くなったことで、この件は表に出なくなるわね。いろいろ分かった今だから、はっきり言っちゃうけど、これって口封じだよ、口封じの暗殺。……そのあとあなたが必死になって引き継いでいる……ということは、あなた、先生にこの件を依頼されたんじゃないの？」

「依頼されたわけじゃないけど、先生の意思を継いだのは確か。……暗殺か？ と言われると、証拠がないから警察の捜査次第になるけど、その可能性もある。……」

陽子に論理立てて追及されると、サブロウは頷くしかなくなった。

「ねえ、知り合いが真つ当なことをしようとして、殺されたのよ。……いい、……人が二人死んで、あなた、そこまで事情を知ってて警察に通報するとか、なぜ普通の対応をしないのよ？ ハリーを巻き込んでおいて、私には隠そうとしているのはなぜ……？」

サブロウは黙り込んだ——これ以上何も言わないほうがいい。

返事が返ってこない。またサブロウがおかしい。陽子は、事の深刻さがケタ違いではないかと思いはじめた。

「いいわ、こうなったら放っておけない。私なりに調べるから」

陽子はサブロウの部屋を出た。

翌日の昼のワイドショーにカジノタワーの支配人、白さんが出ていた。ハリーへのバッシングの先鋒だ。司会者が白さんへの挨拶を済ませた。

『きょうはいわゆるカジノタワーの総支配人である、白さんに来ていただきました。白さん、お忙しいところ申し訳ございません。このところタワーに対する噂といいますが、白さんから見ると(営業妨害)となるんでしょうね。それで白さんが、大変お怒りになられているという話題に入りたいと思います。』

白さんが待ちきれず話し始めた。

『みなさんね、言っていることと悪いことがあります。いいですか、「あなたの家倒れそれで危ない」って急に言われたらどうですか？ 気分悪いでしょう。私のタワー、気分悪いだけじゃなくて、「えっ、危ない？ タワーに行くのやめよう」そうなりますよ。事実、お客さん相当減ってる。だから明確に営業妨害ね。もしそんなこと言うんだったら証

抛を出しなさい。なにか言うならそれからでしょう。……私の言うこと間違ってますか？
言った人はみんな知ってるハリリー勉ですよ。だからみんな信じちゃうでしょ。この人、
何したいんですかね？ 私、考えました。私が中国人だからでしょう。中国人が仕事うま
くゆくと悔しいのかね。ハリリーさんって人間小さいね。みなさんそう思いませんか？』

『白さん、訴訟も考えておられると聞きましたけど』
『当然ですよ。もう弁護士に頼んであります。ハリリーさん逃げてみたいだけどダメね』
『損害賠償は当然ね。でもそれだけじゃ済まないね。ハリリーさんここにきて謝罪してほし
い』

白さんが顔を真っ赤にして吠えている。ワイドショーはすでにコンサートの準備をして
いるハリリーを探し出していた。

『はいっ、私たちハリリーさんを見つけました。彼はいま福岡です。福岡に変わります。福
岡つながってますか？』

「はいっ福岡です。いまハリリーさんは会場に向かっているところです」
ハリリーが車から降りてきた。ワイドショーのスタッフに他社も加わってハリリーを取り囲
んだ。

「なんだよ！」

ハリリーは大声をあげると、その輪を潜り抜け、走り出した。スタッフも追う。

会場の入り口にさしかかった時、陰から突然カメラが出てきた。ハリリーを待ち伏せして
いたのだ。ハリリーは止まり切れずカメラに激突した。

「いてえっ、このやろう」

ハリリーは思わずカメラマンを殴り倒してしまった。「グシャッ」鈍い音を立ててカメラ
が落ち、カメラマンもその場に転倒した。

カメラマンはすぐ立ち上がったが、ひたいからかなりの出血がある。

『ワアッ』

ワイドショーは騒然となった。

『これはいけませんね、ハリリーがカメラマンを殴りました。出血しています。大丈夫でしょ
うか、福岡、福岡……だれか出ませんか？』

『これは明確に暴力事件です、ハリリーがカメラマンに暴力を振るいました』
事件の一部始終を他のカメラが捕えていた。

『福岡、福岡……だれかハリリーに聞いてください。いまの暴力について』

追いついたスタッフがハリリーを取り囲んだ。

「ハア、ハア、……ハリリー、いま、カメラマンを殴りましたね」

「あいつがカメラを急に出すからぶつかったんじゃないか、オレだって頭から血がでてる
よ、ホラッ」

ハリリーが髪の毛をずらすと頭に血がにじんでいた。

「それでも殴るのは暴力でしょう。最初のはアクシデントですよ」

「わざとカメラを出したのはアクシデントって言わねえんだよ」

「カメラで殴られたから殴り返しただけよ」

「これは暴力です、警察を呼びます！」と、スタッフが叫んだ。

「上等だ！」

ハリーがスタッフを押し倒して乱闘となった。

カメラはしばらく乱闘を映していたが、なにか指示があったのか、乱闘を映さなくなった。スタジオでは中継が打ち切られ、司会者がコメンテーターとの討論に戻った。

『たいへんなことになりましたね。警察を呼んだみたいですけど』

白さんが薄笑いを浮かべながら切り出した。

『みなさん、見てたからわかるでしょ、ハリーってこういう人ね。スグ切れる、暴れる。常識なんてない人』

他のコメンテーターもハリーの批判に終始した。

『これは刑事事件になりますね。中継で映った通りですよ。確かに殴ってる』

『最初がアクシデントだとしても乱闘はダメです』

『ハリーがあんなに暴力的な人だなんて、私ショック』

『すみません、放送の予定が狂ってしまいました、ハイッ、天気予報に移ります』
ワイドショーは終了した。

放送を見ていた陽子は、すぐ家を飛び出し、隣のサブロウの家に向かった。

「サブロウ！ 見てた？……」

玄関から大声で叫んだが返事がない。「入るよ！」陽子は玄関に入り、サブロウの部屋の前立った。

「いるんでしょ、テレビ見た？」

「見た、ああ、……ハリーが、ああ、……」三郎は泣いている。

「ヨーコ、悪いけど一人にしてくれ……」サブロウがやっと言葉を返した。

さすがにこれ以上は、かわいそうで聞けない。陽子は自宅に戻った。

翌日もサブロウは家にこもっていたが、陽子が気づかないうちに出かけたようだ。車がない。

昼過ぎになった。陽子が片付け事していると、若い女性が二人、こちらに寄ってきた。

「すみません、お隣は田中さんのお宅でしょうか？」

「ええ、そうですよ」

「よかった、住所は合っていると思ったんですが表札が見つからなくて、あの、今日、田中さんって御在宅でしょうか？」

「ああ、朝はいたみたいなんですが、出かけてますね。車がないんで」

「そうですか……」

この二人？ ……陽子は思い出した。

「あの、もしかして山神先生のご葬儀でお会いしてませんか？」

「サブロウ、いや、田中さんと長くお話してたでしょう。私そばにいましたので覚えてます」

「そうだったんですか。私たち葬儀の後、正式にお礼に行こうと話し合っていたんですが、なかなか行けなくて。そしたら、田中さんがワイドショーに出てるのを見たんです。それで、すぐに行こうと決めたんです。あの、田中さんはいつごろ帰られますか？」

「申し訳ないけどちょっと分かりません。なにも聞いてないので」

「あの、すみません、聞いていいでしょうか？（正式なお礼）って何ですか？」

「ああ、ご存じないと思いますが、私たち中国で誘拐されていたのを田中さんに助けてい

ただいたんです」

「誘拐？」

「そうですね、最初叔父の取引先の紹介で、ホームステイしながら観光をするという話で中国に二人で行ったんです。最初は普通だったんですが、急に場所を変えられて、そのあとは監視付き、……軟禁っていうんですか、携帯を取り上げられて、自由に外出できなくなりました。叔父へのメールは出せるんですが、文章は全部指示された通りに書かされました。……なにがなんだか分からなくて、ずっと不安だったのですが。指示があつて、写真を撮る目的でいつもの公園にいったら、田中さんがいて、助けてくれたんです。それでやっと日本に帰ったら叔父と福田さんが事故で亡くなって……」

女性の話ながら涙ぐんだ。

「そうだったんですか、大変なことだったんですね……」

陽子はサブロウが中国に行つてからおかしくなったと認識していたが、そんなことがあつたとは。……もう少し聞きたい。陽子はさらに質問した。

「救出されたあとで、なぜ誘拐されたか田中さんに聞きましたか？」

「はい、叔父がカジノタワーの危険性を公表するのを止めるために、人質として私たちを誘拐したと聞きました」

それだ！ 陽子は一番のナゾ、「なぜ先生が、自ら危険性を公表しないのか」それが解けた。同時に先生たちの事故が暗殺であることが証明された。陽子の正義感に火がついた。サブロウ、どうして私に言ってくれなかったの？ ——それだけが疑問として残る。

「あの、田中さんが今日は戻られないようでしたら出直して来たいと思いますが、いつでしたらいらっしゃるか分かりますか？ 今日来るのも何度か電話したけど出られなかったので直接来ちゃったんです」

「そうですね、じゃあ私が聞いておきますから、連絡先を教えてください」

陽子は電話番号のやりとりをして二人と別れた。

夜になった。気が付くとサブロウの車がある。誘拐の事、サブロウに聞きたいけど、もう少し落ち着いてからだな……陽子は声をかけなかった。

夜のニュースでは、さっそくハリリーの暴力事件が取り上げられていた。

『本日、歌手でタレントのハリリー勉さんが、暴力騒動を起こし、その実況がテレビで放映されました。福岡県警は任意でハリリーさんから事情を聞いている模様です』

ニュース枠では短い報道だったが、やはり刑事事件化されそうな雰囲気になってきた。陽子はますますサブロウが心配だ、あれ以来ひとことも話をしていない。

ナイトニュースの時間だ。この番組はその日の注目ニュースにスポットをあてて特集をする人気番組だ。今日の特集はズバリ、ハリリーの話だった。

『今日のゲストは通称カジノタワーの総支配人の白さんです。どうもお忙しいところありますがとうございます』

『いえ、どういたしまして』

『今日のお昼でしたが、白さんのカジノタワーに注文をつけたというか、白さんからしたら「いいがかり」をつけられた相手のハリリーさんが暴力事件を起こしまして、いや、まだ正式に事件にはなっていないようですが、白さん、どう見られます？』

『私ね、普段は個人を責めたりすることはないんですが、今度のことだけは許せません。』

昼時の番組で、私は言いたいことがあるなら、正々堂々と番組に出てきて話しましょうと言ってるんです。なにか言いたいなら、ちゃんと証拠をもって、そこで示してくださいよと。それができないということは、全部がウソ、なにか悪い目的でそうしてるとしか思えないでしょ。どうですか？」

『それは正論だと思います。やはり正々堂々と論議するのが筋だと私も思います』

『それで白さん、私たちもハリリーさんを呼んで、論議しようと思ってるんですけど返事をもらえないんですよ』

『そうでしょう、そんな勇氣はないし、今日の中継では映っちゃいましたが、見えないところでは、ああいつぶうに人を脅したりしているんでしょう。今日それが証明されちゃいましたね。臆病者のすることですよ』

『今日は白さんだけの出席で、欠席裁判みたいなことはしたくないんですが、なにぶんハリリーさんが出席されないのでそうなってしまいました。引き続きハリリーさんには出席いただけるように声をかけますので、成り行きを見守りください』

『番組ではいろいろ方の意見をお聞きしました。今日までのハリリーさんの言動についてどう思いますか』

画面は一般の人の反応に変わった

『最初はハリリーのいう事を信用してたよ、「えっ、タワーが危ない」って、でも全然出まかせじゃないですか』

『タワーの人が言ってたように、証拠を出さなきゃ』

『ハリリーがあんなに暴力的だなんて思ってもみなかった、私、もうハリリーのコンサート行きません』

『アーティストなんて言われてるけど、なによ、ただのチンピラじゃん』

しばらく録画が続いたが、みな同じような反応だ。ハリリーを擁護する意見はまったくない。

『どうも世論の大勢は、ハリリーに分が悪いようですね。やっぱり暴力がいきません。なにがまた、新しい展開が出ましたら取り上げたいと思います。……ではきょうはここまでです』

ナイトニュースは完全にハリリーが悪いと断言している。陽子はいたたまれない。ひどい。なんとかしなきゃ……といっても、いっしょに活動できるのはサブロウだけだ。サブロウが氣力を取り戻すまで待つしかない。陽子はもどかしかった。

やっぱり聞いてみよう。陽子は夜遅くなってから、サブロウの家に行き、玄関から声をかけた。「サブロウ、また話があるんだけど、入っていい？」……返事がない。

少し待って、もう一度呼んでみた。「サブロウ、返事してよ……」

「いいよ、入れば……」しかたなく返事がきた。遠慮してる場合じゃない。部屋に入ると、すぐに陽子は今日の訪問者について聞き始めた。

「あなたがいない間に二人の娘さんが来たのよ。あなたに正式にお礼が言いたいって。知ってるわよね、福田さんの娘さんと先生のお孫さん。」

「えっ」

サブロウは驚いたようだ。

「二人はあなたがこの間テレビに出たのを見たらしいの。それですぐにお礼に行こうって決めて、電話したけど出ないから直接来たって言った」

「そうか……それでおまえ、中国の事、聞いたのか？」

「そう、全部聞いた。……先生がなぜ自分で声をあげなかったのか、それで分かったわ。あなたがそんな思い切った行動をしたなんて、思ってもみなかった。……だって失敗したら帰ってこれないか、それどころか命の危険もあったでしょう」

首を少し傾けてサブロウを見上げた陽子は、生まれて初めてサブロウに尊敬の念を持っていた。

「二人が助かったのは良かったよ、全てが信じられないほどうまく行った。オレは成功にウキウキしたさ、だけど日本に帰ったら、すべてがすごい勢いで逆に回りだした。何をやっても悪い方に一直線に行く」

「サブロウ、もうちょっと聞きたい。私は手伝えるよ。タワーの危険って……」

「待てよ！」

サブロウは陽子の言葉をさえぎった。

「これ以上は絶対言わない。これは全部オレの責任だ。おまえは関係ない。手伝う必要もない。悪いけど帰ってくれ」

サブロウに取りつく島がなくなった。陽子は強引に部屋から押し出されてしまった。

陽子を追い出したサブロウは机に突っ伏して目をつむって考えた。——陽子がかかり深く事件のことを知ってしまった。——これ以上知ると絶対に深入りしてくる。それだけはダメだ——絶対に。

自分のすべきことは、まずは巻き込んでしまったハリーを、なんとしても救うことだ。何が出来るのか。しかしサブロウは考えれば考えるほど手立てがないことに絶望した。いまやハリーの事件は、マスコミの最高のネタになってしまっているのだ。ハリーが必死で戦っているのに自分は何もできない。サブロウは悶々とした一夜を過ごした。

結局、ほとんど眠れなかった。ボヤツとしたまま、目を覚まそうとサブロウは缶コーヒーを買いにいった。

家に帰って無意識にテレビをつけた。缶コーヒーの栓を開けたとき、映像が目に入った。出たのは「ハリー自殺未遂か？」の大きな文字だった。「隼……土……」、サブロウは声にならない声をあげた。缶コーヒーは床に落ち、「コクコクコク」と小さな音を立てて流れ、足元に広がった。

テレビの音声は事故の様子を解説している。

『驚きました。ハリーさんが昨晚遅く、福岡の県道で、ガードレールを突き破って、ガケから転落しました。』

『福岡、よろしく願います』

『ハイ、福岡です。今、福岡記念病院の前にはいます。ハリーさんは昨晚救急搬送され、即、入院しました。ケガの状況ですが、事故の割には軽く、意識は正常だとのこと。』

『事故の状況なんですが、分かっている範囲で伝えてください』

『はい、警察の説明ですが、山道でカーブを曲がり切れずというか、曲がらずにガードレールを突き破ったのではないかと聞いています』

『ということは、故意に突っ込んだんでしょうか？』

『そうですね、その可能性が高いようです』

『はい、すみません、こちらに戻します』

画面はスタジオに戻った。

『さて、この事故なんですが、少し前に福岡から詳しい情報が入っています』

『それによりますと、暴行事件の後、ハリーさんは警察で任意の事情聴取を受けまして、終わったら予定の場所に帰ってくるはずだったんですが、そのまま山の方に向かったようなんです。そっちには用事がないはずなんですが、ということですよ』

『それでこの事故となると、……あまり考えたくないんですが……自殺未遂、ということもありえますね』

『そうなんです、状況が状況ですから』

『暴行事件の事情聴取を受けて、発作的に……』

サブロウはテレビを切った。一番危惧していたことが現実になった。「やるしかないな……」サブロウは小さくつぶやいた。

陽子もこの番組を見ていた。「サブロウ！」と陽子は叫んでサブロウの家の玄関に飛んだ。

「サブロウ！」玄関のカギがかかっていた。サブロウの車があるということは、まだ家にいる。

「サブロウ！」大声で叫んで玄関の戸を叩くが、返事はない。

本当に最悪になった。……どうしよう。サブロウが絶対ヤバイ。陽子は焦った。

結局、いくら呼んでもサブロウの返事はなかった。落ち着くまで待つしかない。陽子は不安で胸が張り裂けそうだが、どうにもならない状況だ。

翌朝、陽子は起きるとすぐにサブロウを呼んでみた。しかし依然として返事はない。真夜中に車の音がしたので、ちょっと出かけたようだったが、きつと食べ物を買に出たのだろう。それ以外はずっと家に籠っている。

陽子はサブロウが精神的に追い詰められているのがなにより心配だ——自分の追及が状況を更に悪くしてしまったのでは、と気が気でない。

二日目になった。相変わらず、夜中に食料の買い出しに出る以外、完全に籠ったままだ。

三日目、陽子は意を決した。——夜、サブロウが出るのを待つ。

午前一時、「そろそろだわ」、この時刻にサブロウが出てくるのは分かっている。陽子は自宅の玄関で、まんじりともせずサブロウを待った。

「あっ、出る」隣の玄関からサブロウが出る音が聞こえた。

陽子は玄関から飛び出した。

「あっ、」なんと目の前にサブロウがいた。陽子は勢い余ってサブロウに突き当たってしまった。思ってもいなかったことで、一瞬陽子は動けなかった。

「なにっ?」サブロウは驚いている陽子を抱え込んでしっかりと抱きしめた——すごく強く。

「えっ、サブロウ……」

陽子は戸惑って次の言葉が出ない。

「パンツ」サブロウは陽子を解放すると同時に、陽子のほほを平手打ちした。

「あっ」陽子はバランスを失って後ろに倒れてしまった。

平手打ちのシヨックでふらついて、陽子はすぐには起き上がれない。

サブロウは持っていた封筒を陽子のそばに置いて微笑んだ。

「陽子、いい女だな……」

ひとこと言うとサブロウは陽子に敬礼をしながら車に向かった。もう振り向くことはなかった。車は猛スピードで走り出し、視界から消えた。

しばらくして、ふらつきが収まった陽子は家に戻り、封筒を見つめた。

サブロウがどこに行ったのかは分からない、しかしこの状況で封筒の意味するものは想像がつく。陽子はしばらく封筒が開けなかった。

「ヤダよ、サブロウ、こんなの置いてって……見たくないよ」

陽子はすでに涙があふれている。

涙が止まったころ、ようやく封筒を開いた。文書は一面びっしりと書き込んでいる。陽子は最初のページに目をやった。

『ヨーコ、ゴメン、ひっぱたいで、でもこれって仕返しだぞ、子供のころの。子供のころ、オレ、毎日ヨーコにひっぱたかれて泣いてた。だから一度ひっぱたき返してみたかったんだ。』

ハハッ、今日の事は計画してたんだよ、たぶんその通りになるはずだ。

この手紙をおまえが読むころ、オレはあるところに向かって走ってる。おまえが来ちゃいけないところだ。どこかって？ あとで分かる。

オレ、なんとしてもハリーを救わなきゃいけないんだ。あいつはオレの名前を絶対に言わなかった。こんどの事をオレがハリーに説明して、最初は冗談と思ってたみたいだけど、一生懸命説明したら、分かってくれて、おまえを信用して、自分の責任で協力してやるって言ってくれたんだ。

ハリーはその通りやってくれた。オレはこれでうまく行くと思った。ハリーの知名度はすごいからね。でもだんだん状況が悪くなってきて、ハリーは信義を崩さなかった。

ハリーがここまで追い詰められたのはオレの責任だ。ハリーを巻き込んだのはオレは単純に、自分が名乗り出ればハリーが解放されると思って各局に手紙を出したわけだ。

ヨーコも知ってる通り、逆に火に油になっちゃった。全然甘かったよ。

オレは考えた。どうしたらハリーを救えるか。いくら考えても打つ手がない。オレはバカだからアイデアが出ないんだ。

そうこうしているうちに、ハリーの事故だ。確かにあれは事故じゃない。間違いなく自殺だ。

ハリーはプライドの高い、すばらしい人物だ。オレとは天地の差だ。ハリーが警察の事情聴取を受けたって聞いて、最悪の事態が目に見えた。結局その通りになってしまった。運よく、……運よくじゃなくて、軽いけがで済んだので、それは最悪じゃなかったってだけ。

オレは分かる。ハリーは必ずまた自殺する。彼は自分の美学を大切にしている人間だから。ハリーが死んだら、オレは生きていられない。ヨーコ、分かるよね。

バカなオレだが、必死で考えたら、ついにハリーを救う手立てを考え付いた。オレが極悪人になればいいんだ。ハリーは悪党に騙されて、あんな行動を取ったとすれば世間は納得する。その極悪人が反省して自殺するんだ。そこまでしないとこの状況は崩せない。

そう、オレはそこに向かっているんだ。もう戻れない。繰り返すけどハリーが死んで、オレが生きてるってのは絶対に許せないことなんだ。

それで、それだけが、この事件、悪いのはオレたちじゃない。危険なタワーを立てたやつだ。それを知らせようとした人が次々死んでゆく。そんなことがあっていいのか！ 亡くなった人はみな、文字通り命がけでそれを知らせようとしたんだ。しかし死んだ。おまえがこの手紙を読んでいる今ごろはオレも死んでいるだろう。

オレがこの件を先生から聞かされた時、たまたまおまえは仕事が目いっぱい来れなかったな。先生もこの件は自分たちだけで済ませようとしていたんだ。オレは情報だけを受け取って、もし先生の計画が失敗したら、「あとで何らかの方法でこの件を世間に知らしめてほしい」先生の希望はそれだけだったんだ。だけどオレは直感で危険を感じた。だから、おまえにはこの件に関わってほしくなかったんだ。

先生の孫娘さんから聞いたように、オレは人質救出をやったよ。先生から誘拐の話聞いたとき、オレは珍しく論理的に考えた。人質さえ救出できれば、先生は動けるはずだ。だけどこれは絶対に無理だと思った。なにせ現場は中国だからな、ところが偶然居場所が判明した。それがオレのヒロイズムをちょっと刺激してくれた——うまくいったらヒーローになれる——それで思い切って中国に飛んだんだ。

もちろん先生の計画の手助けができるというのが本来の動機さ。だけど今思うとよく行ったもんだ。なぜか怖さは感じなかった——もう一人のオレが、「サブロー、恰好いぞ」って後押ししたんだな。

結果は大成功、帰りの空港ではオレは有頂天だった。ところが日本に帰ってからの運命の大逆転——運命ってこんなにも振れるものかって驚いたよ。

肝心の先生たちが殺されてしまって、オレは考えた——オレに先生の代わりができるはずがない。そこでハリーの知名度に頼ったわけだ。ハリーが発言すればみんなが注目するよね。……ここまでが本当の成り行きだ。

オレが死んだあと、どうなるか？ 想像してみた。
まず、希望的だけど、ハリーは精神的に少し楽になって、自殺は思いとどまってくれる。そして彼へのバッシングは収まるんじゃないかな。

肝心な事、ここからが本題だ。この手紙も含めて、ヨーコ、おまえは全体が掴めたと思う。オレは分かるさ、おまえがオレに代わって必ずこの事件に挑戦するって。

ヨーコ、な、そつだろ？ もう遠回りな話はしたくない、後を頼む。絶対にこの事件を解決してくれ、絶対に。おまえならできる、だけど死ぬんじゃないぞ、オレみたいに。

オレができる最後の事、オレの知ってる限りの情報を伝える。
まず、御殿場のロボット工場に行ってくれ。そこにタワーの危険性に関する資料がある。先生の部屋、そこに入るにはカードと暗唱番号が必要だ。それはオレの机にある。御殿場工場の今井さん、技術の山崎さんを頼ってくれ。二人ともいい人だ。ただ、事件の事は全く知らない。先生も完全に伏せていたようだ。彼らからはロボットの動作について説明をうける必要がある。

なぜロボットって思うだろ？ ロボットに何をさせるのか、ちょっと説明の順が悪かったが、驚くと思うけど、事故でタワーが倒壊する前に、先生が自ら倒壊させて、将来必ず起きる事故の被害を防ぐ。それをロボットにやらせるってこと。とてつもなく、にわか

に信じられない話だよな。だけどタワーの危険性について、先生は論理だけでなく、実際にタワーの脚部を自分で見て、危険性を確認しているんだ。太い脚の裏側に亀裂があることを。

ヨーコ、この作業、人気がいつも観光客がいっぱいのカジノタワーを、一人の犠牲もなく倒す。そんなこと神様でも出来ないと思わないか？

それが、先生の計画を読んでいたら、出来そうなんだ。ただ、オレの解析は道半ばだ、重要なところが解明できていない。その解析も含めてヨーコに頼みたい。やってもらえるか？

とてつもないことにおまえを巻き込んでしまうことになる。もし、もしというより、全部がうまくゆく可能性はすごく低い。その通り失敗に終われば、多くの犠牲者が出て、おまえは大犯罪人になる。こんなにリスクの高いことを、おまえに頼む。……バカを通り越してるよな。

だがな、ヨーコ、先生の予言通り、台風や地震でタワーが倒れたら。同時多発テロを遙かに超える被害になる。タワーの周りのビルが最大七棟巻き込まれて、被害者数は一万余千人になる計算だ。それを知ってしまったって傍観してられるか？ ヨーコ、どう思う？

ゴメン、聞くまでもないことだな。

オレが解析したことを、順に説明する。

まず、実行日は十一月十一日だ。この日に向けて、すでに先生のプログラムはスタートしている。あとで気づいたことだが、先生は事故の直後、最後の力を振り絞って、ロボットにネット経由でスタート信号を送っている。そしてオレには実行日を知らせるメールが届いていたんだ。ロボットにはRD4というプログラムが仕込まれているはずだ、確認してくれ。それは予定日に自動的に動き出す。おそらくロボットはその前に、タワー近くのコンベンションセンターに準備されているだろう。

実行に使われるロボットは四台、R1とR4だ。R1とR2が脚を破壊するロボットだ、海側の脚を二本同時に破壊して、タワーを海側に倒す。そうすれば他の建物に被害が及ばない。ただ、何を使って脚を壊すのか、それが最後まで分からなかった。ロボットだけの力では脚は到底破壊できない。それはMDという略称で書かれている。消火器に似ていると書いてあるが、爆発物ではない。

一番重要なのが、観光客やタワースタッフの避難だ。それについてはR3が最上階にKS（煙幕）を運び込む。煙幕で火事を装って、EA（避難勧告）を出す。タワーが倒れる前に全員が避難したことを確認するために、先生は最上階に留まらなければならぬ。おそらく最上階は煙幕で一杯になっているに違いない。だからその時点から下に降りることとは出来ないだろう。そこでR4が運び込んだLB（救命ポート）に乗って、タワーが倒れた時生き延びる算段だ。だが、「助かる保証はない」と書いてある。……それでもヨーコ、やってくれるか？

この手紙を書き始めて二日目だ。これ以上分かっていることはない。悪いが、資料を見直すことと、御殿場の工場でロボットの知識を得てくれないか。

大事なことは書き終えた。ホツとしたら、ヨーコとの思い出がグルグル出てきたよ。

子供のころ、横須賀の走水（はしりみず）だったかな？ みんなで海水浴に行った時、オレが溺れて、バタバタやってたらヨーコが頭を「バンッ」て叩くんで、冷静になったら

足が立つ場所だって分かったんだ。カッコ悪かったな。みんなに笑われて。

自転車に乗れるようになるのもヨークの方が全然早かったな。オレがガチャンガチャン自転車を倒して乗れないのに、ヨークはスイスイだったもんな。オレ、うらやましいというより、あこがれだった。

中学生になると、オレ、とぼけてたけど、お前の胸が急にデカくなって、気になって、気になって、会うたびに胸、見ちゃうんだ。「オー、あれ、何カッブっていうんだろ」なんてね、本で調べたりして。

高校では学校が別だったからスレ違いが多かったけど、やたら男どもがヨークの家に来てたな。ウロウロして、ヨークを待ってたんだろな。オレ、あんなブスで男っぽい女がなんでモテるんだか不思議だったよ。……ウソ、実は、やや美人に近いと思ってた。

オレが大学に行ってから話す機会は減ったけど、おまえが大工で頑張ってるのを、実は応援してたんだ。ヨーク、スゲエなって思いながら。

今の会社に就職したら、けっこうきれいな娘がたくさんいてさ、何人が付き合ってみただけど、結局、全然本気になれないんだよな、結婚なんかありえない。

ヨーク、おまえはどうだったんだ？ オレ、おまえが彼氏連れてきたら、きっと応援してやったと思うよ。でも、話を聞いたことがなかった。

考えてみると、おまえの相手をできる男って、相当な豪傑じゃないと無理だよな。ちょっとそこらには、いそもない。

それでさ、オレ、バッグをプレゼントしたじゃない、驚いたろう。あれって中国に行く前だった。中国に行く間際になって、不安で不安で仕方なくなったら、急におまえのことが気になってきたんだ。もしかして、もう会えなくなるんじゃないかって思ったら、急にヨークが大切な存在に思えてきたんだ。

横浜公園に行ったよな。あのとき暴走族の邪魔がいらなければどうなったかな？ ……

…ヨーク、おまえどう思った？

ヨーク、おまえ、いい女だ。告白するよ。おまえが好きだ。

へへッ、死ぬ前の告白になっちゃった。オレってダサイやつだな。

ヨーク、きつと生き延びてくれ、たのむよ。

ヨーク、ヨーク、ヨーク、これでお別れだ』

手紙には消しゴムの粉がたくさん乗っていた。手紙を読み終えて、陽子は粉を払いながらつぶやいた。「三日間、これを書いていたのね……」

陽子は手紙をたたみ、一点をずっと見つめたまま、動かなかった。不思議に涙は出ない。朝になった、電話が鳴った。サブロウのお母さんからだった。「サブロウが事故で死にました。今朝横須賀警察から電話があって……」それ以上は言葉にならなかった。お母さんは親戚の家から今朝帰ってきたところだった。

陽子は横須賀に飛んだ。

警察でサブロウの遺体と対面した。思ったよりも遺体はきれいだった。警察の話では、道路の高いところから猛スピードで海に飛び出して海面に激突したらしい。溺死だが、海に落ちた衝撃で、意識はなかったと思われるとのことだ。陽子はヘナヘナと椅子に倒れ、ぐったりとした。少しずつ涙が出てきた。「カーラーズ、なぜ鳴くのー、カラスの勝手

でしょー」陽子は子供のころサブロウと一緒に歌った歌を小さな声で口ずさんでいた。

「星 陽子さん……」陽子は警官の声で我に返った。

「親戚ではないが親しい友人ということでしょうか？」

「あ、はい、そうです、隣に住んでいます」

「どうも事故の状況からして、自殺の可能性が高いんですが、なにか心当たりはありませんか？」

「そうですね、前日に仕事の事で相当に落ち込んで感じましたから、それが自殺に繋がった可能性が高いと思います」

「なるほど、それで車の中に、遺書のような文書があったんですが、ちょっと違和感があるんです」

「文書の中に、『世間に知らせてください』と書いてあります。一応親族に確認を取ってからお見せします」

警官はサブロウのお母さんに連絡を取った。

「こちらに向かう直前だったので、まだご在宅でした。星さんなら見せてよいです、とのことですよ」

ビニールバッグに入った文書は濡れていなかった。

『ハリリーさんにお詫びいたします。 田中 三郎

私はハリリーさんを騙して、彼にブログでウソの情報を流すように仕向けました。

事の次第を次に書きます。

私はある人からカジノタワーの施工業者である上羽建設を貶めるため、嘘の情報を流すように依頼されました。それは上羽建設さんと競合関係にあるX社の人です。社名は明かせませんが、私は金銭を受け取り、ハリリーさんを利用するのが効果が大きいと考え、ハリリーさんを騙してブログにウソの情報を載せさせたのです。ところが、裏付けのないでっ上げの情報だったので、ハリリーさん自身が追及される事態になってしまいました。私はあわてて嘘情報の主だと名乗り出たのですが、相手にされませんでした。

私はハリリーさんの名誉回復と、有名人の不祥事ネタに夕力るマスコミに自殺をして抗議いたします。ハリリーさん、申し訳ありませんでした』

陽子は絶句した。サブロウ、悔しかったでしょう……こんなに悪人ぶって、あなたは本当に真つ当に正義を買ったのよ。そしてハリリーへのお詫びもした。「サブロウ、いい男だね。

私も告白する。あなたが好き！ あの世で結婚しよう！」と、心で叫んだ。

「星さん」

また警官が声をかけた。

「田中さんが身に付けていたブレスレットがありまして、『星 陽子』と書いてあるので、星さんがお持ち帰りになったらどうですか？」

警官は皮のブレスレットを渡してくれた。手書きで『星 陽子』『3260』と並べて書いてあった。「ふふっ、何で名前を数字で書くの、テレ屋だね。これは形見だわ、大事にしよう」陽子は小さくつぶやいた。

サブロウの葬儀は質素に催された。陽子は告別式の時、サブロウに話しかけた。

「残念だけど、当分天国で結婚できないよ。私、死なないから。おばあさんになるまで待つてね」それは陽子の戦闘開始の合図だった。

陽子は翌日のテレビをチエックした。あれほど連日ハリーをバッシングしていたワイドショーが一切その件を取り上げていない。「そういうことね、もうハリーでは視聴率が取れないってわけ。サブロウ、少なくともハリリーの件は終息したよ。次はタワーだね」

サブロウの葬儀が終わると陽子はすぐ御殿場のロボット工場へ飛んだ。

「以前、田中さんと一緒に来られた方ですね。覚えています」工場長の今井さんが迎えてくれた。「田中さんが大変なことになって……」

感傷に浸っている場合ではない。陽子は今井さんに掛け合った。

「今井さん、私、田中さんに代わって、先生に頼まれたことをしなければなりません。が、宜しいでしょうか？ 部屋の入室カードは引き継いでいます」

「ああ、私たちも先生がご存命の時に指示された仕事が半年分残っています。先生のためにも全部きっちり終わらそうと思っていたところです。いっしょにやりましょう」

今井さんと技術の山崎さんが協力を申し出てくれた。——これは助かる。

「真っ先にお尋ねしたいんですが、十一月十一日に何か大きな仕事がセットされていないでしょうか？」

「ああ、よくご存じですね、その日は『ロボット消防士』のデモ日になっています」

「場所は横浜でしょうか？」

「その通りです、その件は先生からお聞きになっていますか？」

「ええ、」

「そうですね、私どもと先生たち以外は知らないはずの仕事ですので」

サブロウの話が確認できた。CC（コンベンションセンター）に間違いない。

「すみません、その日だとあと十日ぐらいですが、準備はどうなんでしょう？」

「実は先生たちが事故でお亡くなりになる前日に準備が整いました。先生と福田さんは数日かけて動作を確認しまして、帰る途中の事故だったんです」

「もうちょっとお聞きしたいんですが、その日のデモはどんな内容なんでしょうか？」

『『ロボット消防士』と名付けたんですが、文字通り、ロボットが人間に代わって消火器を持って火を消すという内容なんです。初めて見るとびっくりすると同時に、これなら人命救助も出来そうだなと、皆感心しますよ』

陽子は説明を聞いて疑問がわいた。サブロウに聞いたタワーの倒壊計画では、火災になることは想定されていない。あくまでも煙幕で脅して避難に誘導すると聞いている。

「このロボットを動かすプログラムは何ですか？」

陽子の質問に山崎さんが驚いた。

「プログラムの情報は、一般の方は知らないはずだし、説明しても、お分かりにならないと思いますが、先生からお聞きになっているんですか？」

「いや、すごく表面的な情報を聞いただけなんで、もちろん私、全然分らないんですが、……あの、プログラム名を聞きたいんです」

「消防士プログラム名は（RD3）になります。意味は簡単で、第三回のロボットデモプ

プログラムという事なんです」

サブロウに聞いたプログラムは確か（RD4）だったはずだ、そうすると『ロボット消防士』は関係ないのだろうか？ 陽子は自分の（焦りすぎ）に気付いた。——そんなに簡単に分かるはずがない。しかし遠慮している場合でもない。陽子は山崎さんに無理を言った。

「あとう、あつかましいのは承知のお願いなんです、（RD3）のデモを見せていただけないでしょうか？」

「すみません、さきほど言いましたが、先生が来られて、ロボットをチェックしまして、十一月十一日まで、このままにしておくように言われています」

「もし、ロボットの動きなどが見たいようでしたら、予備のロボットがありますのでこちらでご説明できますが」

チェック済みのロボットを「当日まで動かすな」というのが気にかかる。これの他に準備されたロボットがないとしたら、やはりこのロボット群が実行用である可能性が高い。陽子はさらに突っ込んで聞いた。

「これの他に準備ができたロボットはあるのでしょうか？」

「それ以外は特に使用が決まったものではありません」

「わかりました。ありがとうございます。先生の部屋を見せてください」

陽子は初めて先生の部屋に入った。先週サブロウはこの部屋で資料と格闘していたのか、必死に資料をめくっていたサブロウの姿が目には浮かぶ。

「サブロウ、こんどは私がやる番、分からなったら助けてね……」陽子は小さくつぶやいた。

書類は整理されていた。陽子はもっと書類が散乱しているだろうと予想していた。「サブロウにしては、きちんとしている」

「あれっ、椅子が倒れたままだわ……」陽子は椅子を立てようと背もたれに手をかけた。「えっ、」つぶれたゴキブリが目に入った。内臓が飛び出しているが、もう干からびている。

事故のあと、この部屋にはサブロウしか入っていないはずだ。サブロウがやったのね、陽子は言いようのない気持ち悪さを覚えた。

「甘い気持ちではダメ」ってサブロウが言ってるのね……陽子はあらためて気を引き締めた。書類を三時間、じっくり読んだ。だいたいの流れは分かった。サブロウが解明できなかった（MD）が最後の謎だ。これが分からないとロボットがどうやってタワーの脚部を壊すのか、そのために何をしたらいいのか、何を準備するかが分からない。

サブロウも当然、いろいろなアプローチでこの略称を調べたはずだ。直径二メートル以上の鉄の塊。厚さも二十センチ以上。うーん、あんな大きくて厚いものを壊すってどんな方法があるの？ 陽子は頭をひねった。

壊すと作るは意外と近い関係。大工である陽子は、家を壊すのがそれほど簡単ではないことを知っている。素人に家は壊せない。まずあの脚がどうやって作られたか、それを考えた。

もういちど一度先生の資料を見よう。陽子は資料を見直した。（所見）のところに記述

があった。

『三、下部特殊環状脚部についての所見・・・抗張力鋼材使用のサブマーシブ溶接による環状部材と推定されるが、材料鋼板の板厚過剰につき、熱処理等の不完全が予想される。故に不可。』

これが脚の部分の先生の見立てね。抗張力鋼材って、たぶん強度の優れた鋼材っていうことだと思う。だけどサブマーシブ溶接って何？ 職人仲間に溶接屋がいるから聞いた方が早い。陽子は知り合いの溶接屋に電話をした。

「圭介、仕事の話じゃないんだけどさあ、あなたサブマーシブ溶接って知ってる？」

「サブマーシブ？ 知らねーな。オレたちがやる溶接じゃないな」

「おやじ、サブマーシブ溶接って知ってるか？」

圭介がおやじさんに聞いてくれた。

「聞いたことはある。詳しくは分からないが、それは溶接屋というより、規模の大きな鉄鋼メーカーでやる仕事だぞ。メーカーに聞いてみな」

「いや、オレが聞いてやるよ、鉄鋼材料屋に聞けば、そこからメーカーに聞ける」

「すみません、お願いします」

「いいよ、あとで伝える。おまえんとこ景気どうだ？ いまどこの現場？」

「いま、仕事じゃないの。ちょっとヤボ用」

「そうか、あとでな」

おやじさんの連絡を待つことにした。

次の記述、（材料鋼板の板厚過剰につき、熱処理等の不完全が予想される）これが先生の言う、「亀裂を確認した」ということに繋がるんだと思う。

携帯が鳴った、おやじさんからだ。

「分かったよ、それはやっぱり普通の鉄工所じゃなくて、鉄鋼メーカーで分厚い板を丸めてパイプみたいなものを作るときにやる特殊な溶接だって」

それだ、あの脚部はそういう作り方だったんだ。陽子は納得した。

「ありがとう、おやじさん、知ってたら教えて。その分厚い板を熱処理ってどうやるの？」

「おう、熱処理って、オレたちの普通の言い方だと、『焼き入れ』っていうよな。分厚いってどのくらい？」

「二十センチ以上」

「二十センチ！ そりゃ難しいぞ」

「さっき言った分厚いパイプの焼き入れはどうですか？」

「あのな、そんなもの焼き入れなんてできないよ。無理、無理。戦艦大和の大砲だって板の厚さは十センチくらいだぞ。あれはちゃんと熱処理されていたらしいが」

「無理に焼き入れしたらどうなるの？」

「焼き入れて無理にやったら割れるよ、返って強度は落ちる、そんなもの怖くて使えない」

先生の指摘はまさにそれだ、中国で強引に熱処理をして、不良なものを使ったということ。先生は亀裂を確認して確信を持ったのね。陽子は納得した。

「おやじさん、ありがとう、すごくよく分かった」

陽子は電話を切ろうとしたが思い出した。(MD)は？

「ちよっと、ごめんなさい。おやじさんMDって何ですか？

「MD？ 知らないな。何だそれは」

「分厚い鉄のパイプを壊す何らかの道具なんだけど」

「さっきの話のパイプ？」

「そうです」

「うーん、そうだな。…素人は爆破するとか考えるだろ。爆破じゃ壊せないな」

「何か方法がありますか？」

「じゃあ原爆なら壊せるかって、それも無理なんだよ」

「原爆でも無理？」

「そう、第二次大戦後、戦艦長門を原爆で壊そうとした話知ってる？」

「知りません」

「原爆の破壊力の実験だったんだ。海に浮かべて原爆を落とした」

「どうなったんですか？」

「結局沈んだけど、バラバラにはならなかった。鉄って丈夫なんだ」

「どうやったら壊せるんですか」

「ふふっ、オレなら壊せる」

「えっ、原爆でも壊せないものをおやじさんが？」

「壊せる」

「どうやるんですか、教えてください」

「あんたアセチレン溶断って知ってるだろ」

「あのバーナーみたいなものでシユパーって溶かすやつ」

「そうそう」

「あれで二十センチぐらいの厚さの鉄が切れる」

「酸素とアセチレンのタンクを持って行ければ、オレでもできる」

「それってMDって言いませんか？」

「MDなんて言わないな。溶断だよ。英語だとメルトダウンだな。おお、略せば確かにMDになるな……」

「メルトダウンって原子炉の炉心溶解のことじゃないんですか？」

「ちがうな、溶断っていうのはもともと英語でメルトダウンって言うのさ、誰かが同じ言葉で原子炉に適用したんだろ」

「そうか、MDは溶断の略称だったのね！ 陽子は飛び上がりそうになった。」

「おやじさん、ありがとう。すぐ助かった、ありがとう」

「おいおい、そんなに感謝するようなことか？ それじゃ、溶接の仕事あったらうちに回してな。よろしく」

ついにMDの意味が分かった。陽子はこれで完全に計画の流れが見えた。

ロボットが酸素とアセチレンのタンクをタワーの脚のところに運び込んで溶断してしまうわけね。アセチレン溶断って百年も前からある技術じゃない。ハイテクの極致と言われているタワーを壊せるのは百年前の技術って感慨深い。これは私たちの盲点ね。ハイテクにはハイテクって思いがち。やっぱり先生はすごい、古い技術の意味、分かっている。

陽子は考えた。自分にできることは何か。ロボットが破壊を実行するとしても、自分は

ただ見ていられるだけでいいはずがない。先生と福田さんがやるうとしていたことを代りにやらなきゃいけないんだ。

「星さん」

今井さんが声をかけた。

「もう定時なので帰りますが、まだ残られますか？」

もうそんな時間だ、資料を見ていて時間の観念がなくなっていた。

「すみません、今日はこれで帰ります」

計画の全体像が見えてきたことで、陽子は冷静になった。横浜に帰って調べることがある。今井さんに戸締りを任せて工場を出た。

翌日、陽子はカジノタワーに向かった。——どうしても確認したいことがある。

きょうもタワー周辺は、かなりの人出だ。平日にもかかわらず観光客が多い。このタワーは、かなり高い展望台まで無料で上がることができる。それが人気の理由なのかもしれない。営業的には大成功だ。

陽子はタワーの前に立って真上を見上げた。……これを倒す……数週間後、自分がその実行者になっている……夢の世界と現実、現在と未来が陽子の中でグルグル回った。……一瞬、間をおいてゾクツときた。

「あっ」陽子は一瞬めまいがしてふらついた。

「ハハハッ」私って、おじけづいてるのかもね。陽子は苦笑した。

気を取り直した陽子は、さっそくタワーの脚部に向かった。

「アレッ」入れない。

以前に見に来たときは、タワーの脚部は完全に開放されていた。——というより、タワーの丈夫さをアピールするようなコーナーになっていた。そこは今、フェンスで囲まれて近づくことができない。ガラス越しに遠くから見るように変更されていたのだ。

相当警戒してるな……陽子はその理由が分かるだけに、タワー側の姿勢に嫌悪感を持った。

フェンスは、高さ二メートルぐらい、脚部までは三メートルぐらい離れている。陽子はフェンスの周囲を見回した。警備員らしき人も見当たらない。そしてファンスの末端にパンフレットを置く一メートルほどのテーブルがある。

「いける……」陽子は人通りが少なくなるタイミングを待った。

大工である陽子は身が軽い。この程度のフェンスを乗り越えるのは簡単だ。

「よしっ」一気にテーブルを利用してフェンスを乗り越えた。近くの人たちは陽子の一瞬の行動に、あっけにとられているだけで、声をあげる人はいなかった。

中に入ると陽子は急いで脚の裏側に回った。この位置だと外からは見られない。持ってきたLEDライトで脚の表面を照らした。

「あっ」陽子は思わず小さな声をあげた。丸い脚の中央部の色が左右で少し違う。その部分はおよそ七十センチほどであった。さらにライトの角度を変えてみると。「あるっ」陽子は真つすぐな亀裂を確認した。たしかに言われないと気付かないほどの細い線が見える。

「これだわ、間違いない……」陽子は身をひるがえして反対側の脚も見た。「こっちの方がひどい……」それは亀裂の長さが一メートルほどもあった。

関係者は間違いなく亀裂に気づいている。だから隠ぺいしようと大急ぎでフェンスを立てたのね。

全部本当だった。帰りの車の中で陽子はあらためて怒りがこみ上げてきた。

翌日陽子は朝から御殿場に向かった。行動せずにいられなかった先生の気持ちがよく分かった。絶対に成功させる……絶対に。車のなかで陽子は自分自身向かって何度もつぶやいた。

今日はロボットのことを勉強しないと。工場に着くと陽子は山崎さんに願い出た。

「ロボットの動作について教えてください。使えるようになりたいんです」

——遠慮はしない、教える方はうとうしいかもしれないが食らいつく。——陽子は山崎さんに張り付いた。

「すごいですね、いままであなたみたいに積極的な人は見たことがない」

山崎さんは陽子の申し出を思いがけず好意的に受け取ってくれた。

「いままであなたが見たデモは何でした？ 模型の椅子作りかな？」

「そうです」

「そうか、あれはプログラムがRD2ですね。自動機械との連携を見せるデモでした。ここにはあの機械はないので、一番簡単なプログラムRD1の実演をしてみましょう」

「木の箱を作るデモです。このロボットには先にクギを打つ動作を教えています。ロボットは自分で木の板を取りに行つて、この場所に運んでクギを打ちます。いまからあなたはロボットに場所を教えます」

「ロボットの電源が入ったら、ロボットの背中を開けて、RD1Xのプログラムを探して、その中の(MOVE)を押してください。そうしてあなたはロボットを引いてその場所まで連れてゆけばいいんです」

「じゃあやってみましょう」

陽子は言われたようにロボットを板のある場所まで誘導した。

「はい、そこでロボットの右指をそのボタンに乗せてあなたが一緒に押してください」
言われるままにボタンを押すと「ピッ」と音が鳴ってロボットが起立した。

「はい、それで終わりです。これでロボットはどこに板があるのかを覚えました。そのボタンが(基準点)といって、場所の基準になります」

「いまあなたがやったことをティーチングといいます。あなたがティーチャーね」

「いろいろな動作を全部教えるには半日くらいかかりますが、いちど覚えたら同じことを正確に何度でもやります。簡単でしょ？」

「あのおう、板の置いてある場所が少し動いたらどうなります？」

「いい質問ですね。ロボットは人工頭脳があるので、すこしぐらい場所が変わっても自分で探します。利口なんです」

「もしロボットの移動中にあなたにぶつかったとしたら、ロボットはよろけますが、もとのに戻りますよ」

「要するに基準点さえ教えれば、多少状況が変わっても仕事をしてくれます。そこがただの機械と違うところです。先生のロボットはその能力が世界最高ですよ」

「すごい、こんなに簡単なんだ」陽子は恐れ入った。

「あのおう、表に出ても場所は分かるんですか？」

「分かりますよ、GPSがありますからね」

「冗談みたいですが、歩いて大阪まで買い物に行ってくることができます」

「えーっ、それは……」陽子は仰天した。

「先生はすごいことをやっていました。私たちは先生と一緒に仕事ができることを誇りに思っていました。だから……だから先生と福田さんが亡くなった事が……本当に残念で……私たちだけじゃなく、国にとっても大変な喪失です」

山崎さんは突然涙ぐんだ。陽子も初めて先生に会った時のことを思い出した。あの時すでに先生がタワーの倒壊計画を進めていたとは……先生の行動を知ったいま、その無念さに陽子も、もらい泣きをした。

もっと勉強しないと。……すこし落ち着いた陽子はさらに質問を進めた。

「山崎さん、ビルとか建物の中でもロボットはGPSで歩けるんですか？」

陽子は、カジノタワーの中でロボットが位置を特定できるのかを知りたかった。

「そこまでは無理ですね。一度その場所にロボットを連れてゆくか、あるいは人が事前に実際その場所に行って、GPSの延長のデータを取っておかないと」

「そうか、ということは先生はすでにタワー内のデータを収集してあるはずね」

陽子は納得した。

「すみません、ロボットの力なんですけど、どのくらいですか？」

「なにかを運ぶ力ということですかね？」

「そうですね。たとえば何かを担いで階段を上がるとか」

「階段が一番難しいんですが、実験では約百キロぐらいは運べましたね」

百キロ？ 酸素とアセチレンのタンクは確か合わせて百キロぐらいだ——ロボットは運べる。

これでロボットがタワー内で行動できるということをし、ほぼ確認できた。次はプログラムだ。サブロウの話によると、タワー倒壊のプログラムは、すでにスタートしているという。

それはどうやって調べたらいいんだろう？ 山崎さんはそのプログラムの存在を知っているのか？ 確認する必要があった。

「もうひとつ、すみません。このロボットには（RD4）というプログラムは入っているんでしょうか？」

「RD4？ 知りませんね、このロボットたちには、こんど横浜のコンベンションセンターで実演する『ロボット消防士』すなわちRD3は入ってますがRD4は知りません。

やはり山崎さんはRD4を知らなかった。しかしRD3しか入っていないとすると、実行ができないことになる——確認しなければ。陽子は無理を言った。

「あのロボットたち、一瞬電源を入れたら、動いてしまいますか？」

「いや、それだけでは動きませんから大丈夫ですよ。プログラムを選んでスタートさせなう」

「あつかましくてすみませんが、電源だけ入れてほしいんですが」

「ああ、いいですよ」

二人はロボットの置いてある別室に移った。

「あっ」陽子は思わず小さく声を上げてしまった。陽子には分かった。ロボットのそばに

準備してある消火器らしきもの、一方はあきらかにアセチレンタンク、赤く塗ってあるの
で一見消火器だが、間違いない。そしてもう一方は酸素ガスのタンクだ。山崎さんは気づ
いていないようだが、

「いいですか、電源を入れます」

山崎さんが電源を入れた。

「あれっ、なんか受信してますね……ネットからなんか信号が入りましたね」

「あっ、RD4というプログラムが出ました。これはなんだろう、星さんはこれ、ご存じ
でしたか？」

山崎さんは不思議そうな顔をしている。

「プログラム番号では用途はわからないんですか？」

陽子は尋ねた。

「わかりません、おそらく先生が事故で亡くなる直前に送ったものですね。内容は聞いて
ません、ただ、いまのネットからの信号でRD4は動きだしています」

「じゃあ、ロボットは動き出しちゃうんですか？」

「いや、動かす場所と時間がプログラムで指定されてますから、ここで動くことはありません
せん。RD4はおそらくRD3の改良版だと思えます。その証拠にRD3のプログラムは
自動的に消去されています。先生からは、入っているプログラムを、そのまま使うように
指示をされていますから。私もはそうするだけです」

タワー倒壊のプログラムRD4が入っている、そしてすでに動き出していることが確認
できた。先生が死ぬ間際にRD4を作動させる指令を出したというサブロウの指摘は正し
かった。それならば自分はなんとしてもこのプログラムを完遂をさせなければならぬ。
それにはどうしたらよいか、陽子の行動目標がはっきりしてきた。

消火器に擬したアセチレンと酸素のタンク、その他の器具は完全に準備済みと見るべき
だろう——これらは山崎さんを始めとするスタッフがコンベンションセンターに運び込ん
でくれるはずだ。

なにか計画実行に抜けている事はないか、陽子は計画の流れを一から思い浮かべてみた。
「先生の行動」が抜けている！ 陽子は重要なことに気付いた。先生の計画書には、自ら
の行動が書かれていない——計画書は福田さんとロボットの行動について打ち合わせるも
のだから自分については書く必要がなかったと思われる——それを推理する必要がある。
「山崎さん、『ロボット消防士』のデモのとき、先生も同行される予定だったんでしょ？」
「いや、特に聞いてません。ただ、いつも一緒に行ってますから、私もそう思っていま
した」

「先生がいなくてもデモは行われる？」

「そうです、先生がいらっしゃらなくてもやります」

「今回何かいつもと違うことはありませんか？」

「そうですね、先生と福田さんが消火器を大きいのに変えていましたね。ただそれについ
ては、物が違うことをロボットに再認識させているはずですから、問題ありません。私ど
もはそのまま持ってゆくだけです」

ロボットが動き出す前に先生がすることは何だろう？ ——一番最初にやること——人
の避難しかない——その誘導はどうやって？

陽子は思い出した。S K S（煙幕）の準備はどうなんだろう？

「山崎さん、消防デモのとき煙は出るんですか？」

「ああ、デモですから、イメージを作るために、少し出します。もちろん危険性のない煙ですよ」

「あの丸い容器がそれですか？」

陽子が黄色い容器を指した。

「そうです、今回なぜかいつもの容器が全然大きいですね？ たぶん数回分がまとめて入ってるんじゃないですか？」

「煙を出すには何かで火をつけるんですか」

「いや、燃焼ではないです。化学的な発煙ですね。危険そうに見えるように黄色い煙なんです。安全です。操作も簡単で、赤いスタートボタンを押してからコックをひねると化学反応がはじまり、薬剤がなくなるか、一定時間が経過するかどちらかで発煙は止まります」

もうひとつ確認することがあった。LB（救命ポート）だ。水色の、スーツケースよりも大柄なケースが部屋の奥の方に置いてある。どうもあれらしい。

「あれは何に使うんですか？」

「あれはLB、救命ポートの意味ですが、ロボットが火災現場などで、火の中から人を救出するときに使います。今回あれも交換されて新型になってますね」

すごい、そんなことまでできるんだ。陽子は感心すると同時に疑問がわいた。

「ロボットって、ある程度は自己判断で救出するんですよ、もし人間が二人倒れていたらどちらを助けるんですか？」

「いい質問です、それは救出の基本ですが、どちらを救出するかは、原則的に生存の可能性の高い方を優先します。一つの判断基準としては、ロボットが話しかけて返事が返ってくる方を優先します。今回はデモですので、ロボットが無関係の人、例えば観客などを間違えて救出しないように、暗証、要するに合言葉で判断するようにしています、ケガ人に扮した俳優に合言葉を確認して救助するんです」

「言葉をお話すんですか？」

「会話までできませんが、ロボットが決まった言葉を発して、それに正しく反応できたかどうかで判断します」

「わかりました、友人の田中さんは『ロボット消防士』のデモを見たらいいんですが、私はまだなんでも聞きしますけど、デモは最初に煙を出すところから始まるんですよ」

「そうです」

「それから？」

「ごく簡単にRD3の流れを言いますでしょうか。まず広場に建物の模型を置いて、その中に人が倒れている設定でスタートします。それから火を想定した赤いLED電球が点滅します。次に煙幕を出します。そこまでが火事の現場の再現ですね。それから消防署への火災の通報の音声がでて、ロボット消防士が三台、R1、R2が消火器、R3はカメラとスピーカーと環境センサーを持ってやってきます。現場に着くと、R3は現場の温度、有害ガスなどを測定、人や動物の存在を確認します。同時にカメラを回して現場の状況を本部に知らせます。」

原則的に、本部の指令で消火作業を開始するわけですが、R1、R2は本部の指令がなくとも自己判断で消火をする場合があります。本部で情報が確認できない場合でも、消火だけは早い方がいいわけですから。

もし人がいた場合、R4が出勤します。そこにあるLB（救命ボート）をかついで現場に急行します。LBはボートと呼んでますが、要するに救命カプセルですね。火の中でも人が入って救助されるまで生存できるように作られています。ちょっと見たところ、今回はR4がLBをかついで出てくるプログラムになっていますね。……流れをざっと話すとこんな感じですよ」

「よく分かりました」

陽子は納得した。この消防士デモの流れは、RD4に近い。先生がこのロボット消防士のプログラムをベースに進化させてRD4を作ったのは明らかだ。

自動的に作業をさせるのがプログラムだが、エラーが出た場合、もし想定外の事が起きた場合、どうなるのだろうか？ プログラムにはエラーはつきものだ。陽子は家業の建築の費用の自動計算のため、表計算ソフトの簡単なプログラムを作った経験がある。しかしエラーの連続で挫折しそうになった。先生ならそんなことはないだろうが、プログラムが正しくても現場の状況が大きく変わってしまったら、ロボットは止まってしまはずだ。

「ひとつお聞きします。もし設定と違っていることがあったらどうなりますか？ 例えば……消火器の置いてある場所が大きく違つとか、……消火器が故障で噴出しませんか」

山崎はすぐ答えた。

「消火器の現物を認識させてありますから、場所がちがっていても、それが見える範囲にあれば自分で取りに行きます。消火剤が出なかった場合は、事前に（消火器が噴出した状態）を記憶していますから、（噴出しな）を認識して、代りを取りに戻ります。最初に消火器が見つからなかった場合はそこで停止してしまいますね。それはどうしようもないわけですから。

そうなる前に私たちがプログラム停止の指令を出します。手動で停止させます。ただ、いままで設定と少し違っていたからといって、停止してしまったことはありません。先生のロボットとプログラムは世界中のロボットと比べてもそこが格段に優れているんです」

ロボットの基本的な動作については理解は深まった。しかしRD4の動作については確証がない。この件を知らない山崎さんは、あくまでRD3の小改良とと思っている。RD4を確実に動作させて計画を実行するために、不確実な部分は自分の推理に頼るしかないのだ。

慎重に、確実にロボットの動作を確認していこう。陽子はもう一度スタートのところからシミュレーションを始めた。

実行日は十一月十一日、デモの開始は午後一時と確認した。当然その前に機材はコンベンションセンターに搬入済みだ。デモを行うフロアは、少しだが煙が出ることから、半屋根のある五階となっている。

火事を模した赤色LEDの点灯と煙の噴出を行い、火災の通報を行う模擬放送が流れ、ロボット本部に出勤要請が入る——要請を受けて、ロボットが出動、R3は現場確認をし、本部に情報を送る——本部は状況を判断して、消火命令を出す。同時に火事現場に人が倒れているのを確認し、救命カプセルをR4が現場に持ち込む——人命救助と消火が終了す

る。

陽子はこれにタワー倒壊の計画を重ねてみた。

タワーのスタッフを含めて、最初に全員を避難させなければならない。そのためには、事前にだれかが最上階に行って、まず煙幕を発生させなければならない——そして危険だというアナウンスをする必要がある。この作業は、調べた資料ではR3が行うことになっている。(実行方法)の記述は、『R3はSKSの後、EAを出し、R4は・・・』とあるから、R3が先行してタワーに上り、煙幕を発生して避難警告を出すことになる。

これは無理だわ——陽子は実行に疑問を感じた。先生のプログラム資料では、R1、R2、R3が同時に動き出し、R1、R2は脚部破壊に向かい、R3は別行動で最上階に向かうわけだから、最悪、全員の避難が完了する前にタワーが倒れてしまう可能性がある。これは先生のミスか？ いや、先生がそんなイージーミスをするはずがない。考えてみると、この計画は先生の事故死の前でできていて、実行時、先生は現場にいる前提だ。そうするとR3の作業は先生が自らやる予定だったのではないか？ 先生は午後一時までに全員の避難を完了させるつもりだったはずだ。それならば辻褄が合う。先生はタワーにいて、避難の状況を自分で確認することができる。もし避難遅れが出た場合は、ロボットを止めることも可能だ。

陽子は先生に代わって自分が実行するのに何か問題がないか、考えてみた。

——ロボットが止められない。いままでの流れで推理すると、先生はロボットを止めるための何か——リモコン装置のようなものを持っていなければならない。陽子は山崎さんに尋ねた。

「ロボットの動作を止めるコントローラーのような物って何かありません？」

「ありますよ、リモコンですね。ほら、そこに現物があります」

「これってスタート、ストップ以外にないができるんですか？」

「主に、位置確定のスイッチですね。プログラムの変更とかまではできません」

「リモコンが届く範囲はどのくらいですか？ 五十メートルまで届きますか？」

「いや、これは二十メートルがいいとこですね」

「もっと遠距離に届くものがあると思うんですが」

陽子は先生がタワーの現場で使う遠距離用のリモコンがあるはず、と踏んだ。

「高出力タイプがありますが、それは先生が所有していて、ここにはありません。もしかすると事故の時、紛失したのではないかと思っっているんですが、今回のデモではそれは必要ないです。これで充分なんで」

やはりそうだった、しかしそれが無いということは、すべての計画を時間通りに進めなければならい上に、もし予定が狂ってもロボットを止める手段がないことを意味する。強心臓の陽子であったが、さすがに血の気が引く思いがする。

最上階に行き、煙幕と避難勧告、それを自分が行い、午後一時までに必ず全員を避難させる。タワーが倒れるまでの間に、一階ずつ降りながら避難を確認しなければならぬ。ロボットがどのくらいの時間で脚の破壊ができるのか、一時間か、二時間か、全く予想ができない。こんなにも不確定要素が山積な作業を本当に実行できるのだろうか、陽子は途方に暮れた。

これ以上自分に出来ることは何か、陽子は思いを巡らした。

——脚の溶断にかかる時間が分かれば、かなり予定が立つはずだ。それとコンベンションセンターとタワーの距離の確認。それによってロボットがタワーに移動する時間がわかり、避難にかかる時間が割り出せる。帰って現場を調べよう。陽子は資料をまとめ、工場を離れた。

翌日はデモの日と同じ金曜日だった。午前十時にコンベンションセンターに着いた。五階に上がる。

中央部にイベントをやるような広場があった。周りにぐるっと二段の席がある。

ここでやるのね、出口はどこかしら？ 建物のはずれに割と広い階段があった。ロボットはここから降りるしかないわね。陽子はロボットの歩きを想定して階段を下りた。ロボットの歩みは、ほぼ人間がゆっくり歩く速度だ。

コンベンションセンターからカジノタワーまでは約百メートル、カジノタワーの商業ビルが五階あり、百五十メートルの中央展望台、三百メートルの最上階展望台まで、ずっと階段がある。陽子は一気に歩いて二時間だった。……これなら避難にちょうどいい時間かもね、歩道や階段のつながりも良く、ロボットが歩くにも無理がない。どうも最上階のさらに上に小さな部屋があるようだ、そこまで通常のエレベーターとは別の小型のエレベーターが直通で来ている。おそらく関係者の部屋であろう。

陽子は問題の脚の周辺を調べに地上に降りた。外から脚の根本まで行く道順は幸いにフラットだ。ロボットがアセチレンタンクを運び込むのに障害がない。割とスムーズに運び込めそうね。そう、先生もそのあたりは確認しているはず。

あらためてブーツのような太い脚部を見た。約三メートルまでが異様に太く、それ以上はかなりスッキリしている印象だ。見世物にしているのは主に町側の脚二本だ。海側の二本は特に飾りがなく、脚と同じぐらいの高さにコンクリートの構造物がある。陽子はピンと来た——脚の間にフラットなスペースがある——あそこ、作業しやすいな。

陽子はあらためて最上階に上がった。どの場所で煙幕を出して、どちらの方向から避難誘導すれば効果的かを確認するためだ。

最上階は少し狭いがそれでも二百人ぐらいは入場できる。ちょうどエレベーターと階段の反対側にゴミ箱のスペースがあった。その裏で煙幕装置を作動させることができそうだ。ここからアナウンスすれば、皆エレベーターと階段に逃げるはずね。最上階はこれで決まった。

次は中央展望台だ。ここは広い。少なくとも六百人ぐらいは入れる。ここも基本的には同じような構成だった。やはりゴミ箱スペースが利用できる。

最後は五階立ての商業ビル。ここは最上階で煙を出せば、下の階まで煙が降りる。結局三か所でそれぞれ同じ行動をすることにした。おそらく先生も同じ考えだったに違いない。山崎さんが気づいたように、煙幕装置が複数回使用ができるように改造されていたからだ。カジノタワーの視察で陽子は先生の狙いがだんだん見えてきた。強烈な不安感はずしずつ収まってきている。

残るは脚の溶断についての情報だけだ。陽子は帰宅するとすぐに、溶接屋のオヤジに電話をかけた。

「オヤジさん、また溶断のことで教えて」

「いいよ、なに？」

「このまえ聞いた二十センチの鉄板だけど、溶断するのにどのくらい時間がかかるの？」
「ああ、あれか。切れるって言ったけどな、実際に二十センチを切ったことはないよ。オレの仕事でそんなもの将来もないしな」

「実際には最高十センチだな」

「それでどのくらい？」

「その前によ、切るって言ってもよ、ただ切るのと、きれいに切るのじゃ全然ちがうぞ。切るだけだと切った跡が傷んで、材料としてはペケだからな」

「そうかもね、いちおう切るだけの話で教えてよ」

「そうよな、火が抜けるのに十五分ってとこかな。火が抜けるって分かるよな、炎が最初に貫通するってこと」

「抜けちゃうと早いけど、十センチもあると一センチ切るのに一分ぐらいかな。だから十センチの長さを切るのに十分ってとこ、もし二十センチの厚さだったら十センチ切るのに二十五分はかかると思うよ、言っとくけどオレの感だよ、感……」

「それとな、そんだけ厚いとガスが持たないぞ、酸素ビンが空になっちゃう」

「あっ、酸素ビンって、タンクのことな、おまえ知ってるよな」

「わかるわかる、おやじさんありがと。あっ、ちょっと待って」

陽子はこの際、おやじさんにダイレクトに聞いてみようと思いついた。

「おやじさん、カジノタワーって知ってるよね」

「ああ、横浜のдар、知ってるさ」

「冗談だけどさあ、あれを解体するとしたら、おやじさんだったらどうやる？」

「ハハッ、おまえ、前から変わった女だと思ってたけど、本物だな」

「言っとくけど、マジに答えないぞ。……そうだな、オレだったら、あの根本は避けて、そのすぐ上を切るな。あの根本は異常に太すぎて、厚さ二十センチ以上あるかもしれない。けどすぐ上は厚いけどまあ、あり得る太さだよな、だからあそこを狙う。あれだとたぶん厚さが十から十五センチぐらいだろうな。あそこだったら全部切らなくても、三分の一ぐらい切ったらかなりヤバくなるぞ。半分切れば間違いなく倒れる。倒しちゃえば地上だからその後は簡単にバラせる」

「オレは解体屋じゃないけど、プロだったら必ずそうすると思うよ」

おやじさんの見解は明確だ。おそらく先生も同じアプローチで倒すことを考えていたはずだ。ここで肝心なことが分かった。おそらく脚の溶断は三十分から一時間ぐらいだ。

これでかなり煮詰まったスケジュールが組める。それ以上細かく考えても意味がない。あとはぶつつけ本番の対応力ということになるだろう。陽子の腹は決まった。

十一月九日、陽子はサブロウの墓参りをした。サブロウ家の墓はちょっと変わっている。墓石がアニメのガンダムのような格好で墓地でもひとときわ目立つ。サブロウの父親が亡くなった時に建てたものだ。陽子は墓前に立った。

「サブロウ、あんたって自分のためにお墓作っちゃったんだね。似合ってるよ」

「いよいよあさってやるよ。もう準備万端、これ以上やることない」

「自信？ ないよ……こんなこと自信あるわけじゃないじゃん」

「全部うまく行ってもさ、あたし、生きられるか分からない」

「サブロウ、運命ってなにさ……あたし、昨日じっくり考えたの。結果が良くても悪くても何かを達成しようとして、がんばって、それで死んだらいい人生だったって思えるよね。そうなる運命だったら、それも良かったってことになるのかな？ あんた自分を貶めることになって死んで、悔しかったでしょう。だけどあたし、最後にあんたの本心を知って、私が危険な事にならないようにしてくれたってことが分かって、……うれしかったよ。ほんとに。最後に『いい女だ』って言ってくれたよね……あとで思うと、あれって最高。人生で一番うれしいこと」

「だからさ、もう最高を極めちゃったからさ、死んでも悔いはないよ。でもその前にタワーのボスに一撃食らわしてやる。見ててね……」

陽子は墓地を後にした。

十一月十日、陽子は母とサブロウの母と一緒に食事に誘った。母どうしも姉妹のように仲がいい。二人はけっこうお酒を飲んでご機嫌であった。

家に帰ると母は早々に寝てしまった。陽子は枕もとで正座し母に深々と頭を下げた。

「お母さん、孫を見せられなくてごめんね、これでお別れかもしれない。お世話になりました」

十一月十一日、いい天気だった。陽子はスーツケースにメガホンを入れ、母には一泊旅行と伝えた。

八時にコンベンションセンターに着いた。山崎さんたちは九時にやってくる。カジノタワーがいつもより大きく見える。風はない。

「おはようございます」工場長の今井さんと山崎さんが到着した。

「おはようございます、天気いいけどちょっと寒いですね」

五階は半屋根のため、この時期はちよつと寒い。山崎さんたちは、そそくさと準備を始める。陽子もロボットの運び出しを手伝った。

ロボットのデモは午後一時から始まる。ということはロボットが動き出してからカジノタワーまで移動に二時間かかるので、陽子は午後一時に合わせて発煙を開始することになる。ロボットが到着するところにはタワーの全員が避難を終えていなければならない。陽子は発煙装置に注目していた。デモが開始する前に発煙装置を持ち出さなければならない。そのため陽子はわざと装置を消火器の後ろに移した、持ち出しが発覚しないように。

約一時間で準備は整った。山崎さんたちはこの『ロボット消防士』デモは、もつ三度目だそうで、慣れから非常にリラックスして雑談に夢中だ。

お昼になった。山崎さんたちは昼食に陽子を誘った。

「ちよつとカジノタワーを見たいのでお昼は自分で食べます」

「そうですか、じゃあ一時にデモは始まりますから、見に来てくださいね」

山崎さんたちは食堂に向かった。

今だ、陽子は発煙装置をスーツケースに入れた。

早く、早く、十二時半までにタワーの最上階まで発煙装置を上げなくては、時間に余裕はあるはずだが、気は焦る。

十二時二十分、陽子は最上階の展望台に着いた。見回すと観光客は百人ほどだった。

「フーッ」陽子は深呼吸をした。ついに始まる——自分ってこんな精神状態になるんだ。

陽子は意外に冷静な自分に驚いた。スーツケースを開けて発煙装置を取り出し、ゴミ箱の後ろに置いた。

そうそう、——マスクをしなきゃ。陽子はマスクをすることを忘れていた。

「実は焦ってるのかな」陽子はひとりごとをつぶやきながら発煙装置を作動させた。

「シューッ」少し間をおいて、黄色い煙が出始めた。

陽子はメガホンを取り出し、ポリウムを最大に上げた。

「火事です！ 有毒性のガスが出ました。まだ大丈夫です。みなさん慌てず、階段がエレベーターで避難してください。エレベーターは大丈夫です。慌てないでください！」

「ヒイツ」

黄色い煙を見て、みんなが動転した。エレベーターは二台あるが、両方とも一瞬で満員になった。

「階段は安全です。外に出れば大丈夫です。押さずにゆっくり逃げましょう！」

陽子の重なる案内に、皆は冷静さを取り戻した。

時計を見た。ちょうど午後一時だった。

コンベンションセンターでは、山崎さんがロボットのスイッチを入れた。

「ヒューーン」ロボットが一斉に動き出した。デモの始まりだ。

「あれっ」山崎さんが叫んだ。

ロボット三台が一斉に階段の方に向けて歩き出した。

「エラーだ、動きがおかしい！」

「止めて、止めて」

今井さんが大声を出した。

「止まらない！」

今度は山崎さんが叫んだ。

「リモコンが効かない。こんなこと初めてだ」

二人の叫びをよそに、ロボットは階段を降り始めた。

消火器を持ったR1とR2、それにLB（救命カプセル）をかついだR4が続く。R3は停止したままになっている。

展望台では、ほとんどの人が避難を終えた。

「ガシャン」上の方から音がして、階段が降りてきた。

「ナンだこれは？」

強い調子で叫びながら太った男が階段を降りてきた。

白だった。

「ナニこの煙は、あなただれ？」

陽子はこの人が中国人の白だということが一瞬で分かった。

「白さんね、あなたすぐ逃げないと死ぬわよ、この煙は猛毒！」

陽子が叫んだ。

「アフワウ」

白は言葉にならない声をあげ、小型エレベーターに駆け込んだ。

エレベーターが下がり始めるまで、二人の目があった。

白さんは陽子を睨んだまま下降を始めた。

「OK、次は中央展望台ね」

陽子は下に降りた。

一方ロボットはコンベンションセンターを出て、カジノタワーに向かって進行中だった。最上階展望台から脱出した観光客が一階に着き、タワーに何かが起きていることが伝わり始めた。

「火事みたいですよ。すごく危険そうです。黄色い煙が充満してます」

「消防、消防、だれか百十九番した？」

次第に騒然となってきた。

タワー周辺の人々も異変に気付き始めた。最上階から煙が漏れている。ロボットはタワーに次第に近づき、周囲が注目しはじめた。

「あれってロボット消防士じゃない、オレ、デモを見たことがある」

「消防より早く駆けつけるってすごくないか？」

陽子は中央展望台で発煙を始めた。悲鳴は聞こえるが、上から情報が降りたせいか、すでに避難を始め、観光客は半分程度になっている。

中央展望台も、あっという間に煙が充満した。陽子は避難状況を見ながら商業ビルにまで降りた。ここまでの流れは予定よりずっと早い。

陽子は急いで煙幕を張った。ビルの五階に煙が充満し始めたころ、消防車のサイレンが聞こえ始めた。

「おそいな、もう煙で一杯だぞ」

ロボットがタワーの下に到着した。これも予定よりずっと早い。消防車とロボットが交錯する状況になってしまった。消防隊の方が戸惑っている。

「消防遅い！ ロボットにやらせろ」

ヤジ馬はロボットに興味がある。

ロボットは当然、消防隊を全く無視してタワーを上り始めた。

「ロボットの方が仕事が早い、消防、なにをモタモタしてるんだ！」

消防車が次々到着するが、勝手が違って混乱をきたしている。

「ケガ人はいますか？」

「なにか中毒症状は出ていませんか？」

消防隊は情報収集を始めた。

「煙に毒性はないようだ」

「ケガ人も全く確認されていません」

「燃焼も確認されていません」

「それじゃあ無理に突入する必要はない。待機して煙が引くのを待つ」

消防隊の対応が決まった。遅れてマスクミが到着し始めた。

「東洋テレビです。いまカジノタワーに到着しました。現場はかなり混乱しています」

突然テレビのワイドショーが中断して緊急中継の画面に変わった。

「はい、こちらスタジオです。いま、緊急映像を流しています。横浜にあります通称カジノタワーが火災という情報が入りました。いま、カメラは現場を映しています」

「横溝さん、画面で煙が見えますが、燃えているのはどのあたりですか？」

「はい、タワーで人のいる場所全部に煙が充満しているが確認できています」
「火災ということですが、何が燃えているのでしょうか？」

「わかりません、情報が錯綜しています、猛毒の煙が出ているという情報があります」
「毒性の煙といいますと、テロの可能性が出てきますが、その辺の情報は？ 消防の方から何か情報が出ませんか？」

「はい、まだ消防からは情報がありません。いま確認中ということで」
「煙の情報はどこから入ったものでしょうか？」

「避難した観光客から出た情報です。毒性の煙で危険だとアナウンスを聞いた人がいるらしいです」

「はい、一旦スタジオにカメラを戻します」

「いろいろと話題のカジノタワーなんです、午後二時に火災発生の情報が入りまして、移動カメラが横浜からの画像を引き続き流しています」

「事故なのか、あるいは何らかのテロなのか、引き続き画面の一部に映像を流し続けます」
司会者がコメントーターと話を始めた。

「ケガ人の情報は出ていないんですか？ 火災でもテロでも人命にかかわることなら一大事なんです……」

「あれっ、ちょっと画面に変なものが写ってます。なにか宇宙飛行士のような白い服に白いヘルメット、人が取り囲んで一緒に移動してますね。あれは何ですか？ 消防の特殊部隊みたいに見えますね。……かなり大きな消火器みたいなものをしょっていますね」

皆がロボットの存在に気付いた。

「横溝さん、横溝さん聞こえますか？ いま画像に宇宙飛行士みたいな人が三人ゆっくり移動しているのが見えてるんですが、どういう状況でしょうか？」

「はい、こちらも確認しようとしています、消防ではないようです」

「えっ、消火器のような物を持って移動しているんで、消防ではないという何なんですか？」

「えー、いま情報が入りました。あれはロボットです」
スタジオが騒然となった。

「ちょっと訳がわからんな、あれがロボットだとして、消火器を持ってきているのに消防ではないって、どういうこと？」

「横溝です。消防隊はロボットについて全く情報がなく、どう対応してよいか混乱しています。」

「消防が知らないというのは解せないな、あれが消防と関係ないと言われても」

「横溝です。いま、ある方からかなり確実な情報がありました」

「はい、伝えてください」

「あのロボット三体は、近くのコンベンションセンターで消防のデモンストレーションをするはずだったのが暴走してしまったという情報です」

「えーと、ますますわからなくなりました。その情報は確かなんですか？」

「はい、ロボットの持ち主からの情報ですから確かです。制御が利かなくなっって止められなかったと言っています」

司会者は困惑してコメントーターに話を振った。

「金城さん、私、頭が混乱して整理がつかないんですが」

「あれがロボットという事を聞いて思ったんですが、いま聞いた内容から推測すると、たまたま近くで消防のデモをしていたロボットが、火事の警報を感知して自分で、というか人工頭脳が判断して、デモを打ち切って消火に駆けつけた……ということになりますよね」

「そ、そうですね、だけど——いま、ロボットはすごく進化していると聞いてますけど——そこまで頭いいですかね？」

スタジオで討論している間にR1とR2がタワーの脚に到達した。

「見て、ロボットがなにか始めた！」

「メンテーターの声に皆が画面に注目した。」

R1とR2はそれぞれ海側の三メートルの高さのコンクリート構造物の上に消火器をセツトした。同時にR4は救命カプセルを持って、建物に入っていた。

「もう一体は水色の大きなものを持って中にはいったぞ」

すでに、ほとんどのテレビ局の報道カメラがタワーの前に揃っていた。各局は番組を打ち切り、特番に切り替えた。消防は火が見えないことと、ケガ人がいないことから、煙が消えるまで建物への突入は避ける判断を維持している。タワーの前はマスコミ、ヤジ馬が雑然と入り乱れて右往左往している状況だ。

急にマスコミが何か所に集まり始めた。中心にはあの白さんがいる。

「白さん、タワーで何が起きたんですか？ これは事故ですか、事件ですか？」

「白さん、テロだったとしたら、心当たりはありますか？」

「上の方の階に逃げ遅れた人はいないですか、確認はできてるんですか？」

一斉にマスコミの質問が飛んだ。

「わかりません、私もなにが起きたか全然わかりません」白さんは動揺していつもの勢いがない。

それを聞いて報道記者から追及が始まった。

「白さん、あなたは支配人でしょう、最高責任者が何も分らないって、ここにいていいんですか？」

「事故の状況の把握をしなければならぬ立場じゃないんですか？」

「あなたが一番先に逃げ出してきたって聞きましたけど、それって某国の沈没事故と同じに見えますが」

沈没事故との類似性を持ち出されて、白さんは焦った。

「私は最上階にいました。それだから煙が一番先に気が付いたのよ。それで早く知らせようと思って急いで下におりたのよ」

「白さん、そう言いますけど、火災報知機が押された痕跡がないって消防が言っていました。」

私はさっき消防に聞いたんですが」

「ああ、私は押さなかったね、煙がすごいから、だれかが必ず押すと思って」

「それともう一つ消防が言っていたのが、煙感知器も作動していないって事なんですけど、それだと設備の不具合ってことになるんですが、それについてはどうでしょう？」

「それは大丈夫よ、ちゃんと消防の検査通ってるはずね」

「それが働かなかったわけですよ」

マスコミの追及は続いている。

突然スピーカーの音響が響いた。陽子は商業ビルの五階の窓からアナウンスを始めた。「みなさん聞いてください！ このタワーは一時間以内に倒壊します。危険です。残っている人はすぐに避難してください。繰り返します。このタワーは倒壊します」

「エーッ、」一斉に悲鳴が上がった。タワー下の広場は騒然となった。

この様子は日本中に放映されていた。テレビはアナウンスする陽子と、インタビュウを受ける白さんを同時に映し続けている。

「白さん、これはテロですね。あの女性に心当たりは？」

「知らない、私この女知らないよ。……」

「あっ、わかった。ハリーの仲間ね」

「ハリーがタワー危ないって嘘だったでしょう。あの女ハリーの仲間よ」

「ハリーの件、蒸し返して、私を脅そうとしてるのね」

「あいつも犯罪者の仲間ね。警察、警察きてるでしょ、すぐ逮捕して、すぐに！」

白さんが大声で騒ぎ始めた。

「警察も消防も来てますけど、煙が収まるまでだれも入れませんよ。もし有毒な煙だったら危険ですから」

「いまのところケガ人は出てませんから、あわてて突入する必要がないですよ。逮捕するにしても煙が収まってからで充分ですから」

陽子のアナウンスが変わった。タワーの危険性について述べ始めた。

「みなさん聞いてください。さきほど申しましたようにこのタワーは一時間以内に倒れます。けどそれほど心配はいりません。犠牲者を出さないように準備しました。タワーは必ず海側に倒れます。私はこのあと全員避難を確認するために最上階に戻ります。私はタワーと共に倒れますから、おそらく助からないでしょう。私はこの行動に命をかけています。」

命をかけてタワーを倒す理由は何でしょう？ それは、このタワーが明確に欠陥構造であるからです。それはこのタワー倒壊が成功すれば証明されるでしょう。欠陥は太い脚の部分にあります。先日の台風では運よく倒壊を免れましたが、私は脚に亀裂が入っているのを確認しました。このタワーが次の台風で倒壊すれば、米国の同時多発テロを超える被害が出るのは明らかです。その欠陥の事実を明らかにするため、すでに少なくとも三人が命を落としています。山神先生、福田さん、田中さんです。私は四人目になろうとも行動します」

テレビのコメンテーター全員、および日本中の視聴者すべてが陽子のメッセージに聞き入った。

「おおっ」メッセージの後、タワー下の広場では、大きなどよめきが起こった。

ワイドショーでは再び討論の応酬が始まった。

『言ってることは筋が通ってる。だけど倒すっていうのがどうか？ これは何とも言えないよな』

『これは恐ろしい決断だぞ、倒して、言ってる通りのことが分かれば、超ヒロイン。もし違ったらテロの大犯罪人になる。……オレには絶対出来ないな。そんな勇氣ないよ』

『アナウンスがしっかりしてるから頭に来てるわけじゃなさそうだ。確信をもってやってるのは確かだな』

『その前に、あのタワーをどうやって倒すの？ あのロボットが運んだ消火器が実は爆弾？』

『いや、犠牲者を出さないって努力をしているみたいだから爆弾はないだろう』

『この状況で考えられるのはロボットしかないよな、だけどあのロボットの力で倒せる？』

絶対無理』

話が行き詰まったところで、突っ込むターゲットは白さんに戻った。

現場では白さんが問い詰められていた。

「白さん、あの女性のメッセーはかなり理路整然としているんですが、聞いた感想はいかがですか？」

「いや、全然メチャクチャよ、私、ハリーの時から言ってるね、タワーはとんでもなく頑丈よ。壊せるわけじゃないでしょ。あなた、いまの、この状況よ。どうやって壊すの？ ロボット？ はっはっは、ハネ返されるね。爆弾？ 原爆もってきてもダメって言ってるでしょ。手も足も出ない。煙引いたらあの女、両手挙げて出てくる。これすごく大掛かりな冗談。あいつ気違いね」と、白さんがまた顔を真っ赤にして反論を始めた。

「画面見て！」画面を見ていたひとりが叫んだ。

ロボットは酸素とアセチレンのボンベのコックを開けた。

「パシユツ」ガスに火が付いた。

R1とR2が同時に太い脚とその上のパイプ状の構造材を加熱しはじめた。猛烈な火炎と煙が上がった。

「見ろ！ 火が出てる」

「えっ、あれは消火器だろう、逆じゃないか、消すんじゃないか、放火か？」

「いやっ、もしかしてガスで切断するつもりじゃないか」

「メンテーターの意見が錯綜した。」

「あんな原始的な方法であの太い脚が切れる？ 厚さ二十センチもあるんだぞ、無理だろう」

現場でもスタジオでもいろいろな声が上がった。

じっと画面を見ていたメンテーターが発言した。

「切れるかもな……」

「えっ、本当に？」

「私が学生の時、授業で鉄鋼会社の見学があって、その時アセチレン溶断の実演を見た。あれは自動切断の設備だったが、鉄の厚さは十センチ以上あった。切断の原理は一緒だから切れる。……いま言いながら思ったんだが、あのタワーはボルトを使わないで、ほとんど溶接でできているんだ。その点は東京スパータワーと同じだな。溶かしてくっつけた物は、溶かして離すこともできるわな」

「倒れる……」

タワー倒壊が現実味を帯びてきた。聞いていた他のメンテーターは、ゴクリと生唾を飲み込んだ。

「よく見ろよ、切ろうとしているのはゴツイブーツと言われている脚じゃない、その上の普通の鉄骨の部分だ」

「ブーツの所は厚さ二十センチ以上と言われているが、あそこだったらそこまで厚くない

はずだ。十五センチくらいじゃないか？」

ここでワイドショーの司会が手を上げて「コメントーターの話を止めた。」

「みなさん、話が錯綜していますが、ちよっとまとめたいと思います」

「現在進行中ですが、話をまとめると、ロボットが（アセチレン）というんですか、それを使って脚を切断しようとしている。……ここまではいいですね。切ろうとしている場所は太い脚のすぐ上、そこはそれほど鉄板が厚くない。だからおそらく切れるだろう。ここでちよっと考えたんですが、ブーツの所が問題だと言ってるんだったら、そこをズバッと切ってスッキリしたいんじゃないですか？」

「コメントーターが手を上げた。」

「はい、山口さん、どうぞ」

「逆ですよ。あの女性の発言を聞くと、彼女はタワーを倒してあのブーツの中を見せようとしてるんですよ。だからブーツは壊さない」

別のコメントーターが発言した。

「彼女のメッセージ、思い出してください。タワーを必ず海側に倒すと言ってるでしょう。」

ロボット二体、確かに海側の脚を切っていますよ」

司会がまた手を上げた。

「私、がぜん彼女の発言に真実が出てきたと思うんですが、もし彼女の発言が正しいとすると、あの煙って、タワーの人を事前に避難させるための単なる脅しだったんじゃないですか？」

「コメントーターもうなずいている。」

「私もそう思い始めました。避難した人の話で、（猛毒の煙だ）と思われていますが、被害者は未だにゼロでしょう」

他のコメントーターも続いた。

「火が出ていない、煙の被害もゼロ……これって実に見事な避難作戦じゃないですか」

ワイドショーの雰囲気は陽子の擁護に変わってきた。

一方、タワー下では、白の独演会が続いていた。

「あのロボットは消防じゃなかったのね。いま何してるの、火が出てる。これは放火ね。重大犯罪を止めてください」

白は近くにいた警察官の幹部に詰め寄った。

「警察、何してるの。放火だよ、放火をだまってるの」

警察官は答えた、「いろいろな可能性を想定しています」

「可能性じゃないでしょ、火をつけてるの、あなたも見えるでしょ、止めてください、すぐ」

「そうだ、あれはロボットです。人間じゃない。だから銃で撃っても構わないでしょ、なんでもいいからとにかく止めてください」

警官は冷静に答えた。

「狙撃みたいなことは簡単には実行できません。人命に危険が及ぶ場合じゃないと。今回はケガ人さえも出てませんから。それに現場の位置関係だと、ガスのタンクに当たってしまっ可能性が高い。当たると大爆発になりますよ」

報道陣が白を呼び戻した。

「白さん、スタジオでは、あの女性を擁護する意見が高まっているんですが、どう思われます？ いまのところ人的被害はゼロですけど」

白が眼をむいて怒り出した。

「タワーが倒れたら酷いことになりますよ、何千人も被害が出ます。それでもいいんですか、だからすぐ止めてください」

白の言葉に報道記者がすぐに反応した。

「白さん、あなた、ちょっと前にタワーは原爆でも倒れないって力説してませんでした？」

「ワウツ」

白は絶句した。

しばらく無言だった白が思いついたように騒ぎ出した。

「あの女、ハリーの仲間、これは私を貶める陰謀ね。あの女、いまだどこにいるの？」

「五階からアナウンスした後、避難を確認に最上階に戻ると言っていましたね」

それを聞くと白が大声を出して走り出した。

「あの女、殺してやる！」

侵入禁止のテープの前で白は警官に制止された。

「これ以上入れません、いま煙の危険性を確認中ですので」

「危険、ないよ。私、このオーナーね、自分の建物に入る、許可いらないね！」

白は止める警官を振り切って商業ビルに入ってしまった。

ビルに入ると白は自分専用のエレベーターで最上階に向かった。

そのころスタジオではタワー倒壊の前提で論議が始まっていた。以前の台風の時の論議に使ったタワーの模型が持ち込まれている。

「いいですか、女性の言う通り、タワーを海側に倒してみます」

司会者がタワーを地図上に寝かせた。

「こうなりますね。タワーの下の商業ビルには全くかかりません。海側は道路だけですから、人や車がいなければ被害は出ません」

「うーん、ここまでは計画通り実行されているようです。これは……これは私たちハリ―騒動を見直す必要があるんじゃないでしょうか？」

「これで、もしですが、もしすべてが事実だったら私たち、私も含めてマスコミすべてが深刻に反省しなければなりませんね。特に、もう皆さん忘れてしまっていますが、ハリ―騒動に關した田中三郎さんの自殺の件。それは私たちが追い込んだことになりますよ」

司会者の言葉に、皆押し黙った。

少しの沈黙のあと、司会者が腕を組んだまま発言した。

「この女性はだれなんでしょう？ 一番肝心なこの女性の情報が全く出ませんね」

「あっ、出てますか、ちょっとすみません」

画面の外から合図があったようだ。司会者が画面から消えた。

しばらくして司会者が中央に戻った。

「わかりました、ロボット製作会社の担当者からの情報です。女性は（星 陽子）、なんと自殺した田中三郎さんの隣に住む女性です。職業は大工、田中さんの幼馴染という関係です」

「確かにメッセージの中に、タナカサブロウという名前がありました」
「見えてきました。彼女は田中さんの意思を継いだということですね」

「諸々の事が分かってくると、ある意味不謹慎ですが、私、タワーが倒れてほしいなんて、少し思っちゃうんですがいけませんかね？」という司会者の言葉に反論がない。

ロボットR1、R2による切断作業は続いていた。切断はすでに外周の約半分に達した。一方、陽子は全ての階の避難を確認しながら最上階に達した。

よかった、だれもない、先生の作戦は完璧ね。だれでもあの煙見たら逃げ出すわ。

そうだ、この上にもう一部屋があったわね。白が降りてきた階段はそのままになっていた。陽子は階段を登って部屋に上がった。部屋は円形で窓から三百六十度が見渡せる。

ここが白さんの特別室ね、天守閣ってこと。

「シユーン」音に陽子は振り返った。エレベーターが到着したのだ。

ドアが開くと白と目が合った。

「おまえ、とんでもないことした。すぐにロボットを止める。止めないと殺す」

白が鬼の形相で陽子に迫った。

「ロボットは脚を切り終えるまで止まらない。あれは自動運転よ」

「嘘だ、停止させる手段が必ずあるはずだ」

そう言った白はちよっと思い直したように態度を和らげた。

「あなた名前は？」

「陽子よ」

「陽子さんか、お願いだ。そう言わないでなんとかロボットを止めてくれないか。礼はする。あなたまだ若いじゃないか。金は天井知らずに出す。金だけじゃない、なんでもやりたい事を言ってくれ。どうだ、人生が変わるぞ」

その言葉を聞いて陽子は白を睨み返した。

「そうやってあなたは何人もの人生を変えてきた。……取り返しつかない方向にね」

「ロボットを止める方法？」

「そう、あった……あったわ」

「あなたが殺した山神先生、事故の時、遠距離用リモコンを持っていたの、あれがあればロボットを止められた。あなたが止められなくなったのよ」

「山神先生、……おまえどこまで知ってる？」

「孫娘さんの誘拐のことも聞いた。あなたの悪事はほとんどね。タワーが倒せたら、危険性が暴露される。そうなれば私の言う事が通るようになるわ。もう少しよ、楽しみにしてなさい」

白の目が吊り上がった。

「殺してやる！」

そう叫ぶと、いきなり陽子につかみかかってきた。

「ハッ」

その一声で白の巨体が宙に舞った。陽子は容赦なしに合気道の大技を掛けたのだ。

「アウッー」

全身を床に叩きつけられた衝撃で白は動けなくなった。

もう時間がない。予定ではそろそろロボットが脚を切り終わる時刻だ。陽子は白の巨体を引きずってエレベーターまで引っ張り込まなければならない。

そのころテレビ局のスタジオでは、模型を使ってさらに突っ込んだタワー倒壊のシミュレーションが進められていた。

「この海側の二本の脚が切られるとします。そうするとまず海側に少し傾きます。そして重心は海側に移ります。タワーは支えがなくなってグラグラになってしまいますね。この状態で海から陸に風が吹くと、タワーはちよっと陸側に傾いて、戻る時が危ない。戻ったとき切れている脚は突っ張れないから、切断箇所が必ず海側にズレてしまいます。それで一気に倒れる……」

「警察と消防はどのくらい把握していますかね？」

「画像を見るとかなり前から周辺の人がいなくなってますから、同じような見込みじゃないですか？」

「警察も、倒壊は近いと判断していますね」

「あつ、海の方に艦船が集まっています。やはり海側に倒れると見ているようです」

「うーん重い」陽子はようやく白さんをエレベーターに運び込んだ。一人が立って乗るブライベート用のためにエレベーターは非常に小さい。白さんを座り込んだ格好で納めると、陽子の乗る余地がない。

「ダメ、私は乗れない」陽子はとりあえず白さんを先に地上まで送り出して、自分はメインのエレベーターで降りることにした。

一階のボタンを押して扉が閉まった。急がなきゃ、陽子は振り向いてエレベーターを離れた。その瞬間、

「パンツ」「パンツ」

乾いた銃声が響いた。白は意識のないふりをしていたので。

「あつ」

一発の弾丸が陽子の太ももを貫通した。陽子は大きく転倒した。間を置かず、かなりの勢いで血が流れだした。

「グッバイ陽子、タワーはお前にくれてやる」

陽子に弾丸が当たったのを確認した白は、あらためてエレベーターの下りのボタンを押した。「シューーン」エレベーターは下降に入った。

「ガクン」大きな音が生きてタワー全体が地震のように一度大きく揺れた。

一瞬意識を失った陽子だったが、その揺れで気が付いた。「血を止めないと」陽子はストッキングを脱いで、止血のため太ももの根本をきつく縛った。

陽子は倒れたまま思った。血は止まったけど足がしびれて動けないや。万事休すね。タワーが傾いたのが分かるわ。もうすぐタワーが倒れる……死ぬってどうなるのかな……たぶん痛くないね。一瞬だから。

タワーの揺れは脚の切断が完了した証拠だ。白の乗ったエレベーターは百メートル降りたところで自動停止した。揺れとタワーの傾きを感じたためだ。白は慌ててエレベーター

ーのオペレーションセンターに繋がるボタンを連打した。「出ない、出ない」緊急時の復旧はオペレーションセンターからできない仕組みだ。

ああ、オペレーションセンターにはだれもいない、白は途方に暮れた。エレベーターは地上六百メートルの位置で宙に浮いたようになってる。

「あーっ」、「パンッ」、「パンッ」、「パンッ」

絶望した白は大声で叫びながら拳銃をむやみな方向に発射した。弾丸が尽きて、白はぐったりと座り込んだ。

警察、消防、報道のカメラがあらゆる方向からタワーを監視していた。

「いま、銃声のような音が聞こえたという情報が入りました。事実を確認中です」しばらくして警察から情報が入った。

「情報が入りました、銃声のような音は地上六百メートルのエレベーターチューブから発したのは間違いないようです」

「はい、望遠カメラをそこに向けてます」

テレビは望遠カメラの映像に変わった。

「ああ、止まっています。チューブの中にエレベーターが止まっていますね。透明ですから中が見えます。えーと、人が乗っています。あれっ、窓に丸いヒビが見えます。えー、三か所に穴が開いてヒビが入っています」

スタジオが騒然となった。

「チューブの中で発砲があったということですね」

「なにか大変なことが起きています。乗っている人は大丈夫なんでしょうか？」

「動いてますね、顔までは分かりませんが、比較的大柄な人ですね」

「メンテーターの一人が叫んだ。」

「あれは白さんだよ」

「えっ、分かりますか？」

「あのチューブはブライベートエレベーター。使えるのは白さんと、ごく少数の知り合いだけのはずです。それに白さんは、さっき警察を振り切って建物に入ってるでしょう。」

「いまタワーにいるのは白さんとあの女性だけですよ」

「そうすると白さんが発砲？」

「エレベーターの穴は二方向に開いています。同時に二方向から狙撃されたとは考えにくい。その一方向は海ですからね」

司会者は困惑した。

「白さんが銃を持っているということになると尋常じゃない、問題は白さんの側にあると見なければなりませんね」

陽子の意識はだんだんと薄れてきた。無意識にサブロウと歌ったあの歌を口ずさんでいた。

「カーラーズー、なぜ鳴くのー、カラスの勝手でしょー」……………

「ガシャ」

何か大きな物を置く音がした。しばらくして、

「アンショウバンゴウハ……」、「アンショウバンゴウライツテクダサイ」

だれかが陽子に問いかけている。陽子の意識は薄く、質問の意味が理解できない。「なに?」、「だれ」……

陽子は薄く目を開けた。ぼんやりと人の顔が見えた。「だれ?」

「アンショウバンゴウハ……」

「サブロウ、……サブロウね」

陽子の目にはサブロウが映った。

「サブロウ……これ、ありがとう」

陽子はサブロウの形見、(陽子 3260)と書かれたブレスレットを見せた。

サブロウはブレスレットをじっと見つめた。

「AI(エーアイ) ヘンカンニ キリカエマス」

「モジ、サブロウ、ヨ、スウジ(3260)ニ、ヘンカンシマス」

「アンショウバンゴウヲ カクニンシマシタ」

「えっ、ロボット?」

陽子は始めて声の主がロボットであることを認識した。

ロボットはR4であった。階段を救命カプセルを背負って、二時間かかって最上階に到達したのだった。

R4は救命カプセルを開けると、丁寧に陽子を収めた。

安心したのか陽子の意識はふわっと消えた。

ワイドショーの報道スタジオには緊張感が走っていた。天気予報士が呼ばれている。

「この後の風向きと、風速なんですけど、どんな予報になっていますか?」

「はい、夕方にかけて、風は海から陸に吹きます。風速は具体的には十メートルから十五メートル。断続的に強い風が吹くと予想されます」

「もうタワーはグラグラ揺れてますね。あぶないです。強いのが来て、戻すときにグシャッと倒れるんじゃないですか?」

司会者がマイクを持った。

「みなさん、ずっと続いています特番ですが、最終局面です。もう間もなくタワーが倒れます。そして大変残念なことに、タワーにはまだ、お二人が残っています。一人はタワーの支配人、白さんと確認されました。もう一人は、星陽子さんと判明しています。白さんは六百メートルの高さに中刷り。星さんの消息は不明ですが、白さんが発砲したとの未確認情報があります。最上階で何か事件が起きた可能性が高い。救出活動ですが、この状況ですと全く不可能です。ただただ倒壊を待つのは心苦しいですが、お二人の無事を祈るしかありません」

司会者の話が終わる直前、タワーが大きく揺れた。

「来た!」あちこちで叫び声が聞こえた。

タワーは陸側に大きく揺れたあと海側にゆっくり傾き始めた。日本中が固唾を飲んで見守っている。

「メリメリメリ、金属が変形する特有の音を立てながらさらに傾いてゆく」

「バシューッ」タワーの中央部で大きな火花がいくつも飛んだ。高圧線のショートだ。まるで花火の様に明るい。八百メートルのタワーは非常にゆっくり、スローモーションで倒れ

た。

「バツシャーン」 壮大な水しぶきをあげてタワーが水面に激突した。

「倒れました、倒れました、あの世界一のカジノタワーがいま、倒壊しました。関係者が一斉にタワーの脚に向かっていきます。幸いにも鉄骨の倒壊ですのでこの後、連鎖的に被害が出る可能性はほとんどありません。中にいるはずのお二人ですが、お二人とも海に落ちた可能性が高く、いま救命艇が急行しているところです。スタジオに返します」

「はい、スタジオです。ものすごい倒壊でした。あんなに大きなものが倒れるって、大変不謹慎ですが感動的ですね」

「はい、現場です。いま問題のタワーの脚のところに着きました。いまから照明で内部を照らします」

脚の内部が大写しになった。

「おおっ、」

画面を注視していたコメンテーターから驚きの声が上がった。

「これは、……」

映し出された脚の内部は、想像を越えた粗雑さだった。板の厚さは場所によってバラバラであり、かなりの個所で、すでに割れた鋼材が内側に落ちている。パイプ状の脚の内面は、ギザギザで、多くの個所で目に見える亀裂が確認された。

「これはひどい、素人目にもひどさが分かる。展示されている脚部のカットモデルは何なんだ！」 驚きと共にワイドショーの特番は続いた。

タワーの最上階は水面に激突した衝撃で分解した。分解したことで衝撃はむしろ和らげられた。水色の救命カプセルは無傷で波間に浮いていた。それは救助艇によってすぐさま回収された。

幸い陽子にケガはなかった。

「もしもし、分かりますか……もしもし、星さん」

陽子は頬を叩かれた感じに、遠くから意識が戻ってきた。

あーっ、……もしかして私……生きてる……薄目を開けると顔がぼんやり見えてきた。

「あ……サブロー……」

陽子はまた意識が遠くなった。

終わり